SSN 0918-1334

考古論叢 神奈河

第４集

神奈川県における古墳時代の開始……遠藤　秀樹

小田原地域の古墳成立への一視点……滝澤　亮
—小田原市千代仲ノ町遺跡第II地点・
千代南原遺跡第VI地点出土の土器様相から—

相模国府域の様相……明石　新
—国府域内の集落の分析をとおして—

「階段付き地下式坑」について……小山　裕之

資料紹介　川崎市麻生区宮添遺跡の墓壙について……碓井　三子

平成７年(1995)４月
神奈川県考古学会

誌名中の「神奈河」は，鶴岡八幡宮文書のうち，北条時宗が文永３年（1266）５月２日に武蔵目代殿あて発給した下文中の「神奈河」に拠るもので，これが地名神奈川の初出文書である。

考古論叢 神奈河

第4集

平成7年4月

＊目　次

神奈川県における古墳時代の開始 …… 遠藤　秀樹　1

小田原地域の古墳成立への一視点 …… 滝澤　亮　22
— 小田原市千代仲ノ町遺跡第Ⅱ地点・
千代南原遺跡第Ⅵ地点出土の土器様相から —

相模国府域の様相 …… 明石　新　42
— 国府域内の集落の分析をとおして —

「階段付き地下式坑」について …… 小山　裕之　81

資料紹介 川崎市麻生区宮添遺跡の墓壙について …… 碓井　三子　94

神奈川県考古学会

神奈川県における古墳時代の開始

遠　藤　秀　樹

はじめに

神奈川県の古墳についての論文は，その古墳数自体の少なさからか，南関東として一括に論じられることが多い。例えば『古代学研究』123号の「円墳特集」では「東京湾周辺」として扱われ，「最後の前方後円墳特集」では神奈川県は洩れてしまっている。ところが，平塚市真土大塚山古墳や川崎市幸区加瀬白山古墳は関東地方でも出土例が少ない三角縁神獣鏡を出土し，全国的にも重要な位置にある。

そして，『前方後円墳集成』（近藤編1992・93・94）において前方後円（方）墳の存在するすべての県ごとに前方後円（方）墳がカード化され，やっと神奈川県の情報も全国の研究者に伝わったのである。そのなかで神奈川県の古墳の出現について新しい知見を得たので改めて稿を起こした次第である。

ここでは，関東地方の他地域の様相に触れながら，南関東から独立して，神奈川県の古墳の出現について私見を述べてみたい。

1．いわゆる古墳出現期について

弥生時代から古墳時代への墳墓の定義を明らかにしたのは近藤義郎である。近藤は前方後円墳の成立をもって古墳時代と考え，それ以前の墳墓を弥生墳丘墓という名称を用いた（近藤　1983）。具体的には，前方後円墳の特徴として，

(1)　鏡の多量副葬志向

(2)　長大な割竹形木棺

(3)　墳丘の前方後円形

という定型化とその巨大性を挙げた。これらの代表的な古墳は，奈良県箸墓古墳・京都府椿井大塚山古墳・岡山県浦間茶臼山古墳・兵庫県吉島古墳で，これらにその後調査された兵庫県権現山51号墳が加えられた。

都出比呂志は近藤論を補強し，「前方後円墳体制」を概念化した。そして前方部の成立を理解する考えとして中国思想の影響を加える。それは第一に埋葬における北枕の思想，第二に墳丘の三段築成，第三に朱の愛好である（都出　1989）。

一方，これらの考えより古墳の出現を早く考える人々がいる。

まず石野博信は，近藤のいう墳丘墓の段階（庄内期とそれ以前）に前方後円墳・割竹形木棺・鏡等の副葬品を認め，古墳 ＝ 古墳時代としている（石野　1981）。この考えは近年も繰り返し述べられており[(1)]，近藤のいう前方後円墳への飛躍３点を疑問視している（石野　1992）。

次に，杉山晋作は，千葉県の神門「古墳」群の例を挙げながら，木棺・副葬品構成・供献土器組成に古墳との断絶を認めず，古墳の範疇に含めて考えている[(2)]。

近藤・都出と石野・杉山は前二者が歴史的な画期を前方後円墳の出現の段階 ＝「首長霊継承祭祀の場の形式化と荘厳化」として評価するのに対し，後二者は墳丘形態・埋葬施設・副葬品のどの要素をとっても首長権継承の創設であり，その場が古墳であると定義しているのである。

また，関東地方の出現期の認識については大村直，田中新史の考え方がある。

田中は，方形周溝墓から前方後方型周溝墓への変遷過程を設定し，古墳時代を出現期・前期・中期・後期・終末期に分け，「出現期」はガラス玉等の副葬品をもつ埋葬者が一斉に目立ち，墓には規模差が生まれ，方形周溝墓の周溝は辺の中央に通路を設けて，その正面に特定被葬者を埋葬する墳形（Ｂ１亜式）[(3)]が出現し，玉類や短剣の副葬が目立ってくると位置づけている。そしてこの時期の新段階には，千葉県市原市神門の円形墓が含まれるという。土器編年上の上限は庄内式期以前，畿内第五様式亜式および酒津式期併行で，新段階は元屋敷期および月影期新段階で，畿内との対応は庄内古段階直前に比定している（田中　1984）。

一方大村は，定型化した前方後円墳の出現をもって古墳の成立としている。そのため，古墳以前の墳墓は墳丘墓と呼び，土器編年上前期古墳の上限を布留式・五領式併行期に固定し，さらに前期古墳を土器編年との対比によって出現期として二分している。出現期１期は五領１式期に対応し，出現期２期は五領２式期に対応させている（大村　1982）。

この論点の相違については，利根川章彦が述べている（利根川　1991）ように「大村氏と田中氏のそれぞれの考え方が現状の通説的位置を占める近藤・都出学説と石野博信氏らの古墳発生論の見解の対立をそのまま東日本において再現しており，いわば代理戦争のような形になっていることがわかる」と指摘している。

また，土器の編年に依拠して弥生時代と古墳時代を画する考えがある。これは，住居址出土の土器編年から新しい土器群の出現をもって古式土師器のはじまり，つまり古墳時代とするものである。

以上のような論争を踏まえてか，日本考古学協会では，出現期古墳について1981年と1993年の２回，東日本の当該期の土器編年に重点を置き，議論している。

1993年の新潟大会では，事務局案として畿内第五様式から布留式期の土器を８期に分類し，東北，東海，北陸，関東地方の前方後方型周溝墓，大型墳，埴輪等の編年を立てている。

本稿で取り扱う神奈川県に関しては，西川修一が相模と多摩丘陵出土土器を3期に編年し，それぞれ二分する編年案を立てている。これは，1981年の同宇都宮大会の滝沢亮による編年，1992年に東海大学で行われたシンポジウム『西相模の3・4世紀』の比田井克仁の編年などを踏まえたもので，併行関係に多少のずれはあるものの大筋的には違いはない。

本稿では，畿内第五様式から布留段階の土器編年は西川編年を，古墳の編年は『前方後円墳集成』編年（近藤編　1990）を採用することにしたい（第1表）。

第1表　各地の土器編年と前方後円墳編年の併行関係

<table>
<tr><th>新潟シンポ</th><th>西川（相模）</th><th>『前方後円墳集成』編年</th><th>赤塚（東海）</th><th>寺沢（大和）</th></tr>
<tr><td>1</td><td rowspan="6">Ⅰ
Ⅱ</td><td rowspan="6"></td><td></td><td rowspan="5">庄内</td></tr>
<tr><td>2</td><td rowspan="2">廻間Ⅰ</td></tr>
<tr><td>3</td></tr>
<tr><td>4</td></tr>
<tr><td>5</td><td rowspan="2">廻間Ⅱ</td></tr>
<tr><td>6</td><td>布留0</td></tr>
<tr><td>7</td><td rowspan="4">Ⅲ</td><td>1期</td><td rowspan="3">廻間Ⅲ</td><td rowspan="2">布留1</td></tr>
<tr><td>8</td><td>2期</td></tr>
<tr><td>9</td><td>3期</td><td>布留2</td></tr>
<tr><td>10</td><td>4期</td><td>松河戸</td><td>布留3</td></tr>
</table>

2．関東地方の土器と墓制

南関東地方における弥生時代の墓制は方形周溝墓が広く知られているが，方形周溝墓は弥生時代中期の宮ノ台式土器の段階に横浜市歳勝土遺跡にみられるように定着し，完熟度の高い共同体社会がみられる。

地域的にみると，方形周溝墓が認められない東関東東部や礫床墓を採用する赤城山麓，方形周溝墓が一旦姿を消し，また復活する千葉県北部など地域により様々な様相を呈すといった状況である。しかし一部の地域では，方形周溝墓の周溝の辺の一部を掘り残した形

態（田中の言うＢ亜式）のそれが出現し，これを発展させたと思われる前方後方型周溝墓に発展する。これに対応するかのように何度となく引用されている，千葉県市原市国分寺台の神門５・４・３号墓と続く弥生時代中期以降の在地の方形周溝墓とは別に，弥生時代終末期に円丘の外来的要素の強い墳丘墓が出現する。これは在来の自立的発展を通じ，自己完結的に出現したとは考えられない。

さらに古墳の発展段階を地域的にみると，千葉県の東京湾岸では神門・小田部のように円形，東間部多・飯合作などの例のように庄内末から布留古段階の前方後方型墳丘墓の段階を経て能満寺古墳・手古塚古墳などの前方後円墳の出現をみる。

群馬県地域は弥生時代後期の周溝墓は樽式土器段階，例えば高崎市日高遺跡に認められる。この中には円型を呈す周溝墓も含まれる。しかし，古墳時代（石田川式土器を伴う）の周溝墓は広く定着し，そのありかたは梅沢重昭・橋本博文が８種に分類している（梅沢・橋本　1988)。また，この地域の樽式土器の分布圏では初期古墳が円墳（例えば烏川，井野川，鏑川水系)，石田川式土器受容地域では大田頼母子古墳・軍配山古墳の他は，前方後方墳の前橋八幡山，前方後円墳の天神山古墳，円墳の朝倉２号墳などがみられる。そして，大型古墳の出現とともに前方後方型周溝墓も生まれてくる。これらは表裏の関係で進められている（右島　1990）とみる。

埼玉県域の荒川東岸では弥生時代中期後半以降に方形周溝墓が分布し，その後は熊野神社古墳・上尾殿山古墳のように円墳にかわる地域である。荒川西岸では弥生時代の早い段階から方形周溝墓が認められ，方形周溝墓と並存して吉見町山の根古墳（前方後方墳・66m）が出現する。小山川・志戸川流域では五領期古段階に塚本山33号墓・岡部町石蒔Ｂ遺跡・美里町南志渡川遺跡など前方後方型周溝墓が認められる。これは荒川東岸，群馬県の樽式土器分布圏とも共通する様相である。利根川南岸では初期古墳は確認されておらず，行田市高畑１号方形周溝墓が五領期新段階で存在し，吉ケ谷式土器分布圏では方形周溝墓が広範に分布し，そのなかに前方後方型周溝墓が出現するが，その後続はたどれない。

栃木県域の弥生時代後期の二軒屋式土器段階では方形周溝墓は確認できておらず，群馬県域と同様，弥生時代後期の土器とは系譜を異にする土器群によって古墳の出現をみる。しかし，近年外来土器と在来土器を伴出する前方部がバチ型を呈す全長50mの前方後方墳の河内郡三王山南塚２号墳が確認されたことにより，古墳の出現が改めて遡ることになった。しかし，栃木県域の出現期古墳は足利市小曽根浅間山古墳を除いて前方後方墳であることの変更はない。

茨城県では壺棺墓の段階が弥生時代を通じて存在し，外来土器の流入をも拒否し，古墳出現期に古墳と方形周溝墓が同時に許容された地域である。

神奈川県の東京湾岸の弥生時代後期は，朝光寺原式土器に代表されるように小地域文化圏があり，しかも他地域との関連性があること，また東海地方の影響をうけた土器が出土

することは岡本勇によって述べられている。それは，弥生時代中期，宮の台式土器段階は土器の斉一性が強いが，次の時期は関東地方の他地域と同様，小さな地域ごとに個性豊かな土器群がそれぞれ一定の文化圏を作っていることが明らかになったことである。そのあらましは，東京湾岸から武蔵野台地，千葉県の東京湾北岸は櫛描文をもたず細縄文を特徴とする久ケ原式土器・弥生町式土器が分布する。横浜・川崎の丘陵地帯には，北関東の櫛描文様の系譜につながる文様をもつ朝光寺原式土器が，相模湾岸には伊豆・駿河の櫛描文の流れをくむ土器が出土し，後期後半は地域色，遺跡毎の違いが顕著にみられる（岡本1978)。

ところが後期後葉になると土器の地域間交流が活発化した。相模では高坏の数が増加し，相模湾左岸の土器は櫛描文を主体とするが（本郷遺跡・篠山遺跡・神崎遺跡），右岸は縄文を主体とする（根丸島遺跡・王子ノ台遺跡）土器が主体となって東海地方西部の影響を左岸がストレートに受けるようになる[(4)]。東京湾岸では，相模からの影響を受け，東海系の土器が参入する。三浦半島では，対岸の千葉県の影響を受け輪積痕の残る甕が出土する。

次の段階は，前代にはなかった小型器台・有段高坏・パレス壷・ひさご壷・Ｓ字甕が東海地方から波及，定着する。さらに前段階に波及した器種に加えて小型丸底坩が加わり，相模型の装飾壷がなくなるのがこの段階である。この時期は関東地方一円に斉一的な土器がみられもする。

墓制では弥生時代中期前半の須和田期に展開した再葬墓に代わり，方形周溝墓が造営されるのは中期後半の宮の台期である。この時期の方形周溝墓が集中するのは鶴見川流域で，例えば横浜市歳勝土遺跡は大規模な完成された環濠集落であるが，それに近接した大塚遺跡は25基以上の大方形周溝墓群の遺跡である。また，宮の台期の環濠集落と方形周溝墓群との組み合せの関係にある遺跡として，同じ鶴見川流域の矢崎山遺跡・権田原遺跡・能見堂遺跡などがある。この時期の方形周溝墓の形態は周溝の四隅がとぎれる点が特徴である。また，方形周溝墓の規模をみると，宮の台期の方形周溝墓は一辺の平均が10m程度のものが多く，大きな格差は認められない。しかし，横浜市折本西原遺跡では一辺20mを超すものが出現する（１号方形周溝墓 25m・３号方形周溝墓 23m)。

弥生時代後期になると，方形周溝墓に規模の格差が顕著にみられるようになる。例えば秦野市王子ノ台遺跡の方形周溝墓は大・中・小の三種の規模に分類でき，集団内での変質を想定できる。このことは，５号方形周溝墓から鉄剣が出土したり，７号方形周溝墓からガラス小玉が出土したり，副葬品や装着品がみられることからも裏づけられる。形態は王子ノ台遺跡の場合，周溝が全周するものが多い。さらに周溝の一部が深く掘り窪められているものもあり，周溝内埋葬が考えられる。

次の段階にも方形周溝墓は引き続き県内各地に築造されるが，多摩川や鶴見川水系の方形周溝墓は数が減るのに対し，相模川や花水川水系のそれは増加傾向にある。また，赤塚

の言うＢ型墳丘墓や円丘墓，畿内前期古墳に類する副葬品を持つ古墳や前方後方墳が出現する。それらに関しては次章で紹介してみたい。

３．神奈川県の墳墓の様相

関東地方の弥生時代後期以降の墳墓の形態は方形周溝墓が主流だが，汎日本的にそれらの中でも周溝の一部を通路として掘り残したものや円丘のものが出現するようになる。これらはマウンドや埋葬主体部が確認されていないものもあるが，それらと明らかにマウンドをもつものについて取り上げてみたい。

１．円丘墓

ア．平塚市御所ケ谷遺跡（大川他　1988）

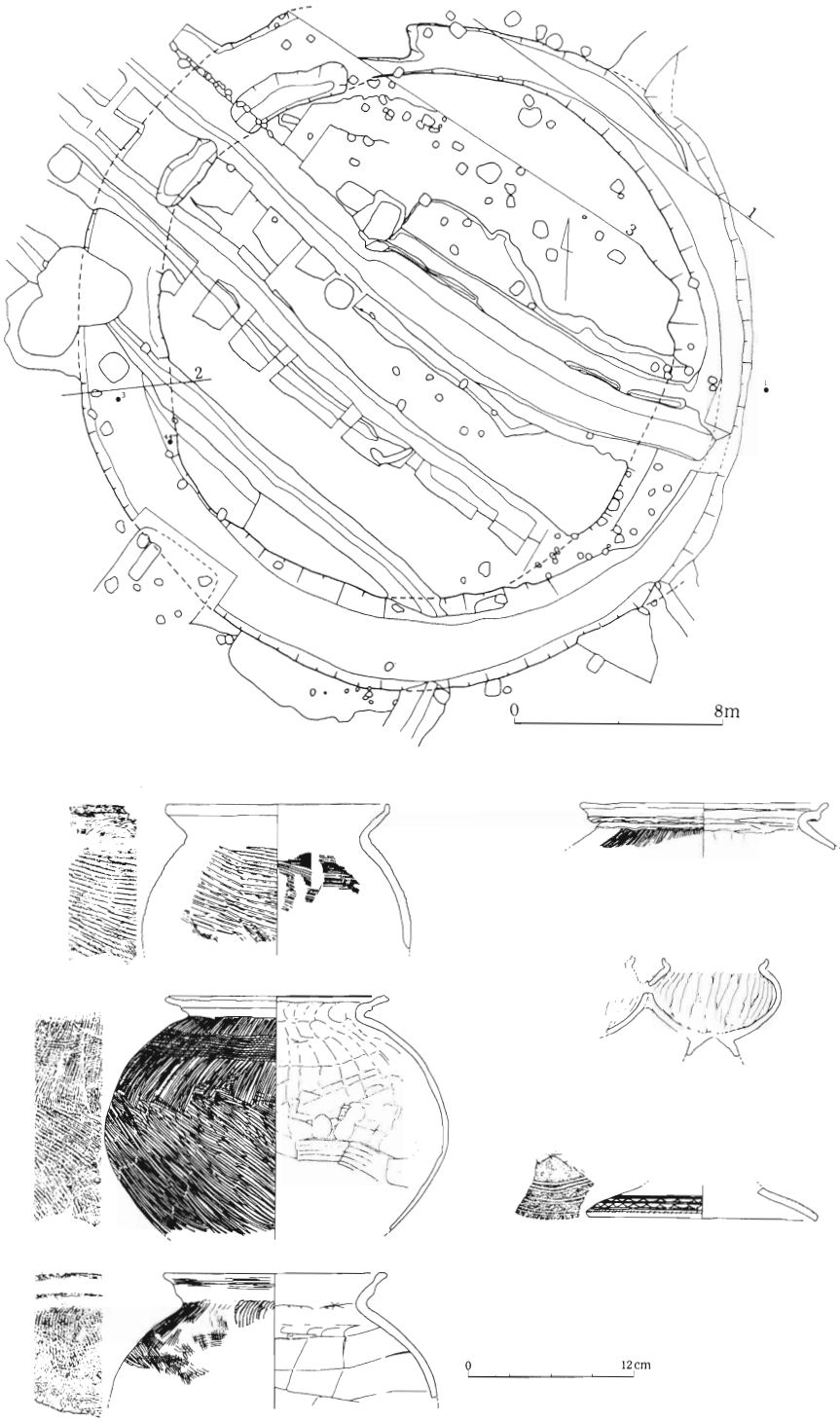
- 円形周溝墓と報告されている円丘墓は径26ｍを呈し，北側に通路を設けている。マウンド，主体部は削平されてか確認されていない。周溝内からは甕40，壷34，高坏５と多量の土器が出土している。特筆できるのは尾張・三河に分布をもつ元屋敷式土器と考えられる小型高坏とＳ字状口縁をもつ三連台付甕，これは静岡県富士宮市野中向原遺跡に出土例がある。加えて，畿内の庄内式土器に出自を求められる叩き目をもつ甕も出土している。
- 御所塚と呼称されており，円形周溝墓の周溝を切って築造されている。規模は，周溝の内径30ｍ，外径50ｍ，周溝幅6.5～8.5ｍでかなり大型である。マウンドも存在したようである。

イ．伊勢原市小金塚古墳（久保編　1985）

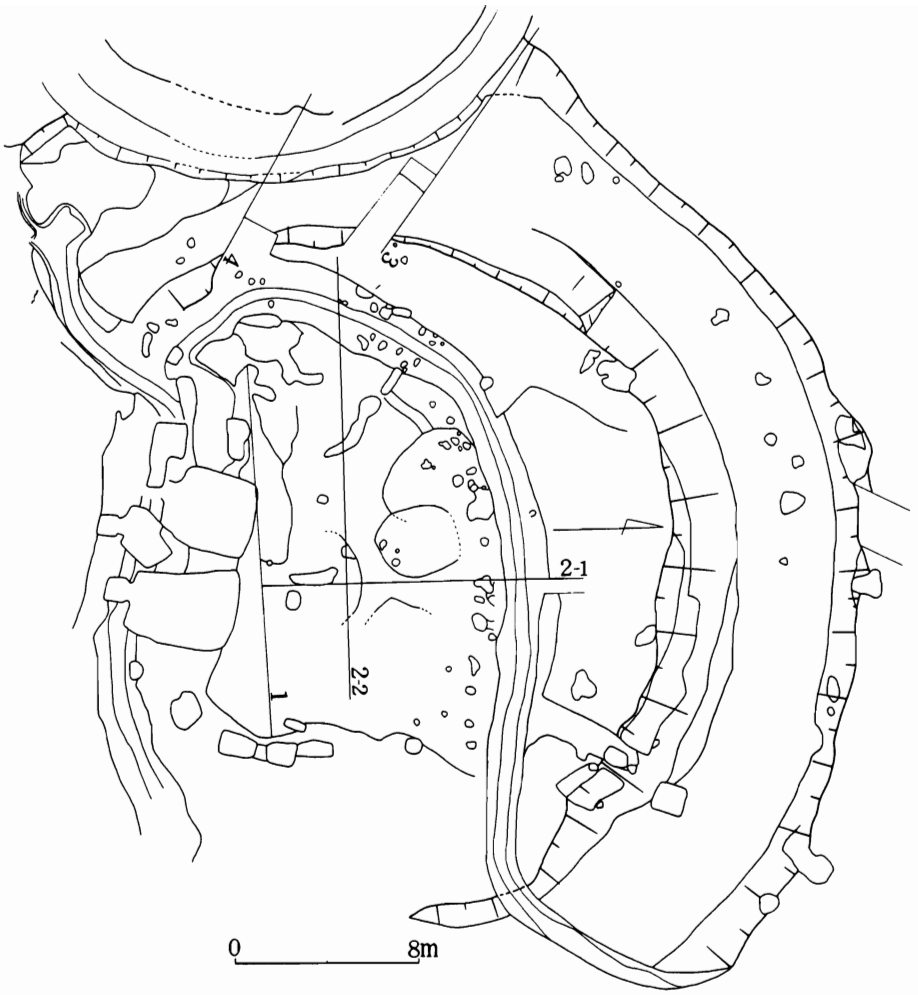
測量調査と周溝確認調査が行われ，径46ｍ，高さ６ｍの大型円墳であることが判明した。周溝は幅10ｍで，周溝底から朝顔形埴輪が２個体出土している。そのうちの一体の特徴は，円筒部に比べ，肩部が張りをもち，外面調整はタテハケ・Ａ種横ハケである。透かし穴の形態は三角形，逆三角形，半円形であり，タガ状突帯の断面は，上辺が内彎して稜が鋭角的で突出度が高いものと，台形に近い正方形のものがある。埴輪編年Ⅱ期（川西　1978）に比定できる。

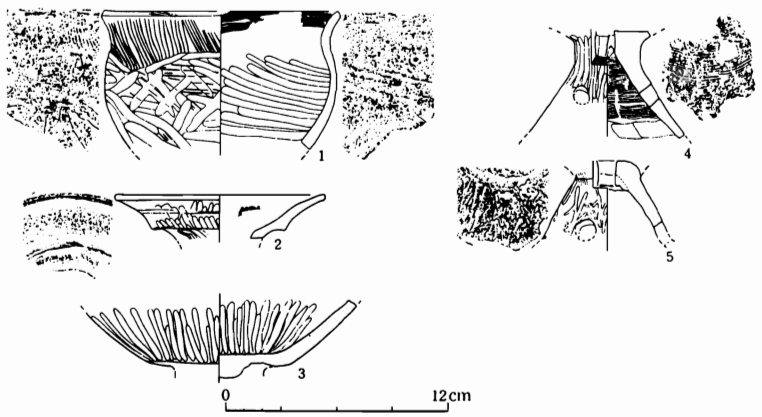
ウ．川崎市久地伊屋之免古墳（持田・村田　1987）

径17ｍ，高さ２ｍを呈す。内部主体は２基確認されている。第１主体部は墓壙最大長9.7ｍ，幅3.26ｍで，木棺は割竹形を呈し最大長7.8ｍ，幅0.5～0.7ｍで，主軸は東西である。副葬品は，ガラス・琥珀製小玉９，棗玉１，琥珀製勾玉１，瑪瑙製管玉１，鉄鏃片が確認されている。また，供献土器も出土している。第２主体部は，長さ4.45ｍ，幅0.6～0.9ｍの割竹形を呈している。副葬品は発見されていない。



第１図　御所ケ谷円形周溝墓　（大川他　1988より）





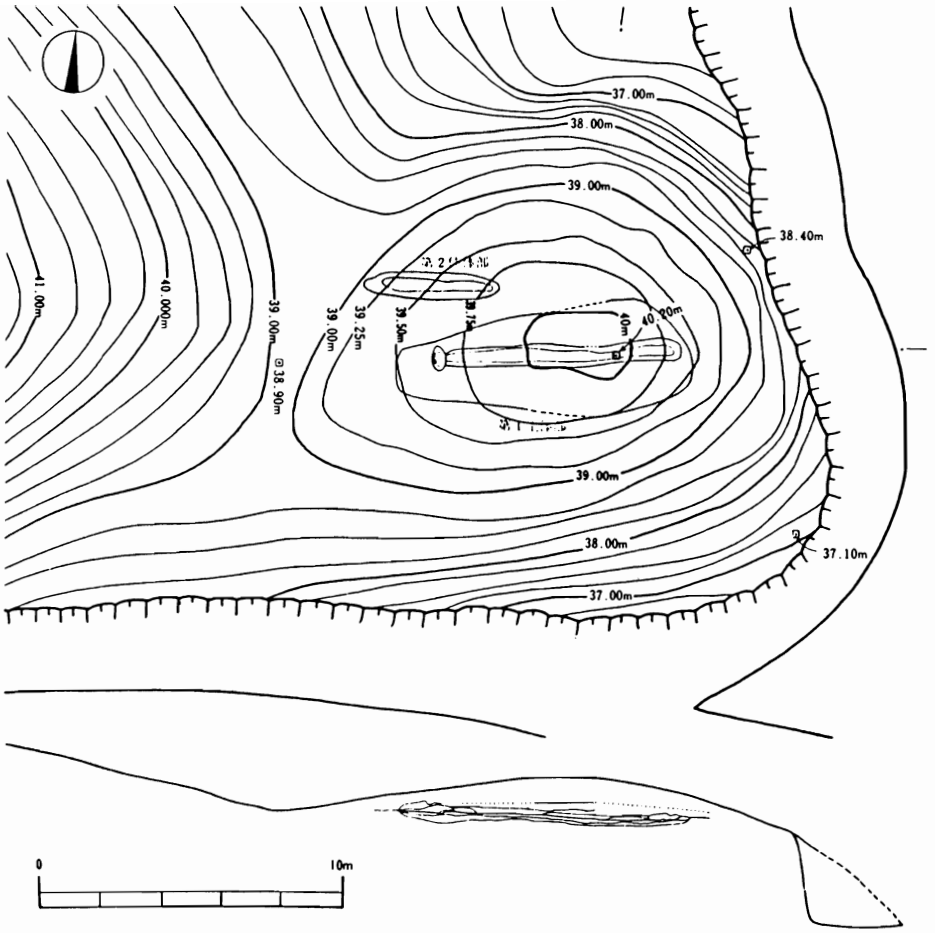
第2図　御所塚古墳（大川他　1988より）

第3図　小金塚古墳（久保編　1985より）

2．方丘墓（田中新史分類Ｂ亜式～Ｂ式・赤塚二郎分類Ｂ型）

ア．横浜市東耕地遺跡（山本・大上　1986）

１号方形周溝墓は主軸を南北にとり，規模は一辺９ｍである。周溝内からは，壺・鉢・元屋敷系高坏・台付甕等が出土している。また，壺棺を伴う。



第４図　久地伊屋之免古墳（持田・村田　1987より）

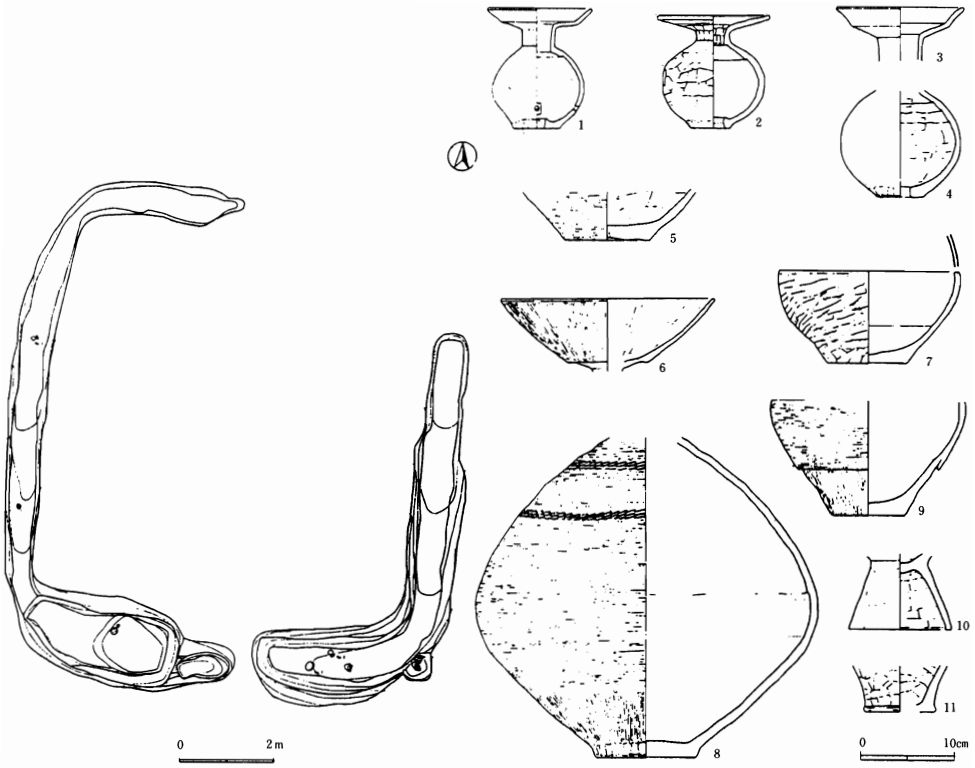
イ．三浦市松輪大畑遺跡（市川　1981）

１号墓は全面調査されてはいないが，確認調査から辺の中央部に通路を設けているものと判断されている。規模は東西13.2m，南北12.2mである。北側の周溝から球形の胴部，折り返し口縁，ヘラ磨きの施された壺型土器が出土している。

３．前方後方型墳墓

ア．平塚市豊田本郷遺跡（明石　1985）

ＳＫＤ０１は東部分が未調査だが，辺の中央の通路が外開きの前方部形態をとり，主軸を北東に向け，規模は南北長17.6mを呈す。周溝底から器台型土器が出土している。



第5図　東耕地1号方形周溝墓　（山本・大上　1986より）

イ．横浜市緑区稲ケ原遺跡（平子・橋本　1992）

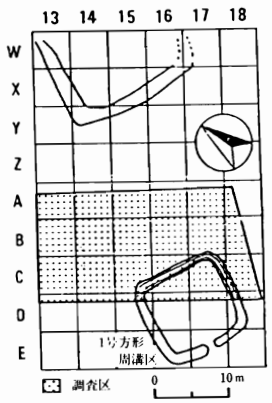
A地点1号方形周溝墓は主軸を南西に向け，規模は17m×16mである。周溝内中層～上層から壺・器台・台付甕等が出土している。主体部は削平されて確認されていない。長胴化した台付甕，ヘラ磨きの壺等が出土している。

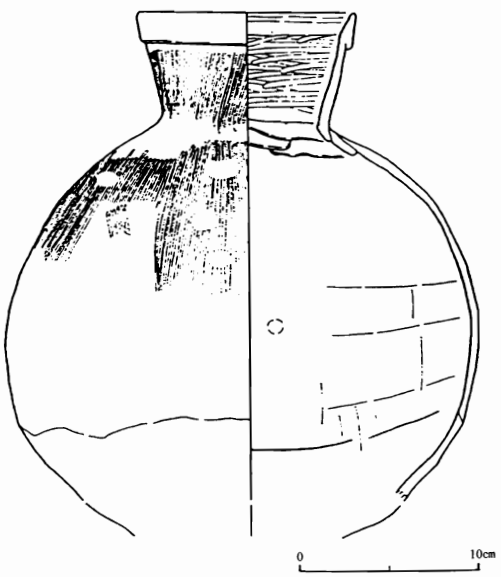
4．古　墳（群）

ア．海老名市秋葉山古墳群（北川　1991，服部　1993，海老名市教委　1994）

秋葉山古墳群は，前方後円墳の秋葉山1号墳（墳長58m），帆立貝型古墳の2号墳（墳長48m），前方後円墳の3号墳（推定墳長51m），前方後方墳の4号墳（墳長41m），方墳の5号墳（東南辺17m），円墳の6号墳（(規模不明，服部　1993）の構成である。

- 1号墳の前方部端がトレンチ調査されており，周溝といわゆる五領スコリア層が確認されている。
- 3号墳の調査では，壺型土器（無文のもの，羽状縄文をもつもの）と甕型土器（刷





第６図　松輪大畑１号方形周溝墓（市川　1981より）

毛目をもつもの）が出土した。

- ４号墳の後方部西側のトレンチから壺形土器が出土している。
- ５号墳からは坩型土器，高坏が出土している。

土器の先後関係から３号墳－５号墳－４号墳の順に築造された可能性がある。

イ．横浜市稲荷前古墳群（甘粕　1969・山口　1983）

稲荷前古墳群は，前方後円墳の１号墳（46m），６号墳（32m），前方後方墳の16号墳（37.5m），円墳の２・３・５・13号墳，方墳の14・15・17号墳の計10基の古墳群である。

16号墳は，墳形の確認調査が行われただけで主体部は未調査である。

周溝内から小型器台１，壺型土器６が出土している。

ウ．横浜市東野台古墳群（石川　1992）

東野台古墳群は，方墳の１号墳（東西辺13.5），前方後方墳の２号墳（54）からなる古墳群である。

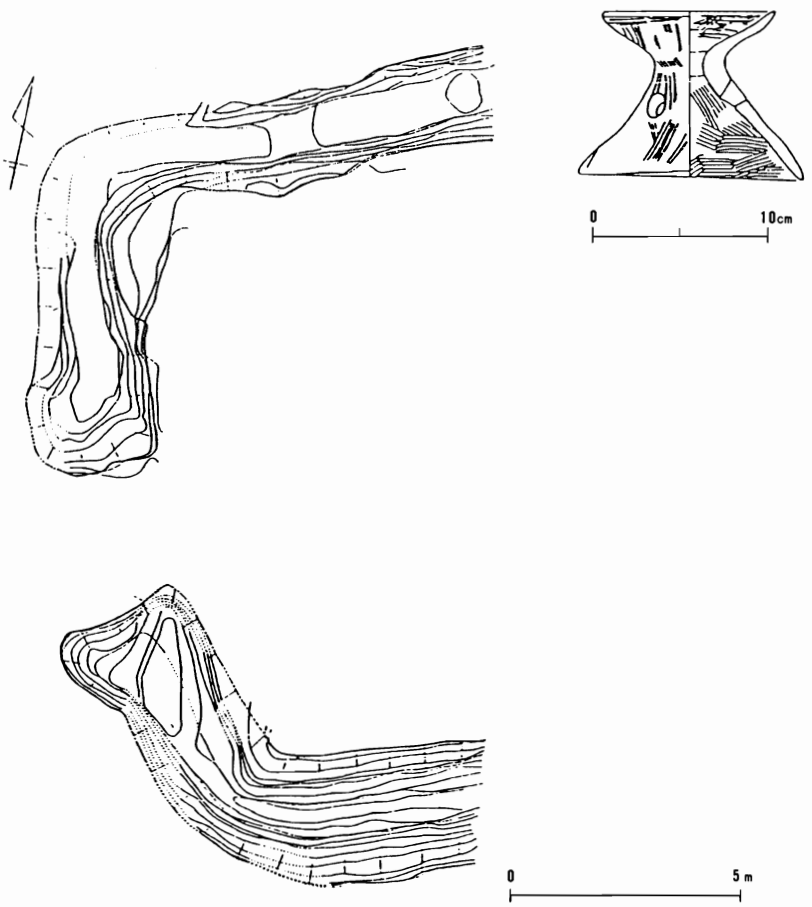
- １号墳は周溝の北側及び西と東側が遺存し，周溝の北側に通路を設けている。出土遺物は，表土中より坩型土器が，周溝内よりハケ目調整の壺型土器２，小型壺型土器，ヘラ磨きの高坏脚部，平底坏である。また，盗掘壙から剣が出土している。
- ２号墳は墳形，供献土器，埋葬主体部と副葬品が判明している数少ない前方後方墳である。主体部は後方部中央に確認され，8.7m×3.5mの墓壙に6.7m×0.85mの割竹形木棺と考えられる痕跡がみられた。副葬品は，ヤリ型鉄器（原報告では剣）２，刀子１，滑石製勾玉１，滑石製棗玉１，碧玉製管玉11（両面穿孔８・片面穿孔３），滑石製臼玉15，ガラス小玉５である。また，くびれ部より小型丸底坩が出土している。

エ．平塚市真土大塚山古墳（石野　1936・日野　1961・本村　1974）

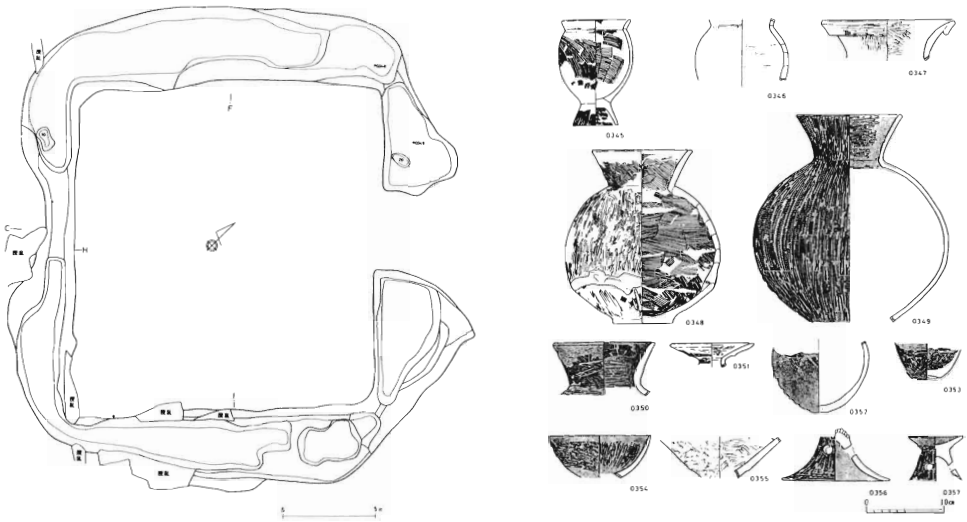
古い調査のため墳形は不明だが，本村豪章は墳形を前方後方墳と想定している。この当否はともかく重要なのは，埋葬主体部を２基推定し，下部にあった推定長6.2ｍ×1.3ｍの直葬主体部から三角縁四神二獣鏡・直刀・短冊型鉄斧・有袋鉄斧・柳葉式銅鏃・碧玉製管玉・刀子・巴型銅器５が出土し，上部の推定長1.1ｍ×１ｍの舟底型朱線がのこる粘土槨からは仿製四獣鏡・定角式銅鏃・水晶製勾玉・水晶製算盤玉が出土し，残ったガラス小玉等は不明，銅鏃は両槨から出土しているということになろう。

オ．厚木市・伊勢原市愛甲大塚古墳

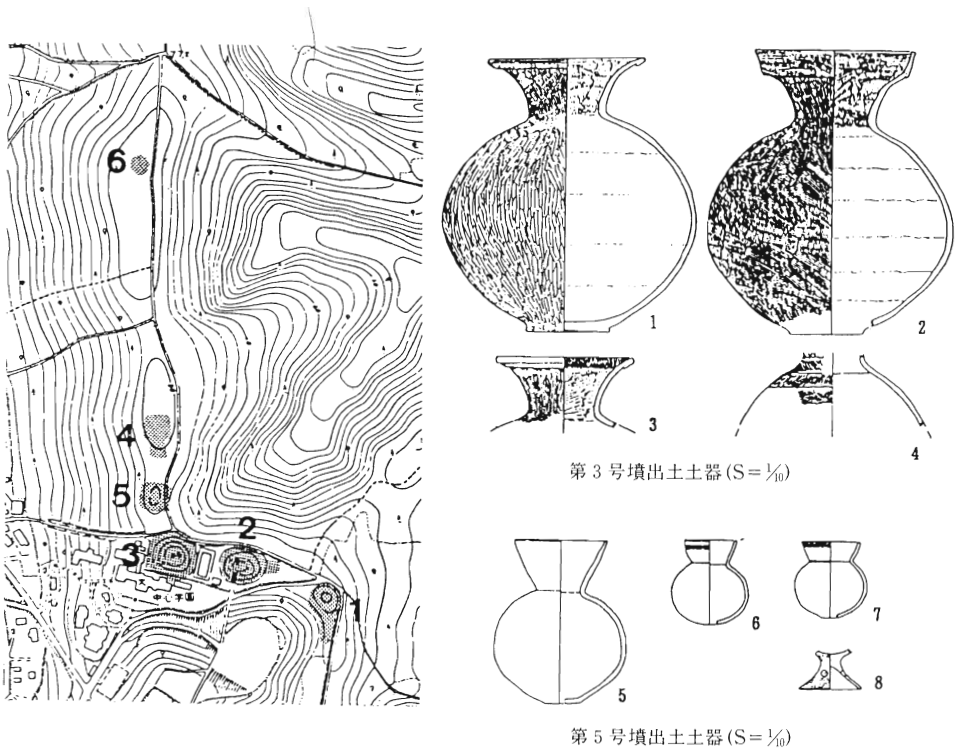
厚木市と伊勢原市にまたがる愛甲大塚古墳（墳長70m以上）は，1990年から93年にかけて断続的に調査が行われ，墳丘は削平されていたが段を有する前方部の周溝が約半分確認された。伊勢原市教育委員会のご好意で未整理だが周溝内から出土した土器を実見したところ，壺型土器で布留式期古段階のものであろう。



第７図　豊田本郷ＳＫＤ０１（明石　1985より）



第８図　稲ケ原Ａ地点１号方形周溝墓（平子・橋本　1992より）

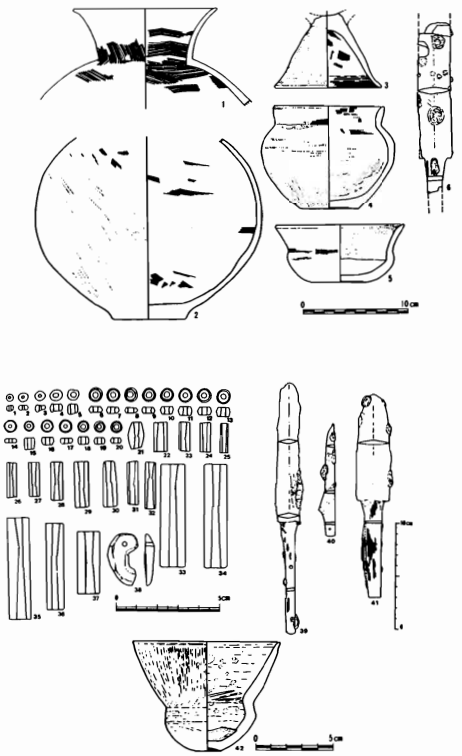


第３号墳出土土器（S＝1/10）

第５号墳出土土器（S＝1/10）

第９図　秋葉山古墳群位置図と出土土器（服部　1993より）

畿内第五様式から布留式期の神奈川県をまとめると，畿内第五様式・山中式併行期は弥生町式・朝光寺原式など地域色の強い土器群と，すでに規模差をもった方形周溝墓が墓制として存在する段階。この時期にすでに集落内では完熟度の高い共同体社会が形成されて



第10図　東野台1号墳出土遺物(上)・2号墳(下)

いるとみることができる。

次の段階の相模Ⅱ・纒向2～3・庄内併行期が重要である。特徴的なことは土器の移動である。特に東海地方西部との関連が強く，その背後に人の移動，つまり小型器台・小型高坏など供献土器の使用から墓制の変化を意味した移動が考えられる。また，この時期に相模平野では，御所ケ谷遺跡を例とする円丘墓の出現をみる。この思想は，隣接する御所塚古墳に通じるとみることができ，さらには，真土大塚山古墳の出現をみることになる。ここに，拠点として円丘墓の築造思想の流入がある。また，副葬品をもつ被葬者が現れるのもこの時期である。平塚市王子ノ台5号方形周溝墓の主体部からは鉄剣が，7号方形周溝墓からはガラス小玉が出土している。

相模Ⅲ・布留古～中・廻間Ⅲ～Ⅳ段階，この時期は当地域にも方形周溝墓の辺の中央部

第11図　愛甲大塚古墳（『東海史学』24号より）

がとぎれたＢ１亜式や，周溝のとぎれた部分が外開きの形態をとるＢ型前方後方型周溝墓が出現する。それらは松輪大畑１号墓（Ｂ１亜型）・稲ケ原遺跡１号墓・豊田本郷遺跡１号墓（ＢⅡ型）などでみられるが，単位墓域の中での前方後方形周溝墓への継続は確認できていない。しかし将来的にはＢⅢ型が発見される可能性は否定できない。また，前代に引き続き，副葬品をもつ被葬者が存在する。平塚市万田熊ノ台遺跡の方形周溝墓は周溝内から人骨が出土し，頭部から小型素文鏡が，頸部から碧玉製管玉・鉄鏃が発見され，平塚市原口遺跡１号方形周溝墓の主体部からは，銅釧・ガラス玉・石製臼玉が出土している（長谷川他　1994）。

また，当期は列島内各地で前方後円墳の出現をみる。相模でも前方後円墳の出現をみる。愛甲大塚古墳は出土した壷型土器，バチ型の前方部，表採ではあるが，古式の鉄鏃から勘案すると，関東地方でも最も早く成立した前方後円墳であると推察できる。稲荷前16号墳は鶴見川流域で最も早く成立した古墳で，同じ墓域内で，前方後円墳と前方後方墳と方墳と重層的な構造がみられる。

布留式期中段階には，多摩川流域にも前方後円墳が築造される。多摩川流域では，前方後円墳は下流域に集中し，右岸の横浜市観音松古墳・川崎市加瀬白山古墳が対峙しつつ単独で築造される。この二者の前後関係は，まず白山古墳が築造され，次に観音松古墳が築造される。

相模川流域では，愛甲大塚古墳の出現後，円丘墓の系譜の中で真土大塚山古墳が築造される。真土大塚山古墳は古相の副葬品の組み合わせから３期とする。また，秋葉山古墳群は鶴見川流域の稲荷前古墳群のように重層的な構造だが，古墳群の出現は明らかではない。今後の調査に期待したい。小金塚古墳には古式の埴輪が採用される。これが円墳であることは異様な感がある。

古い様相を呈する前方後円墳としては，厚木市地頭山古墳[7]（72m），海老名市瓢箪塚古墳（65m）があるが，ともに未調査である。

４．神奈川県における古墳時代の開始

古墳時代の開始をたどる場合３つの考えがあることは初章で確認したが，古墳時代という名称は墓制の特質に基づいて区分されているので，墓がその時代の政治や階級を反映していることからも，古墳時代を区分するにはその観点で設定することにしたい。すなわち，土器の様相から弥生時代と古墳時代を区分するという土器研究者の立場は墓制を基本的に設定する時代という考えには反する。しかし，布留甕の成立は前方後円墳の出現と軌を一にする考え方も捨て切れてはいない[8]。また，「墳丘墓」を古墳に含めて論じようとすると，「古墳」がさらに遡り，弥生時代の後半は古墳時代に含まれてしまう。弥生時代はそれ自

体重要な時代区分である。弥生時代はその時代価値を認め，古墳時代はその歴史的画期を近藤義郎や都出比呂史などの考えに沿い，定型的な古墳の出現をもって始まりとしたい。前方後円墳は定型的[9]であるが，関東地方において竪穴式石室を欠く前方後円墳は普遍的であるし，三角縁神獣鏡は数面しか出土していないのも事実である。割竹形木棺の採用も遅れる。よって近藤のいう3点の特徴は満たされないものが多くを占める。そこで同時代性をもって配慮し，最古の古墳である奈良県箸墓古墳以降築造された墳墓を「古墳」と呼びたい。ただ，箸墓古墳は未発掘墳であるが，その出土土器（布留0式）[10]は基準資料となりうる。

神奈川県において弥生時代後期に副葬品や着装品をもつ被葬者が出現することは，神奈川県に限らず汎日本的な類似性ともいえる。着装品の品目は剣・玉・鏡であり，他地域では鉄鏃や銅鏃も加わる。しかし，これらすべてをもった墳墓は未発見である。これが前方後円墳になると，副葬品には三角縁神獣鏡や短甲・短冊型鉄斧などの武器や工具が加わる。これは各地の集団墓や特定首長墓に単独ないしは分散して副葬されていた品目が，巨大な権力をもった大首長のもとに集約される現象（北條　1990）とみてもよかろう。それが古墳時代の幕開けといえる。当地域では平塚市真土大塚山古墳・川崎市加瀬白山古墳の出現をもって明らかに「前方後円墳体制」に組み込まれ，時期的には『前方後円墳集成』編年3期（新潟シンポ編年9期）に対応する。愛甲大塚古墳は，布留式期古段階の土器を出土し，前方部はバチ型を呈す古式の前方後円墳である可能性がある。そうみると，真土大塚山古墳より出現は早く，時期的には『前方後円墳集成』編年1期を上限とする時期を与えることができる。

前方後方墳の出現は，相模川流域では秋葉山古墳群4号墳がおそらく前方後円墳に遅れて築造されるが，鶴見川流域では前方後円墳（稲荷前1号・6号墳）に先行して築造される。多摩川流域では対岸の東京都に砧7号墳が存在するが，前方後円墳に遅れて出現する。横浜市東野台古墳群の築造も遅れて，方丘墓の系列のなかで重層的構造である。

「前方後円墳体制」という階層的システムに組み込まれた在地首長たちは，弥生時代からの方丘墳墓を築きながらも自らも前方部を作りだし，墳丘を大型化していく。そして前方後方墳を築造するようになる。それが前方後円墳を築いた首長に組み込まれた例は秋葉山古墳群・稲荷前古墳群であろう。また，階層的システムに組み込まれなかった首長層は，方形周溝墓の造営を続ける。これは後まで続く。円丘をもつ小古墳は，前方後方墳や前方後円墳に遅れ，割竹形木棺を持つが，山の上2号墳のような方墳にも採用される。

地頭山古墳や瓢箪塚古墳など前方後円墳や，真土大塚山古墳のように畿内前期古墳に類する副葬品をもつ古墳や，小金塚古墳のように埴輪祭祀をもつ古墳はおおむね単独で存在することが多い。これらは在地の系譜を持たず畿内からの派遣将軍とまでは言えないにしても，新しく入植した新興首長の拠点として考えることができる。

集落内では，大規模な墓域と環壕をもつ海老名市本郷遺跡を例に挙げると，廻間Ⅲ式期後半併行期に方形周溝墓の造墓活動が終焉するだけでく，玉造工房が形成されるという[11]。ここでも階層的システムに組み込まれた事実が検証できる。伊勢原市坪ノ内久門寺遺跡も玉造工房が検出され，本郷遺跡と共通することは，北陸系の甕を出土していることからも分かる。北陸地方からの工人の導入があったのであろう。

おわりに

本稿では，古墳時代の概念を明らかにすること，その上に立って神奈川県内での古墳時代の開始をどこに置くかを考えた。そこにはいくつかの問題点がある。

まず，方形周溝墓の存在である。弥生時代と古墳時代のそれは形態において何ら変わりないものが存在し，名称も，「古墳時代の方形周溝墓」「方丘墓」「方墳」と様々である。古墳時代の方形周溝墓という呼び方を認めるか否かという問題がある。また，私は土器の様式で時代区分の線引きするのはよくないという立場にたつ。

次に遅くまで方形周溝墓が残る場合である。都出によると，「方墳」の被葬者は前方後円墳の被葬者を頂点とする身分的編成の4番目におかれている（都出　1989）が，筆者は，方形周溝墓の被葬者はこのシステムに組み込まれ得なかったと考えた。もし組み込まれていたとするなら，本郷遺跡のように巨大な首長に吸収され，方形周溝墓の造営は許されなかったであろう。方形周溝墓から古墳へ転換する地域は多くある。

それから，前方後方墳の被葬者の評価である。まず，前方後方墳は前方後方型周溝墓の前方部を拡張したものであり，被葬者は地域首長と理解しているが，赤塚によると，前方後方墳の分布と拡散における東海系土器の動きとは呼応しているという（赤塚　1992）。また，比田井（1993）は濃尾平野からの土器の影響と前方後方墳の成立をセットでとらえ，次に畿内地方からの強い影響と前方後円墳の築造というプロセスを指摘している。派遣将軍説をも含めて東国社会の政治秩序の再検討を要する。

以上，神奈川県の墳墓を取り上げ，古墳時代の開始を設定したが，新しい知見を述べることができなかった。また，筆者の不勉強から間違いも多いと思う。諸学兄のご批判を仰ぎたい。

なお，本稿は川崎市教育文化研究所双書『古墳時代の神奈川』に書き下ろしたものを加筆・訂正したものである。

末筆ではあるが，本稿を起こすにあたり，次の方々のご教示，ご協力を得た。銘記して感謝したい。

明石新，及川良彦，北川吉明，車崎正彦，合田芳正，後藤喜八郎，立花実，服部みはる，村田文夫。

註

（1） 石野は日本考古学協会の新潟大会において，岡山南部では三段築成をもつ前方後円墳や割竹形木棺をもつ前方後円墳は3割に満たないことを指摘するとともに東国では長野県更埴市森将軍塚の例をも挙げ，墳丘を改変させてもあの場所（やせ尾根）こだわったのはなぜかと問題を提起する発言をした。

（2） 杉山はシンポジウム「東国古墳の出現と終末」のなかで考えを詳しく述べている。
大塚初重編1992『東国の古墳』季刊考古学・別冊3　雄山閣

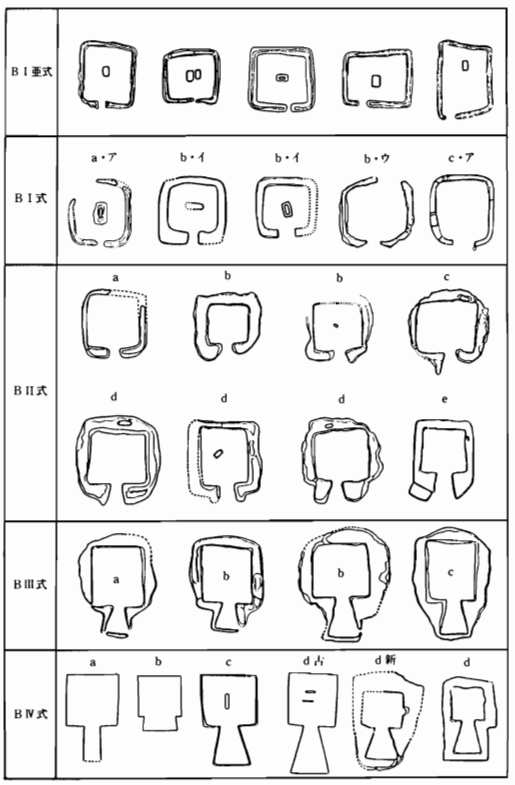
（3） 田中新史の分類は第12図の通りである。

（4） いちがいに右岸・左岸と土器様相の違いは指摘できないことは，西川が述べている。例えば右岸の厚木市子ノ神遺跡では櫛描文の壺が縄文の壺とほぼ同比率を示すという。出土土器の様相は遺跡ごとに違うとも言える。今後の課題である。西川修一1991「相模後期弥生社会の研究」『古代探叢』Ⅲ早稲田大学出版部

（5） 海老名市教育委員会の服部みはる氏のご教示による。

（6） 伊勢原市教育委員会の立花実氏のご好意による。

（7） 地頭山古墳は前方部がバチ型を呈すという指摘があるが，確かに西側はそのように見えるかもしれないが，墓地のために道路が敷設されており，墳丘が改変されている。発掘調査によって確認されなければならない。



第12図　前方後方型周溝墓の分類　田中　1986より

（8） 森岡秀人は，布留式甕の成立は不明な点が多いとしながらも吉備からの技法的や山陰系統土器の影響を指摘している。森岡秀人「4土師器の移動1西日本」『古墳時代の研究』6土師器と須恵器　雄山閣　1991
前方後円墳の諸要素も吉備や山陰からの影響が大きいことは周知の事実である。

（9） 定型的としたのは「前方後円墳成立時には」という意味である。

（10） 寺沢薫は，布留0式期を提唱し，その構成は布留型甕の出現と小型精錬土器3種の完備だという。そして奈良県箸墓古墳出土の二重口縁壺を布留0式期に位置づけている。『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告49冊　1986
1995年2月19日に箸墓古墳の北側にある大池の護岸工事に先立って行われた古墳の裾部分の発掘調査現地説明会に参加する機会を得た。出土土器は布留0式で，箸墓古墳出土の茶臼山型二重口縁壺は布留0式であると仮説された寺沢の考えは立証されたことになる。

（11） 合田芳正氏のご教示による。

引用・参考文献

明石　　新　1985『豊田本郷』豊田本郷遺跡発掘調査団

赤塚　次郎　1991「東海系のトレース」『古代文化』44－6

甘粕　　健　1969「稲荷前古墳群をめぐる諸問題」『考古学研究』16－2

石川　和明　1992「東野台古墳群調査報告」『調査研究集録』第9冊横浜市ふるさと歴史財団

石野　　瑛　1936「砂丘を利用したる古墳例－相模国中郡大野村真土大塚山古墳」『考古学雑誌』26－4

石野　博信　1981「古墳出現期の具体相」『関西大学考古学研究室開設30周年記念考古学論叢』関西大学

石野　博信　1992「古墳の形が意味するもの」季刊『考古学』40号

市川　正史　1981『松輪大畑遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告22

梅沢　重昭・橋本博文　1988「群馬県」『シンポジウム関東における古墳出現期の諸問題』日本考古学協会

海老名市教育委員会編　1994『知られざる海老名の古墳』第19回 海老名市温故館特別展パンフレット

大川　清編　1988『御所ケ谷遺跡』日本窯業史研究所

大塚初重編　1992『東国の古墳』季刊考古学・別冊3雄山閣

大村　　直　1982「東国における前期古墳の再評価」『物質文化』39号

岡本　勇他　1978『神奈川県史』通史編1

北川　吉明　1991『秋葉山古墳群』秋葉山古墳調査会縄文文化研究会

川西　宏幸　1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64－2

久保哲三編　1988『シンポジウム関東における古墳出現期の諸問題』日本考古学協会

久保哲三編　1985『小金塚古墳』伊勢原市教育委員会

港北ニュータウン埋蔵文化財調査団　1986『古代の横浜』横浜市埋蔵文化財調査委員会

近藤　義郎　1983『前方後円墳の時代』岩波書店

近藤義郎編　1990『前方後円墳集成』山川出版社

関根　孝夫　1992「総括　西相模の方形周溝墓と前期古墳－とくに相模川右岸地域を　中心として－」『東海大学校地内遺跡調査団報告』3東海大学校地内遺跡調査会

田中　新史　1984「出現期古墳の理解と展望－東国神門5号墳の調査と関連して－」「古代」77号　早稲田大学考古学会

田中　新史　1986「東国の古墳時代出現期とその前後」『東アジアの古代文化』46大和書房

都出比呂史　1989「古墳の誕生と終焉」『古代史復元6』講談社

東海大学文学部東海大学校地内遺跡調査団　1991「西相模の弥生時代から古墳前期の土器様相」『西相模の3・4世紀』

利根川章彦　1991「いわゆる「古墳出現期」の認識の方法について」『埼玉考古学論集』

西川　修一　1993「1相模・多摩丘陵における弥生後期後半～古墳前期の土器と集落の様相」『シンポジウム2東日本における古墳出現過程の再検討』　日本考古学協会新潟大会実行委員会

長谷川厚他　1994「平塚市原口遺跡」第18回『神奈川県遺跡調査・研究発表会』発表要旨

服部みはる　1993「秋葉山（あきばやま）古墳群」『シンポジウム2東日本における古墳出現過程

の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
比田井克仁　1993　「東国における外来土器の展開」『翔古論集』久保哲三先生追悼論文集
日野　一郎　1961　「真土・大塚山古墳」『平塚市埋蔵文化財調査報告書』第３集
平子　順一・橋本　昌幸　1992　『稲ケ原遺跡Ａ地点　調査報告書』（財）横浜市ふるさと歴史財団
北條　芳隆　1990　「古墳成立期における地域間の相互作用」－北部九州の評価をめぐって－『考古学研究』146号
右島　和夫　1990　「３群馬」『古墳時代の研究』11　地域の古墳　雄山閣
持田　春吉・村田　文夫　1987　『川崎市高津区久地伊屋之免遺跡』高津図書館友の会郷土史研究部
本村　豪章　1974　「相模・真土大塚山古墳の再検討」『考古学雑誌』60－1
山口　隆夫　1983　「稲荷前16号墳」『古代の都築を学ぶ』緑区郷土史研究会考古部会
山本　暉久・大上　周三　1986　『東耕地遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告14

小田原地域の古墳成立への一視点

― 小田原市千代仲ノ町遺跡第Ⅱ地点・千代南原遺跡第Ⅵ地点出土の土器様相から ―

滝　澤　　亮

1．はじめに

私達は小田原市内において数度の小規模な調査を行ってきた。どれもいわゆるミニ開発に伴う道路部分の調査といったもので遺跡自体の様相が十分に把握出来るものではない。

また原因者が個人あるいは小規模事業者ということもあって，調査費用・期間等制限があるものが多いのが事実である。

このような状況から筆者の力不足ともあいまって，各遺跡の基礎的な整理作業はともかくとして，報告書刊行となると暗礁に乗り上げたままの状況である。これらのことにも起因して，十分な調査成果をあげられないことにもなっている。

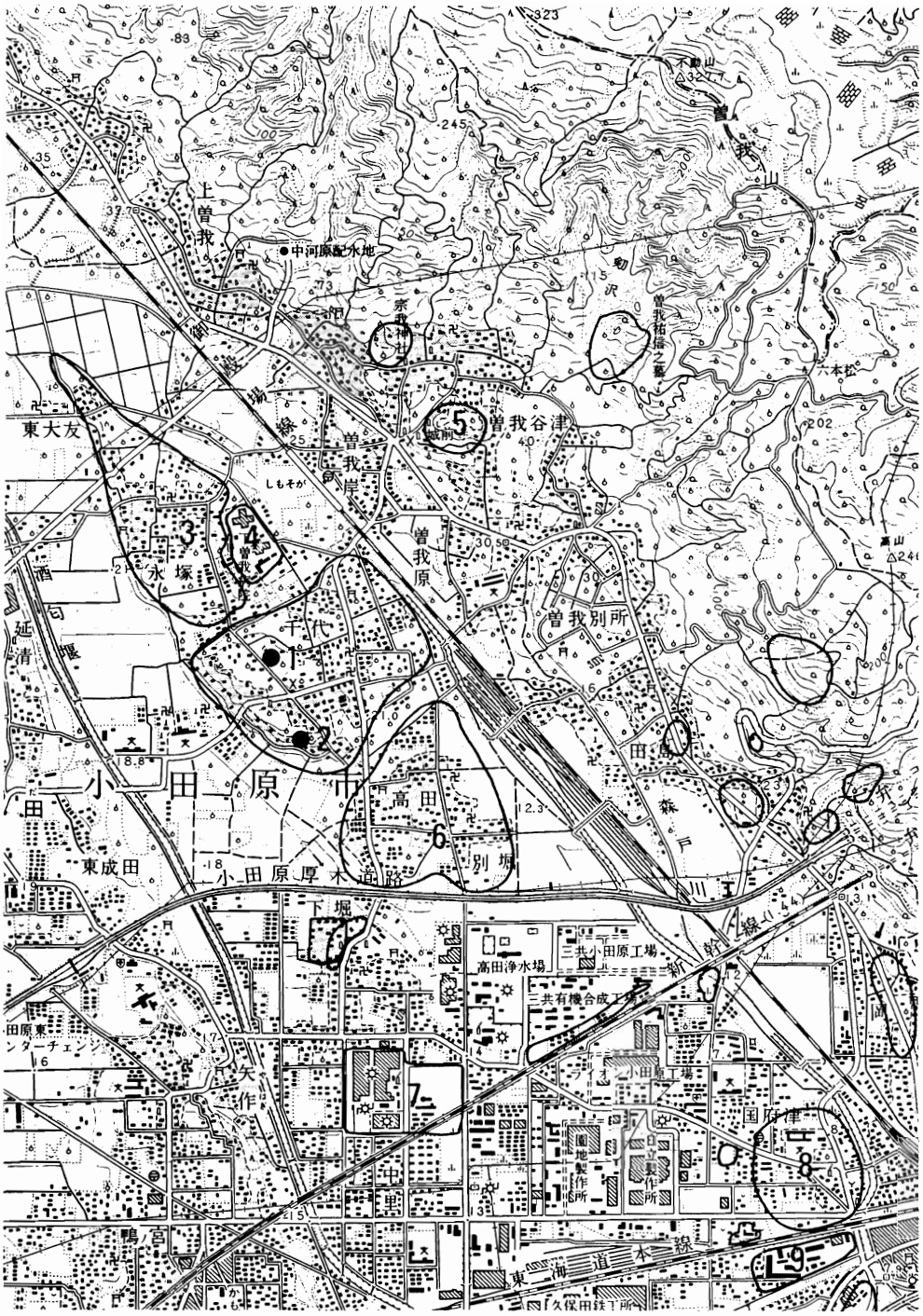
今回『考古論叢・神奈河』誌上に稿を起こすにあたり，このような状況にある小田原市内の遺跡について一部でも速報的に紹介しようと考えた。そのようななかで，筆者のかねてから興味のある時期の所産である弥生式土器終末から古式土師器の問題に絞って紹介していきたいと思う。

言い訳けが長くなるといけないので，本題に入っていくこととする。

我々は小田原市内の千代台地において昨年度来数度の調査を行った。千代台地には，白鳳期から天平時代の創建になると考えられている，所謂「千代廃寺」が存在することで著名である。

このような重要な遺構が存在すると考えられている千代台地においては，調査主体が異なる調査団によって，千代台地上の小字名で大きく分かれたいくつかの遺跡に対してかなりの数，開発に対しての事前調査が行われている（第９図)。

そのなかで私達が調査を行った千代仲ノ町遺跡第Ⅱ地点，千代南原遺跡第Ⅵ地点の２カ所について資料紹介を行った上で，この２地点の土器群が持つ意味について若干の考察を行ってみたい（第１図)。



1．千代仲ノ町遺跡　2．千代南原遺跡　3．永塚遺跡　4．曽我遺跡　5．曽我谷津遺跡
6．高田遺跡　7．中里遺跡　8．三ッ俣遺跡　9．町畑遺跡

第1図　千代仲ノ町・南原遺跡と周辺の遺跡

2．千代仲ノ町遺跡第Ⅱ地点第4号溝状遺構出土の土器群について

千代仲ノ町遺跡は小田原市千代字仲ノ町142－2番地に所在する遺跡で，個人の宅地造成工事に伴う事前調査として道路部分を対象に平成6年2月23日から4月5日まで調査を行った。調査団は，滝澤　亮を調査団長に，滝澤友子を調査担当者とし，盤古堂考古資料展示室の職員を調査員として編成した。

当遺跡からは，竪穴住居址2軒（いずれも古墳時代後期），溝状遺構6条（弥生時代～古墳時代頃と考えられる），土壙・ピット等が検出されている（第2図）。

このなかで今回紹介するのはSD04と呼称している溝状遺構から出土した土器であるが，遺構についても説明が必要であると考えられるため遺構の方から説明していく。

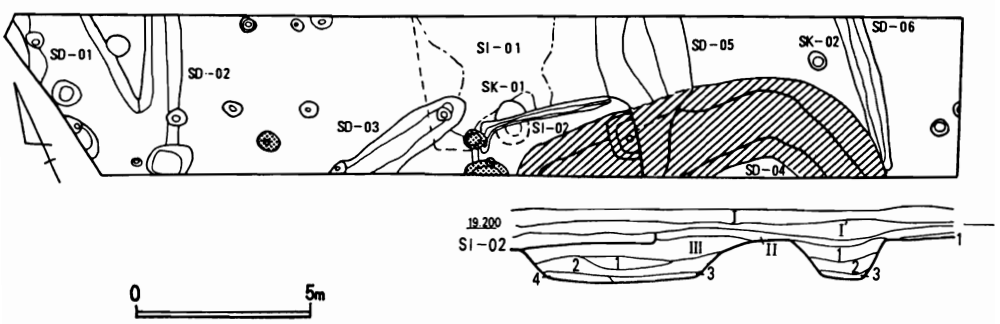
SD04（写真1・2）　この遺構は，調査区の東側において溝の一部が検出された。残りの大半の部分は，隣地の調査区外に伸びているものと考えられる。また西側の一隅はSI02と呼称している古墳時代後期の住居址が切っている。また，SD05とした弥生時代に属すると考えている南北に伸びる溝状遺構を切っている。

平面形は「コ」の字状になると考えられる溝の一部分が検出されている。前述したように，遺構の大半の部分が調査区外であるため正確な平面形は不明である。

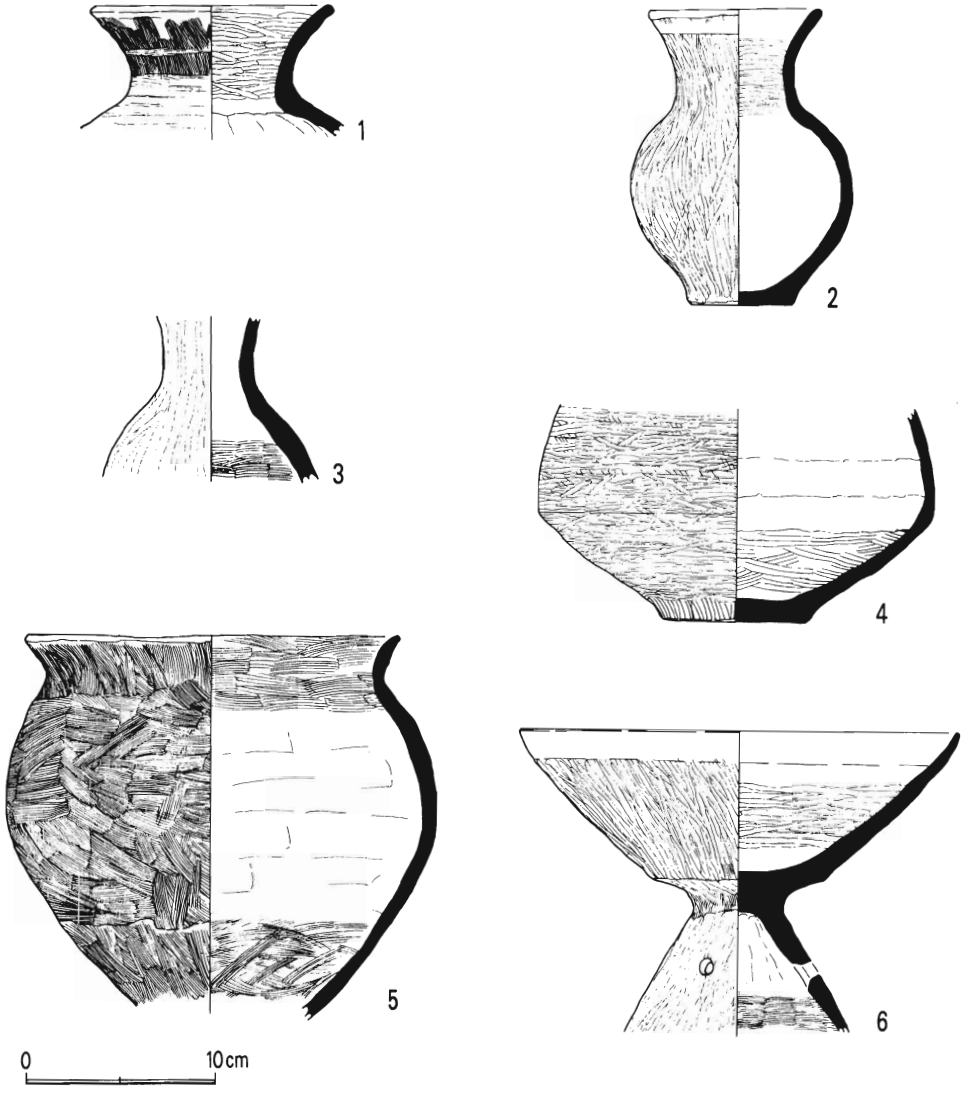
遺構の規模は確認面での幅が2.6mほどで，下場の幅は約0.8～1.4mをはかる。断面は「U」字に近い逆台形で，深さ8mをはかる遺構である。

検出されている溝の一辺が8m前後でコーナを造っており，溝断面の規模の割には小さい点が特色でもある。

今回の調査区は遺構全体に対してごく一部にトレンチ状に調査を行っただけなので断言することはむずかしいが，これらの点から考えるに単純な方形周溝墓と考えるよりは，前



第2図　千代仲ノ町遺跡　第Ⅱ地点全体図



第３図　千代仲ノ町遺跡　第Ⅱ地点 SD04出土

方後方型あるいは，前方後円型を呈する周溝の一部と考えておきたい。

さらに前述したような特徴や時期的なものを考え合わせると，前方後方型を呈する方形周溝墓の前方部前面の溝の一部と考えてもよいのではないかと考えている。

また次に詳述するように，この遺構からはほぼ完形及びそれに近い形で６点の土器が墳丘から転落したような状況で周溝内下部の方から出土している。

SD04出土の土器（第３図１～６）　前述したように本遺構からは６点の土器が出土し

ている。以下，１～６について説明していく。

１．短頸壺。口径12.4cm。口縁部破片での出土である。単口縁で頸部が「く」の字状をなしている。外面は，口唇部ヨコナデ，口縁部は縦方向へのヘラミガキ，その下はナデで仕上げている。内面は，横方向への細かいヘラミガキ，そして肩部より下ではヘラケズリによって仕上げている。

２．小形壷。口径9.1㎝。胴部最大径11.8cm，底径5.2㎝，器高15.8㎝。完形で出土している。単口縁で球形の胴をした小型の壷である。外面は，全面に縦方向のヘラミガキで仕上げられている。内面は，口縁部のみ横方向のヘラミガキで仕上げている。口唇部は，丁寧にナデて仕上げているが，一部にかすかにハケメが残る。

３．小形壷。肩部付近の小破片での出土である。単口縁で細頸の小型品になると思われる。外面は，縦方向へのヘラミガキによって仕上げている。内面は，胴部に横方向へのハケメが残る。

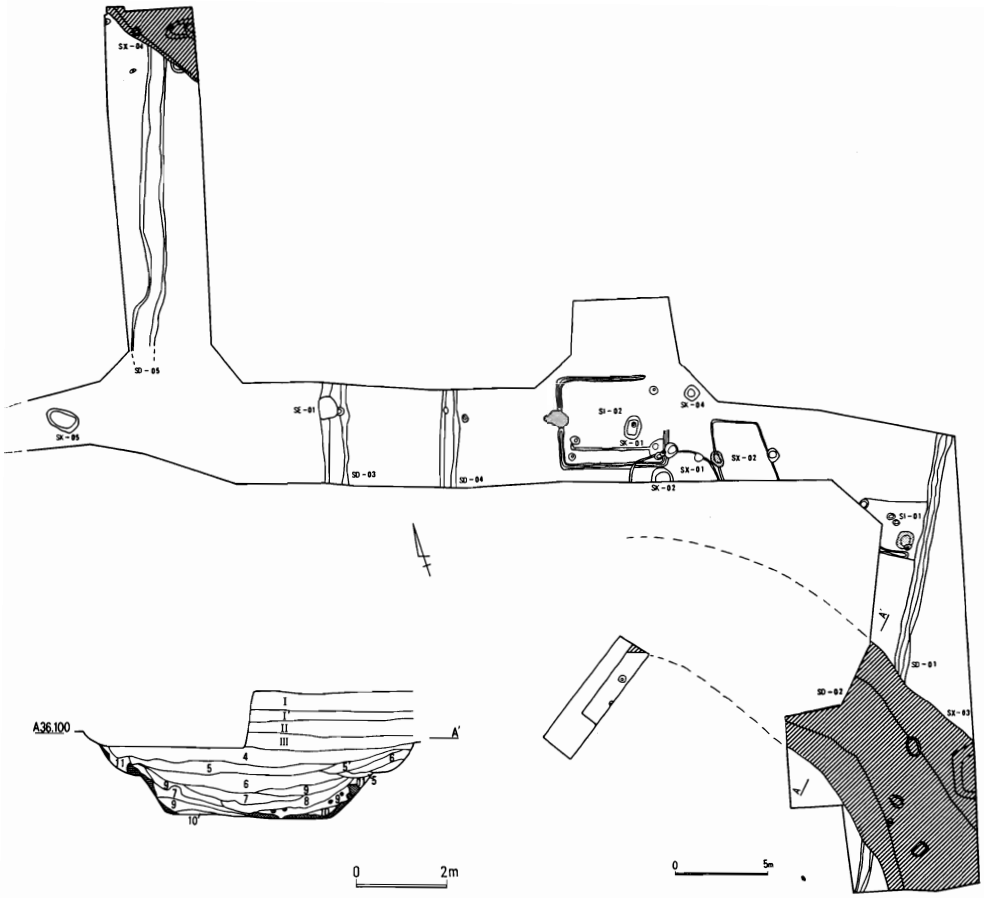
４．壷。底径7.4cm。胴下半部の破片での出土である。胴下半部の最大径の部分に稜をなしている。外面は，横方向への丁寧なヘラミガキ，底部付近は縦方向へのヘラミガキによって仕上げている。内面は，底部付近に横方向へのハケメが残り，その上にはあきらかな輪積み痕が数段観察される。

５．台付甕。口径19.4cm。台部を欠損しての出土である。口縁部は「く」の字状をなし，球形に近い胴部をもち台部がついていたと考えられる。外面は，口縁部が縦方向のハケメ，胴部は横から斜めにかけてのハケメ，そして下部は分割成形したらしく縦方向のハケメで仕上げている。また内面もそれに対応するように，下部はハケメ，その上の胴部は横方向へのヘラケズリ，口縁部は横方向へのハケメで仕上げている。

６．高坏。口径23cm。逆「ハ」の字状に大きく開く坏部の下に明瞭な稜を有し，「ハ」の字状に大きく開く脚部を造っているが，脚部の下の方は欠損している。脚部中位には，３孔を穿っている。外面は，全体的に縦方向のヘラミガキで丁寧に造られており，口唇部はさらにナデで仕上げている。内面も坏部は横方向への細かいヘラミガキで仕上げられ，口唇部は外面同様にナデで仕上げている。脚部内面は，軽いヘラケズリの後に下部の方だけ横方向のハケメで仕上げている。

３．千代南原遺跡第Ⅵ地点第４号特殊遺構・第２号溝状遺構出土の土器について

千代南原遺跡第Ⅵ地点は小田原市千代南原553～556番地に所在する遺跡で，民間業者の宅地造成工事に伴う事前調査として取り付け道路部分を対象に平成６年４月25日から６月７日まで調査を行った。調査団は滝澤　亮を調査団長に，小池　聡を調査担当者とし，盤



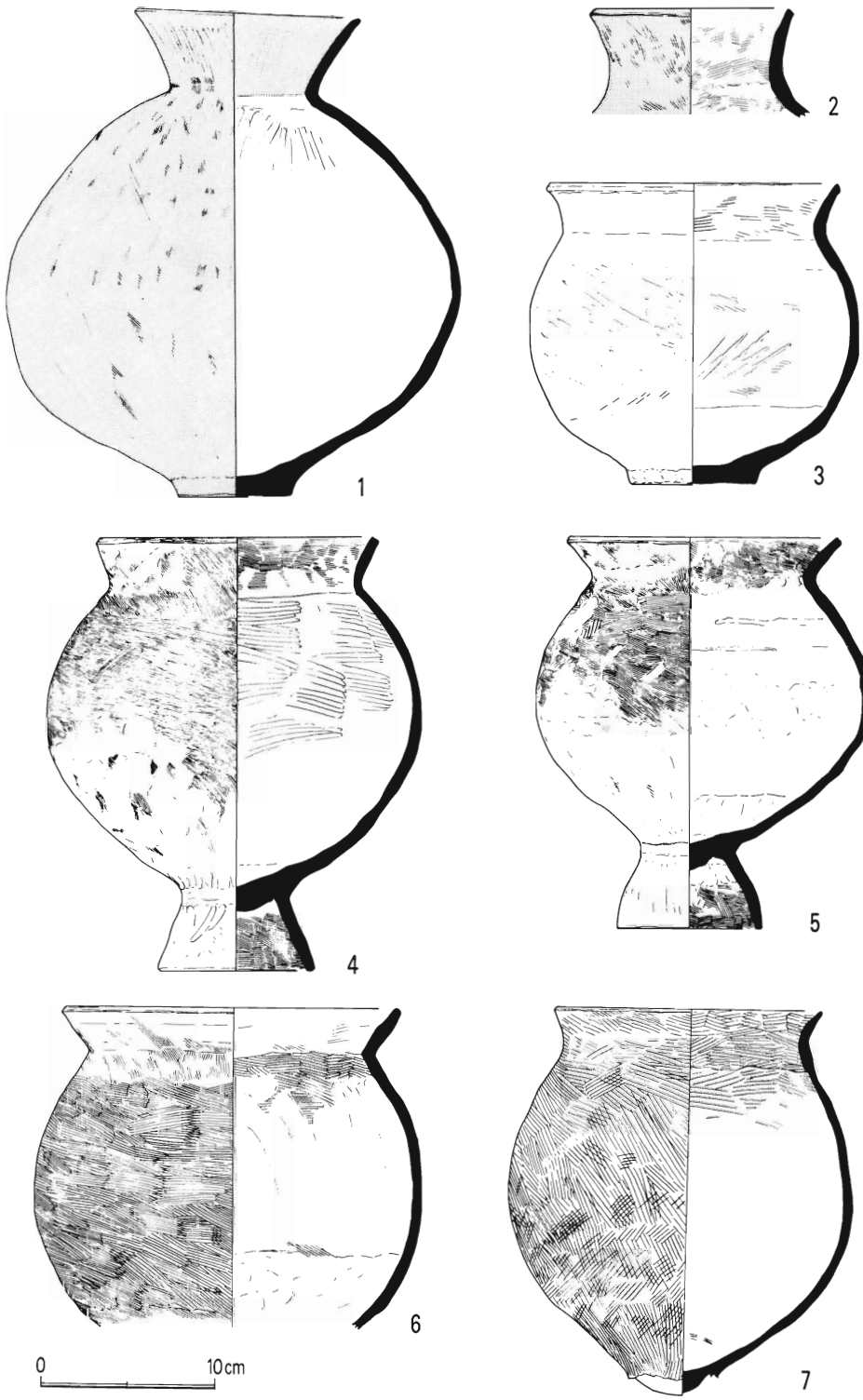
第４図　千代南原遺跡　第Ⅵ地点全体図

古堂考古資料展示室の職員を調査員として編成した。

我々が千代南原遺跡内で行う発掘調査は初めてであるが，過去には５度にわたる調査が行われている。隣接する千代南原遺跡第Ⅳ地点の報告書が刊行されているので，それを参照されたい。

当遺跡からは，竪穴住居址２軒，特殊遺構４基，溝状遺構５条，土壙・ピット等が検出されている(第４図)。このなかで今回紹介を行うのは，SX04と呼称している特殊遺構から一括して出土している土器群と，SD02と呼称している古墳の周溝址と考えられる溝状遺構から出土した土器である。これについても遺構について説明を行い，次に土器について見ていきたい。

SX04（写真３・４）この遺構は調査区北西側の一番隅において検出された。南北に延びる溝状遺構SD05によって切られている。調査区の関係からごく一部分の調査しか行え



第５図　千代南原遺跡　第Ⅵ地点 SX04出土土器（１）

なかった。

当初は方形周溝墓等の溝状遺構と考えたが，いわゆる断面が「V」・「U」字状にならずに一方の立ち上がりしか確認されなかったことから，一応特殊遺構として呼称することにした。

またこの遺構からは，後述するように土器が多量に一括投棄されたような状況で出土している点も注目される。このような状況を考えると，後述するSD02と何らかの関係をもつものかもしれない。

SX04出土の土器（第５～７図１～23）　今回は多量の土器が出土しているため，完形品を中心に23点の土器を紹介することにした。また図示はしていないが，Ｓ字口縁台付甕の破片及びタタキメ甕の破片が検出されている。

１．短頸壺。口径12.6cm，底径6.4cm，器高27.6cm。ほぼ完形で出土している。単口縁で，「く」の字状を呈する口縁部に，ほぼ球形の胴部をなし平底である。外面および内面口縁部に赤彩が施されている。

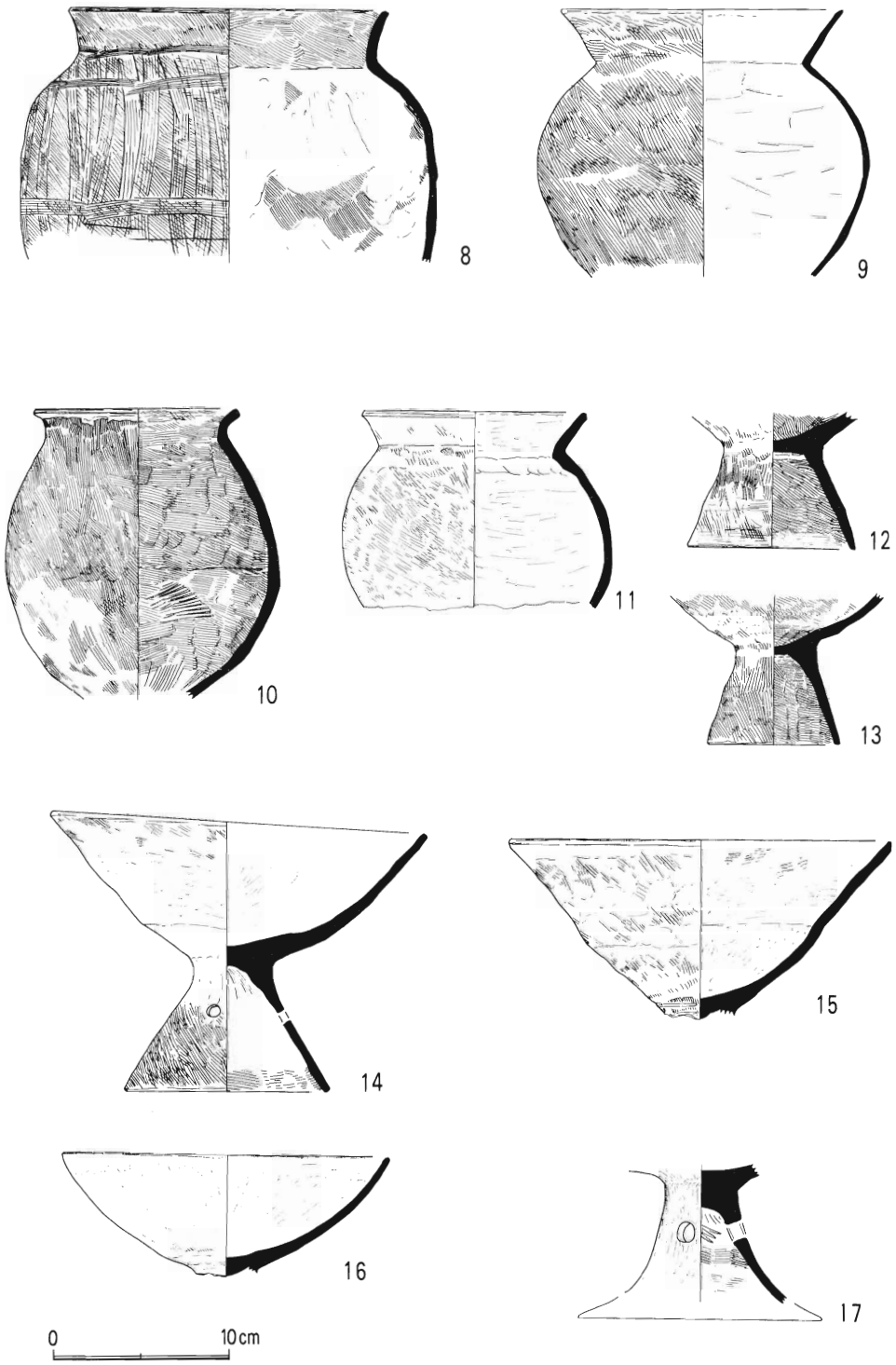
２．短頸壺。口径11cm。口縁部破片での出土である。単口縁で，口縁部とあまり差のない胴部が付く小型品と考えられる。外面は赤彩が施され，内面はところどころに横方向へのハケメが残っている。

３．小形甕。口径16.4cm，底径6.9cm，器高17.3cm。ほぼ完形で出土している。「く」の字状をなす口縁部に球形の胴部を成す平底の小型のナデ甕である。口縁部内面に，部分的にハケメが残る。

４．台付甕。口径15.5cm，底径8.4cm，器高24.6cm。ほぼ完形で出土している。口縁部は「く」の字状をなし，胴部はほぼ球形で短めの台部を付ける。脚台部は分割成形で，ハメコミ式である。外面は，口縁部から胴部にかけて細かいハケメを斜め方向に施し仕上げている。内面は，口縁部では横方向への細かいハケメ，胴部ではヘラナデで仕上げている。

５．台付甕。口径15.2cm，底径8.1cm，器高22.3cm。ほぼ完形で出土している。口縁部は「く」の字状をなし，胴部は球形をなし短めの台部を付ける。脚台部は分割成形で，ハメコミ式である。良く観察すると台部の接合痕が観察できる。外面は，口縁部から胴部にかけて細かいハケメを斜め方向に施しているが，胴部以外はナデて仕上げられているためハケメは目立たない。口縁部内面は，横方向への細かいハケメが残る。胴部内面はナデて仕上げられているが，輪積痕が数段残っている。台部は外面がナデ，内面が横へのハケメである。

６．台付甕。口径18.8cm。胴部下部から台部を欠損して出土している。口縁部は「く」の字状をし，胴部はほぼ球形をなしている。胴部外面には，横方向へのハケメによって仕上げられている。胴部内面の上方には，横方向へのハケメが残る。その他の部分はナデで



第６図　千代南原遺跡　第Ⅵ地点 SX04出土土器（２）

仕上げているためハケメは消えている。

7．台付甕。口径15cm。甕の部分は完形で台部のみ欠損して出土している。脚台部はハメコミ式である。口縁部はゆるやかな「く」の字状をなし，胴部はやや下部に最大径をもつ楕円形に近い形である。外面は，全て若干粗めのハケメで仕上げられ，口縁部付近は横方向，胴部にかけては斜め方向である。内面は，口縁部付近に横方向のハケメがみられる。

8．台付甕。口径18.4cm。甕の部分の破片で出土している。口縁部は単口縁で直立気味で，それに俵型に近い胴部が付く。台部の存在は予想されるが欠損していて不明である。外面は，斜め方向の細かいハケメで仕上げているが，胴部のみその上から模様状に縦横にさらにハケメで仕上げている。内面は，口縁部が横から斜めのハケメ，胴部は斜めのハケメの後に軽くケズリで仕上げている。

9．台付甕。口径11cm。甕の胴部下半から台部を欠損しての出土である。口縁部は，「く」の字状をなし球形の胴部を有する。外面は，斜め方向の粗めのハケメで仕上げている。内面は，口縁部ナデ，胴部は軽いケズリ状である。

10. 台付甕。口径11.4cm。甕の胴部下半から台部を欠損しての出土である。口唇部はヨコナデで面取りをしており，断面が逆「く」の字状になっている。口縁部から肩部にかけて逆「ハ」の字状になり，楕円形に近い胴部が付いている。外面は口唇部を除いて縦方向のハケメ，内面はほぼ全部に横方向のハケメで仕上げている。

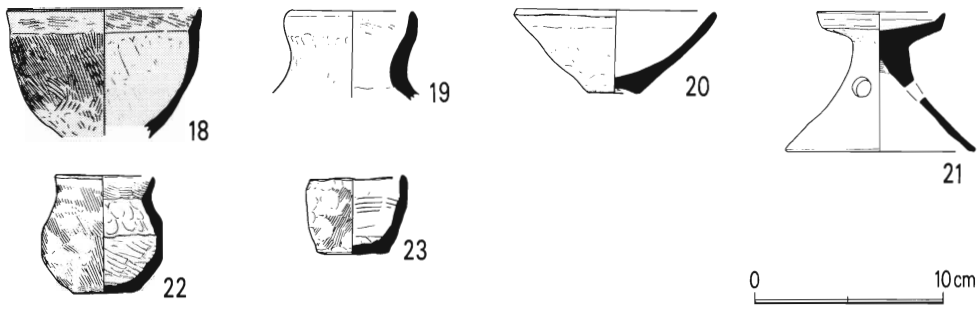
11. 台付甕。口径12.4cm。甕の胴部下半から台部を欠損しての出土である。口唇部はヨコナデで面取りをしており，断面が逆「く」の字状になっている。口縁部から胴部にかけては断面「く」の字状になり，ほぼ球形の胴部が付く。外面は，胴部が斜め方向のやや粗めのハケメで仕上げている。

12. 台付甕。底径9.4cm。脚台部から胴底部にかけての破片で出土している。内外面ともハケメで仕上げている。

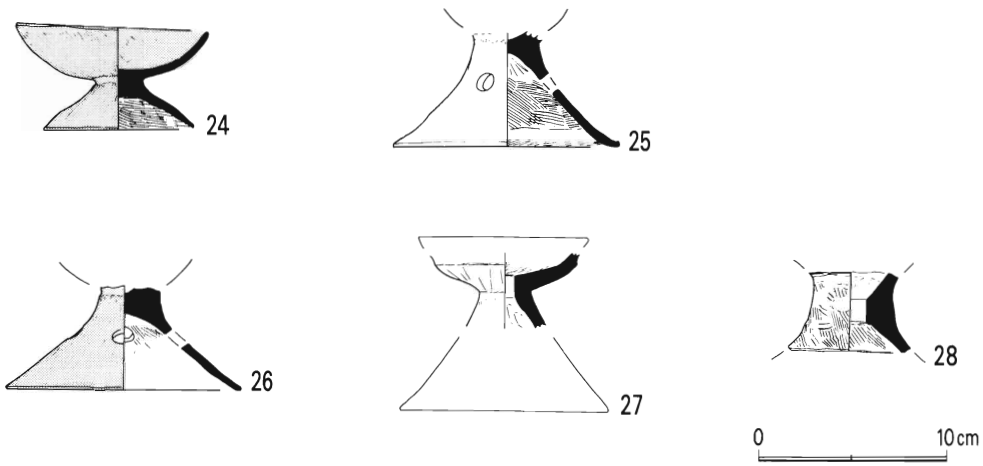
13. 台付甕。底径7.4cm。脚台部から胴底部にかけての破片で出土している。胴部は球形になると思われる。内外面ともハケメで仕上げている。

14. 高坏。口径21.2cm，底径11.4cm，器高15.5cm。完形で出土している。坏部が大きく逆「ハ」の字状に開き，下位に僅かに稜をもつ。脚部は，「ハ」の字状をして中位よりやや上方に3孔を穿っている。坏部外面には若干ハケメが残るが，ほぼナデで仕上げている。内面も丁寧にナデで仕上げている。

15. 高坏。口径21.4cm。脚部を欠損して出土している。坏部は深く大きく逆「ハ」の字状を呈し，中位よりやや下方にかすかに稜をもつ。内面中位にもかすかに稜をもつ。脚部の形状については不明である。外面は，口唇部はヨコナデで，その下の坏部には若干の粗いハケメが残っているが，部分的にナデている。内面は，全体的にナデで仕上げているがごく一部にハケメが残る。



第７図　千代南原遺跡　第Ⅵ地点 SX04出土土器（３）



第８図　千代南原遺跡　第Ⅵ地点 SD02出土土器

16. 高坏。口径18.5cm。脚部を欠損して出土している。坏部は比較的大きく浅い椀状をなす。脚部の形状については不明である。内外面とも軽いヘラミガキで仕上げている。

17. 高坏。脚部破片で出土している。破片であるため詳しい形状は不明であるが，脚部はあまり大きく開かない「ハ」の字状を呈すると考えている。中位よりやや上方に３孔を穿っている。外面は，ヘラミガキ，内面は，横方向へのハケメで仕上げている。

18. 椀。口径10cm。底部付近を欠損して出土している。丸椀状になり平底の底部が付くものと考えている。外面は，口縁部ヨコナデ，体部は縦方向のハケメで仕上げている。内面は口縁部にハケメを残し，体部は軽いヘラケズリ状で仕上げている。内外面ともに赤彩を施されている。

19. 小形壺。口径6.9cm。口縁部付近が破片で出土している。若干内彎する口唇部からすぼまった口縁付近までで，その下に楕円形の胴部が付くと考えている。内外面ともに軽いケズリの後にナデで仕上げている。

20. 鉢。口径10.4cm，底径2.8cm，器高4.5cm。完形に近い形で出土している。逆「ハ」の字状を呈し，小さめの底部が付く。外面には，指頭痕を残しナデで仕上げている。内面もヨコナデで仕上げている。

21. 小形器台。口径6.6cm，底径9.8cm，器高7.6cm。完形で出土している。器受部が短く立ち上がり稜を有する。脚部は，ほぼ中位に3孔を穿っている。外面は器受部がヨコナデ，脚部はヘラミガキで仕上げている。内面は，器受部がヨコナデ，脚部はナデで仕上げている。

22. ミニチュア壷。口径5.1cm，底径2.9cm，器高6.2cm。完形で出土している。手づくねで作っている。外面はハケメで，内面の口縁部はハケメで，胴部状面は手づくね痕が，下部はヘラミガキ痕が残っている。

23. ミニチュア坏。口径5.1cm，底径3.8cm，器高3.9cm。完形で出土している。手づくねで作っている。外面はハケメの後に，指頭痕を残している。内面は部分的に粗いハケメを残している以外は，ナデで仕上げている。

SD02（写真5・6） この遺構は調査区南東において検出され，ほぼ南北に延びる溝状遺構SD01に切られている。また大土坑が検出された千代南原遺跡第Ⅳ地点は，東側に隣接する地点の調査である。

平面形は非常に大規模な円形を呈すると考えている。このことは後からこの溝状遺構の性格を確認するために入れたトレンチでの遺構の検出状況からもうかがえる。規模は調査区域の確認面での幅が7.2～8.1m前後，下場での幅は 3.2～4.6m前後，断面は「U」字に近い逆台形で，深さは確認面から1.5m以上をはかる。

調査区の関係からごく一部分の調査しか行えなかったが，本遺構を古墳址と考えるならば周溝外周で直径約50m規模，周溝内径で36m前後のものになると考えられる。

第4図を参考に断面を観察すると，溝の上部である4層からは千代廃寺のものと考えられる瓦等が出土している。また，溝内下部および底部付近からは，後述するような土器片が多量に出土している。今回図示した5点以外には，今回の調査区内から図示できるような土器はあと若干存在するのみである。

これらの点から考えると，相模国の初期国分寺ともいわれている千代廃寺が存在して廃棄されるまでの時点においては，若干の浅い溝状をなしていたことがうかがえる。千代廃寺の寺域付近に存在すると考えられる当遺構の性格を考える上で興味深い点がある。

SDO2 出土の土器（第8図24～28） 今回図示した24～28までは全て高坏と器台であるが，このほかにS字口縁台付甕，甕，壷等の破片を確認している。

24. 小形高坏。口径10.5cm，底径8.1cm，器高5.4cm。ほぼ完形で出土している。坏部

に稜をもたず椀状になるもので，小さく逆椀状に開く脚部が付く。外面および坏部内面が丁寧にヘラミガキで仕上げた後に赤彩されている。脚部内面は，横方向のハケメで仕上げている。

25. 小形高坏。底径12cm。脚部のみの出土である。「ハ」の字状に小さく開く脚である。脚部中位に3孔が穿たれている。外面は縦方向のヘラミガキ，内面は横から斜め方向のハケメで仕上げている。

26. 小形高坏。底径12.2cm。脚部のみの出土である。「ハ」の字状に開く脚である。脚部やや上位に4孔が穿たれている。外面は縦方向のヘラミガキの後に，赤彩が施されている。内面は一部にハケメが残るが，その上からナデで仕上げられている。

27. 小形器台。有稜をなす器受部の付近の小破片での出土である。

28. 器台。連結部の破片での出土である。外内面ともにハケメが残っている。

4．おわりに

遺構の性格について

すでに紙幅を費やして説明をしてきたように，千代仲ノ町第Ⅳ地点の溝状遺構は方形周溝墓，それも前方後方形になる可能性が高いと考えている。

これについては近隣で調査され報告書が刊行されている神奈川県横浜市稲ケ原遺跡A地点及び静岡県富士宮市丸ケ谷戸遺跡が参考になるので，両例と比較してみたい。

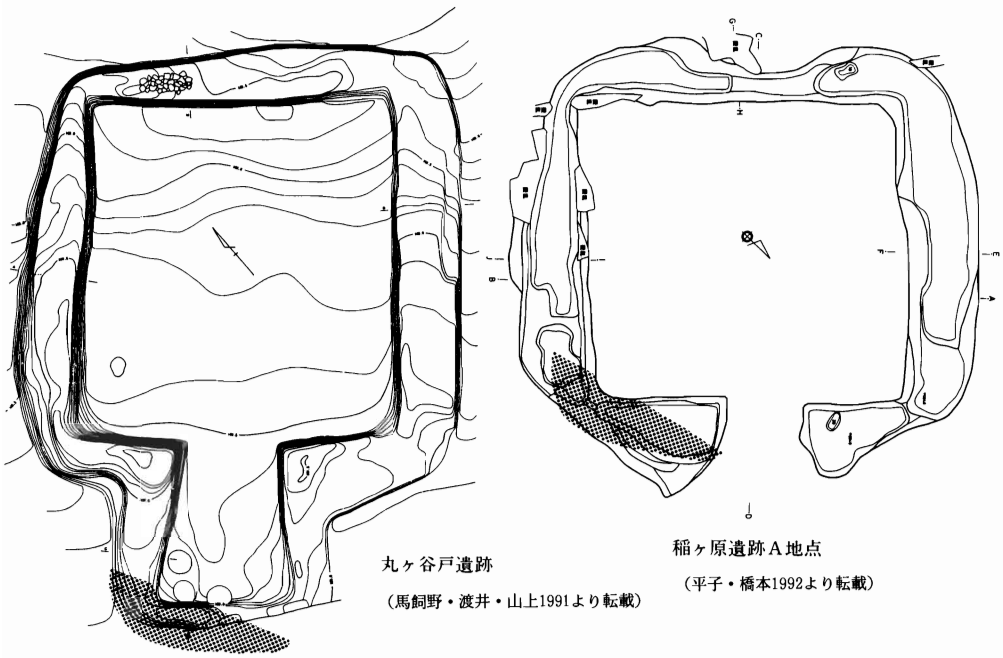
稲ケ原遺跡A地点例は，前方部前面に区画の溝をもたずブリッジ状に残した形で前方部ともいうべき台状部を造っている。

丸ケ谷戸遺跡例は，前方部まで溝が全周している形である。前方部前面の溝の一部分が未調査であるが，他の部分の溝に比較してやや狭い状況が読み取れる。

第10図はこの両遺構に千代仲ノ町例をスクリーントーンに写して重ねてみたものである。なにぶんにも調査面積が狭いため，可能性以上のことが言えない点が残念である。

また千代南原第Ⅵ地点のSD02と呼称している大溝は，古墳の周溝と考えられる。周溝外周部での直径は，約50mにもなると考えられる。現在，この古墳が立地する丘陵部は先端が民家によって削られており，周溝の大半もその折りに削られてしまったと考えられる(第9図)。しかし，このような古墳が存在していたことは，古記録等いずれの文献にも記録されていない。調査の結果から考えれば，千代廃寺がまだ存続していた頃には，この古墳の周溝は浅い溝になっていたとおもわれる。が，マウンドの状況については不明である。常識的に考えれば，この地に千代廃寺が造営されるまでには約400年近くの隔たりがあるので，その間に徐々に削平されてしまったのであろう。これについても調査面積が狭いためにこれ以上のことに言及できない点が悔やまれる。

第9図　千代台地における調査例と千代南原遺跡　第VI地点 SD02推定復元図



第10図　千代仲ノ町遺跡　第Ⅱ地点 SD02と他例の比較図（一部改変）

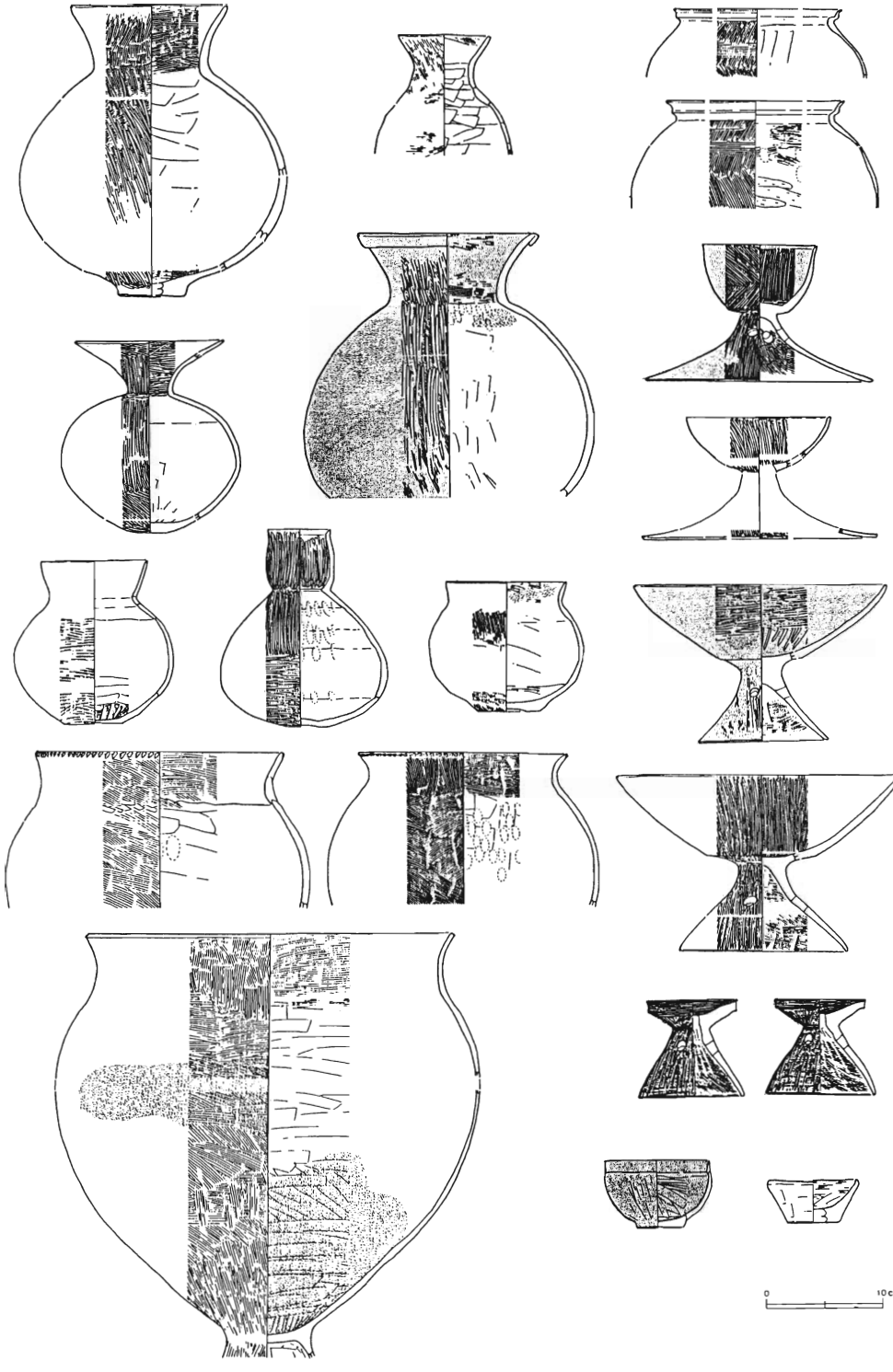
土器について

小田原市域出土の該期の土器については，公開されている資料が少ないのが現状である。まして千代台地に限って見れば今回報告した千代南原Ⅵに隣接する千代南原Ⅳの資料が公表されているのみである（第11図)。そのようななかで，今回遺構と共に出土状況がはっきりとした形で土器群が把握できた点は，今後の研究に基礎的な資料となるであろう。

さて以上詳しく見てきたように，千代仲ノ町ⅡSD04出土の土器群は千代南原Ⅵ SX04・SD04 出土の土器群に若干先行することは，土器の様相や遺構的に考えても妥当なことであろう。

また千代南原ⅣSD01出土の多量の土器群は，千代南原ⅥSX04出土の土器群と非常に組成が似ている点が注目される。特に留意されるのは，両遺構ともＳ字口縁台付甕やタタキメ甕の破片が出土している点である。これらの土器組成は，私がかねてから述べている該期の土器編年のⅡ期に相当することは明白であろう。

また千代南原ⅥSD02の土器は，それらと同時期か若干下降する時期を考えている。もう少し詳細に遺物を検討してから最終的な結論は出したいと考えているが，たとえⅢ期になるにせよ，この時期にこの地にこれだけ大規模な遺構を造営できる人々がいたことは，注目に値しよう。



第11図　千代南原遺跡　第Ⅳ地点1号土壙出土主要な土器実測図
（諏訪間他　1987より転載）

以上いくつかの推測をまじえて意見を述べてきたが，本稿の意図するところは，今回資料紹介を行った土器群が該期の小田原地域の土器編年を考える上で重要であると考えたからにほかならない。遺構の性格については，なにぶん小面積での調査であるため今後の調査の状況によっては，今回の推測が全く的外れになる可能性もあり得ることを記して筆を置きたい。

本稿を草するにあたり小出義治先生をはじめ，長谷川厚，西川修一，坂口滋皓，渡井英誉等の各氏，また地元小田原市教育委員会の関係者には数々のご教示とご指導を頂きお世話になった。

事実関係の記載および挿図・図版の作成に当っては，調査団の滝澤友子，小池　聡，有馬多恵子，細井佳弘，石井敦子の諸氏をはじめとする盤古堂考古資料展示室の皆さんの労を煩わした。記して謝意を表すものである。

最後に文末になってしまったが，本稿の執筆を本誌にご推挙いただいた神奈川県考古学会の曽根博明氏，同じく編集担当の村田文夫氏には何かとお世話をおかけした。記して謝意を表すものである。

引用・参考文献

大塚　初重　1985「東国古墳発生論」『論集 日本原史』 吉川弘文館

河野　一也　1993「奈良時代寺院成立の一端について(Ⅳ)」『神奈川考古第29号』 神奈川考古同人会

諏訪間順他　1987「千代南原遺跡第Ⅳ地点」『小田原市文化財調査報告書22集』小田原市教育委員会

滝澤　　亮　1984「神奈川県」『古墳時代土器の研究』 古墳時代土器研究会

　　1990「小型平底坩の系譜」『相武考古学研究所研究紀要第１集』 相武考古学研究所

滝澤　亮他　1994「大塚戸遺跡」『大和市文化財調査報告書第60集』 大和市教育委員会

塚田　順正　1986「千代南原遺跡第Ⅱ・第Ⅲ地点の調査」『小田原市文化財調査報告書21集』 小田原市教育委員会

平子　順一・橋本　昌幸　1992『稲ケ原遺跡Ａ地点発掘調査報告』 財団法人 横浜市ふるさと歴史財団

馬飼野行雄・渡井　一信・山上　英誉　1991「丸ケ谷戸遺跡」『富士宮市文化財調査報告書第14集』 富士宮市教育委員会

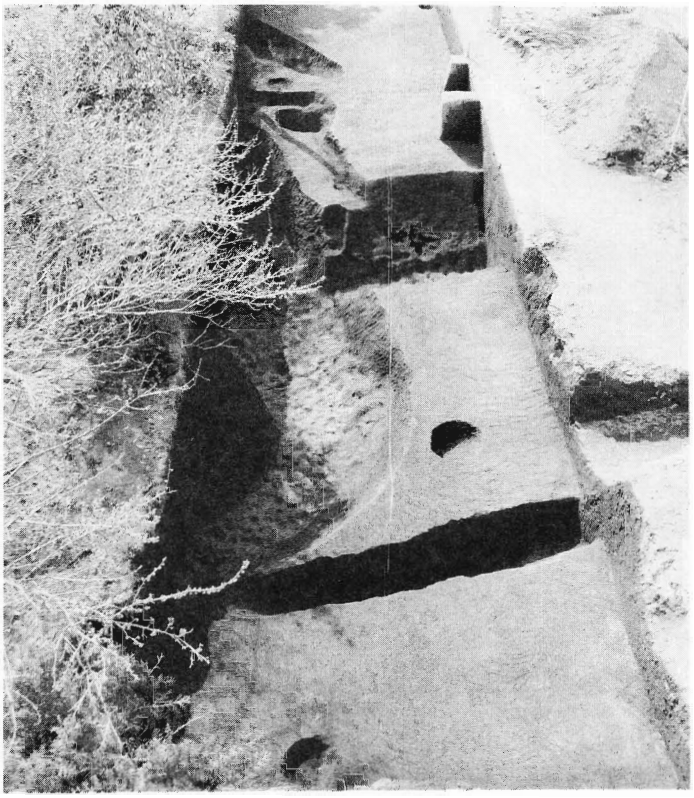


写真 1　千代仲ノ町遺跡 SD04全景（東側から）

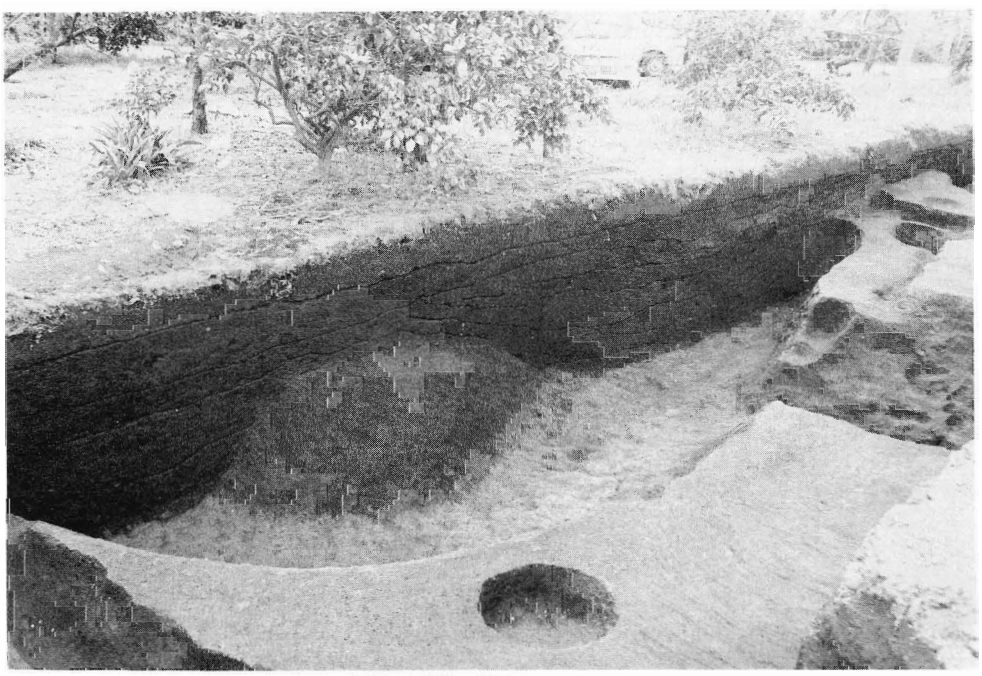


写真 2　千代仲ノ町遺跡 SD04全景（北側から）

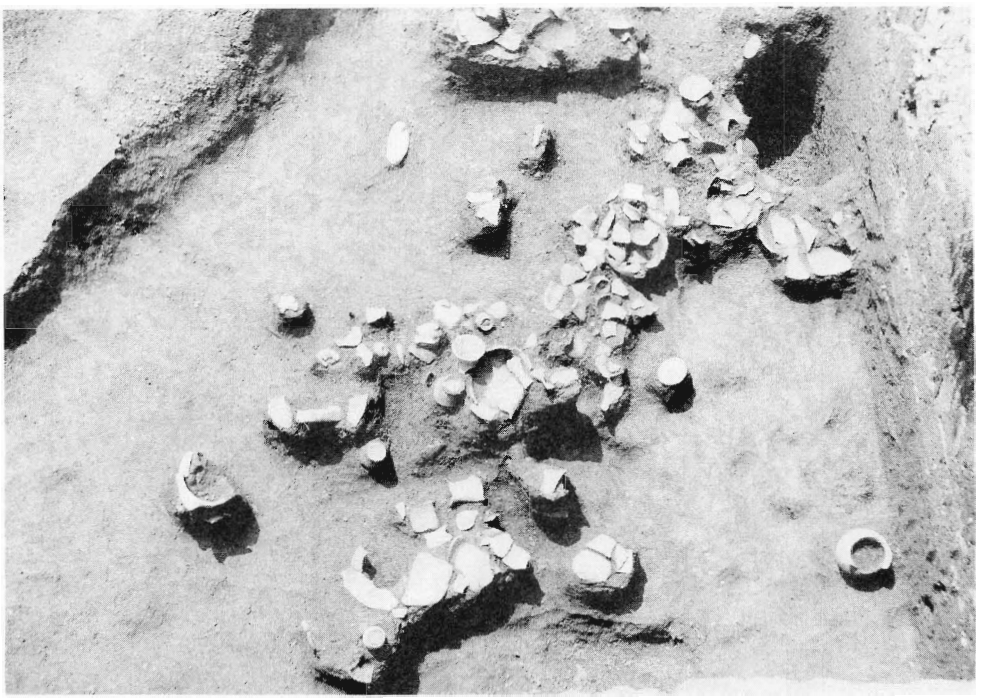


写真 3　千代南原遺跡 SX04 遺物出土状況

写真 4　千代南原遺跡 SX04全景（東側から）

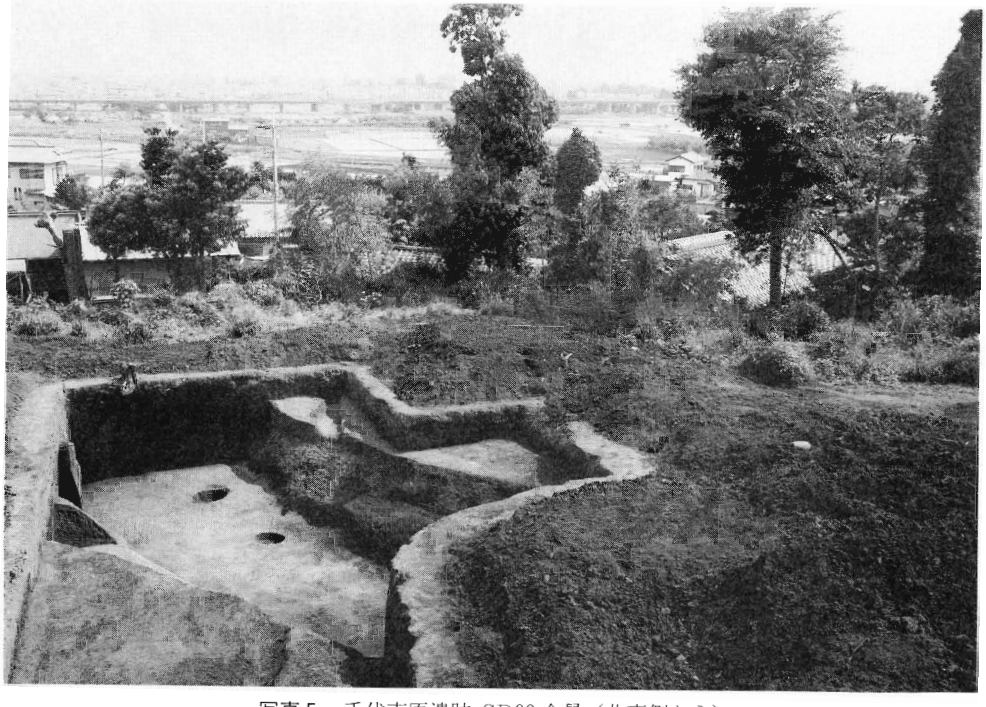


写真 5　千代南原遺跡 SD02 全景（北東側から）

写真 6　千代南原遺跡 SD02全景（北側から）

相模国府域の様相

― 国府域内の集落の分析をとおして ―

明石　新

はじめに

昭和40年代後半に入って，県内の各地で大型の調査が行なわれ多くの成果をあげ，神奈川県の考古学の研究は一段と進歩したのが現状である。特に土器研究は集落構造の分析を行なう上での基本的な課題として取りあげられ，各遺跡毎に変遷・編年[1]が提示され，20～30年単位での編年体系が確立されるようになった。

この背景には，須恵器窯[2]，灰釉陶器・緑釉陶器窯[3]の生産址での編年や平城京・平安京といった宮都での記年銘の木簡に伴う土器組成の編年[4]によるところが大きい。かと言って，研究者間の微妙な食違いは否定できないが，大筋の変遷・編年観は一致していると判断している。

相模国府研究も下曽我遺跡や宮久保遺跡の調査により活発に展開されているが，肝腎の「政庁」を検出していたために初期国府所在地については，二説が有力視されている。一つは海老名市に所在する国分寺周辺[5]に，二つは小田原市の千代廃寺周辺に比定する見解[6]があるが，何れの説も決定打に欠けている。前者の研究者の一人である国平健三氏は国分寺は国分寺の詔以後創建されたとの見解[7]を発表したが，現時点での国分寺周辺域での調査では何ら国府に関する遺構や遺物は発見されていない。問題は国分寺があるから国府が近傍にあるのではないかとの論証は，実証性に欠けるものである。後者は千代廃寺を初期国分寺にあて，下曽我遺跡周辺を国府所在地にあてる見解であるが，傍証するには不十分である。現在の状況は千代廃寺を足下郡の郡衙に伴う郡寺[8]との考え方や，下曽我遺跡を７世紀末の初期国府を足柄下評衙内[9]（後に足下郡衙）に置かれたとの考え方もあり，新たな展開状況となっている。

こうした相模国府研究の状況にあって，平塚市四之宮の『稲荷前Ａ遺跡第１地点』から，「国厨」・「大住厨」・「大厨」の墨書土器が出土した。本来ならば調査した小島弘義氏が執筆するはずであったが，突然の逝去のために，筆者が第３地点を調査した関係で報告することにとなった。十分な分析を行なうことができなかったが，遺構や遺物（墨書土器も含む）を検討し，少なくとも従来の国府所在地の論点では説明できない点から，初期国府所在地はもともと平塚市にある可能性が強いと発表[10]した。

今回の視点は国府域の集落の分析からその様相を探り，初期国府所在地を平塚市四之宮周辺域に位置付けるものである。

1.「国厨」の墨書土器について

(1) 遺跡の概要

「国厨」を出土した稲荷前A遺跡はJR平塚駅から北約2.5kmに位置し，砂州・砂丘上に立地する。周辺の六ノ域・高林寺遺跡等は官衙域として注目されていたが，本遺跡が具体的に調査が行なわれたのが平成元年であり，報告されたのが平成4年である。

調査面積165㎡という小規模な調査でありながら，図1のように重複関係が多くかつ密度の濃い遺跡であり，検出した遺構は掘立柱建物址1棟，竪穴住居址5軒，ピット88本，溝状遺構3条，井戸址2基である。

重複関係や遺構内の遺物の分析から，大きくⅦ段階の変遷がたどれる。

Ⅰ段階（7世紀末）

SB01が該当（SI04との新旧関係から）するものと考える。

Ⅱ段階（8世紀第1四半期）

SI04とSI05が相当する。遺物には若干形態差があると考える。

Ⅲ段階（8世紀第2四半期）

SI03とSD01が当てはまる。

Ⅳ段階（8世紀第3四半期）

SI01とSD02・03が相当する。ただし，SB01の新旧関係が逆転した場合はこの段階に比定され，掘立・竪穴・溝（区画溝）の組合せになる。

Ⅴ段階（9世紀末～10世紀初頭）

SI02が該当する。

Ⅵ段階（10世紀末～11世紀前半）

SE01や規模の小さなピット。

Ⅶ段階（13世紀中葉以降）

SE02が相当する。

このⅦ段階の変遷で，本章に関係するのは，Ⅲ段階の「大住厨」・「大厨」とⅣ段階の「国厨」が出土した意義である。

(2)「国厨」の意義について

「国厨」の墨書土器を出土した1号住居址からは，3点の「国厨」の他に，「国」や「厨」と判読出来るものが4点出土している。現時点での一つの遺構からの「国厨」の出土点数は3点は全国最多出土例である。遺構外からも2点出土している。

「国厨」の意味は「相模国＋厨」を標記したものである。最近，「国厨」を出土する遺跡の性格を検討し，「国厨」を出土する場所を直接「国厨家」と比定するのは疑問であるとの見解[11]がだされている。確かに国府域や国府域と推定される以外の場所，寺院址や骨蔵

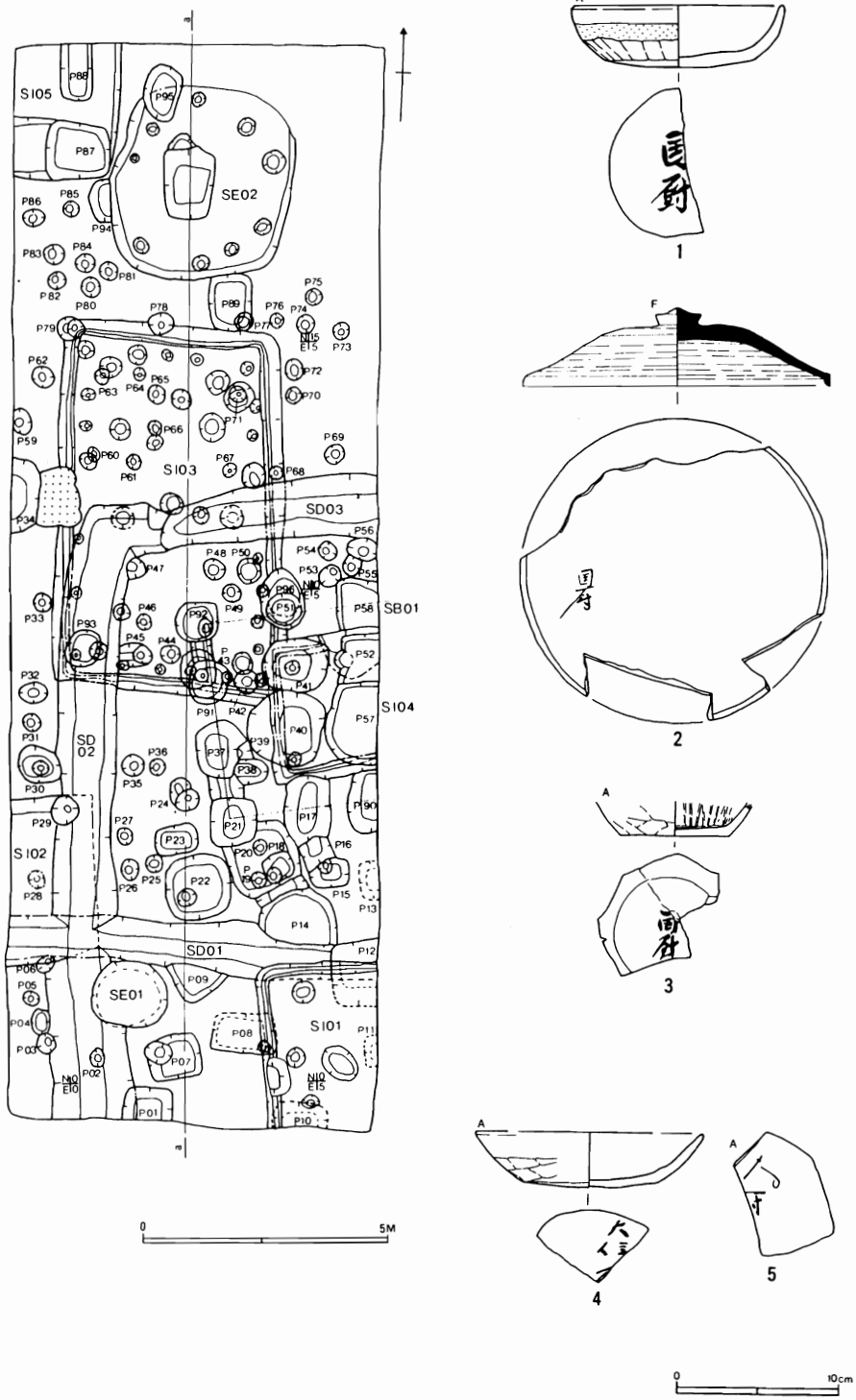


図１　稲荷前Ａ遺跡　第１地点

器の蓋に転用されたものが出土するなど，その出土地の様相は画一的ではないのが現状である。

こうした状況の中で，本地点から出土した「国厨」をどのように解釈するかが問題である。調査成果からでは「国厨家」を断定できる確証は得られていないが，少なくとも「相模国府の国厨家」と言う行政組織が何らかの形で介在したことは確かであろう。また，四之宮下郷遺跡以来の一連の調査・報告で，「政庁」は確認されてはいないものの「大住国府」を四之宮周辺に当てる可能性が非常に強いものがある以上，本地点が相模国府域に中に入ることは問題ないものと考える。つまり，「国厨」を出土した地点がどのような性格かは別問題として，国府域に入ることが重要であり，そのことに意義があるものである。

(3)「国厨」の墨書土器の年代について

「国厨」の墨書土器の年代については，大きく8世紀後半と9世紀前半の2時期の年代のものが含まれている。前者には1の土師器坏と2の須恵器蓋が該当する。1の土師器坏は中原上宿Ⅳ期，四之宮下郷第5～6期，草山第Ⅴ～Ⅵ期[12]に，2の須恵器は大振の碗の蓋で湖西編年Ⅴ期，鳩山編年Ⅳ期，北武蔵東金子窯跡前内出窯式[13]に相当するものである。後者は3の土師器坏である。甲斐型の坏と当初考えたが，甲斐型模倣坏[14]と訂正する。草山第Ⅶ，甲斐型土器編年のⅦ期[15]に該当する。

2時期の「国厨」を含む1号竪穴住居址は，1と2の床面からの出土から8世紀第3四半期の年代が与えられる。なお，未報告であるが，第2地点では9世紀第1四半期の「国厨」の墨書土器が出土している。

(4) 初期国府所在地について

「国厨」墨書土器の年代から，8世紀第3四半期には「相模国府」が存在したと考えるが，ここで問題としたいのは初期国府所在地である。海老名説・小田原説の何れもこの時期に大住郡に国府が移転したとは考えていない。海老名説は元慶二（878）年の国分寺倒壊・火災により移転したとの見解[16]，小田原説は弘仁十（819）年の国分寺火災によるという考えた方[17]であるが，何れの論拠をもっても墨書土器の年代とはかけ離れるものである。特に海老名説とは約百年の隔たりがあり，到底納得出来るものではなく，小田原説は足下郡衙の郡寺と解釈されるにいたってはなおさらである。この二説の根拠が成り立たない以上，初期国府は大住に所在したと考えるのが妥当である。

これを補論するものとして，3号竪穴住居から出土した4・5の「大住厨」・「大厨」をあげることができる。この墨書の年代は8世紀の第2四半期に該当するものであり，「国厨」とは約25年遡るものである。一般的に7世紀末から8世紀初頭に郡衙が，8世紀前半に国府が成立したと考えられて[18]いる。「大住厨」の墨書の背景は，国厨家が大住郡の郡厨家を動員した結果によるものと解釈する。

2．国府域の設定

前章で相模国府は当初から「大住郡」に所在するとの見解を示したが，本章では国府の範囲はどこから，どこまでであるかという「国府域」を設定する。今回の設定については，今までの調査され報告されたものを全て分析したわけではなく，遺跡の立地条件から検討したものであることをあらかじめ断わっておく。

政治・経済・文化の中心地である国府は，当然その国の社会的状況に左右されて成立された。つまり，在地豪族層の郡司（旧国造等）とどのような関わりの中で，国府が形成されたかは大きな課題である。一方どのような地理的条件の中で設置するかも重要な選択の一つであり，その条件の中でも自然地形が最優先されたと考える。

足柄峠を越えると相模国に入るが，国府が所在した平塚市（大住郡）は相模川河口付近の右岸に位置し，東に相模川，西に金目川，北は丹沢山塊，南は相模湾に面している。遺跡の立地や分布の在り方から以下のことが指摘出来る。

(1)　遺跡の立地条件から

①　沖積低地は砂州・砂丘，砂丘間凹地，自然堤防，扇状地，後背湿地に区分されるが，遺跡の分布は砂州・砂丘上に圧倒的に多い。

②　砂州・砂丘は縄文海進以降に形成されたものであり，弥生時代後期にはＪＲ東海道線が走る所まで形成された。

③　平塚市は砂州・砂丘が良く発達し，砂州・砂丘との間には砂丘間凹地が存在し，この砂丘間凹地は居住空間ではなく，生産空間の場である。

④　砂丘間凹地は金目川水系に開いている。

(2)　遺跡の遺構・遺物から

①　掘立柱建物址や住居址は砂州・砂丘や自然堤防に立地している。

②　規則性の在る掘立柱建物址や住居址は砂州・砂丘に多い。

③　井戸で木枠を伴うものは砂州・砂丘に多い。

④　特殊遺物は砂州・砂丘に多い。

⑤　溝状遺構は基本的に生産関連遺構と居住関連遺構とに大別され，前者は凹地や自然堤防に多く，後者は砂州・砂丘に多い。

⑥　八幡神社以南には遺跡が少なく，遺構密度も弱い。

（1）・（2）により，国府域は八幡神社以北，真土大塚山古墳以南に求めることができ，南は下田川凹地，北側は真土大塚山古墳の南側の凹地を境とする。西と東の境は判断しがたいが，現時点での状況から西はパイロット線付近，東は相模川の氾濫で切れる旧厚木道までと考える。なお，国府に付随した「津」は物資の搬入・搬出や交通・軍事手段としての利用を考えた場合，金目川より相模川が適していると判断する。

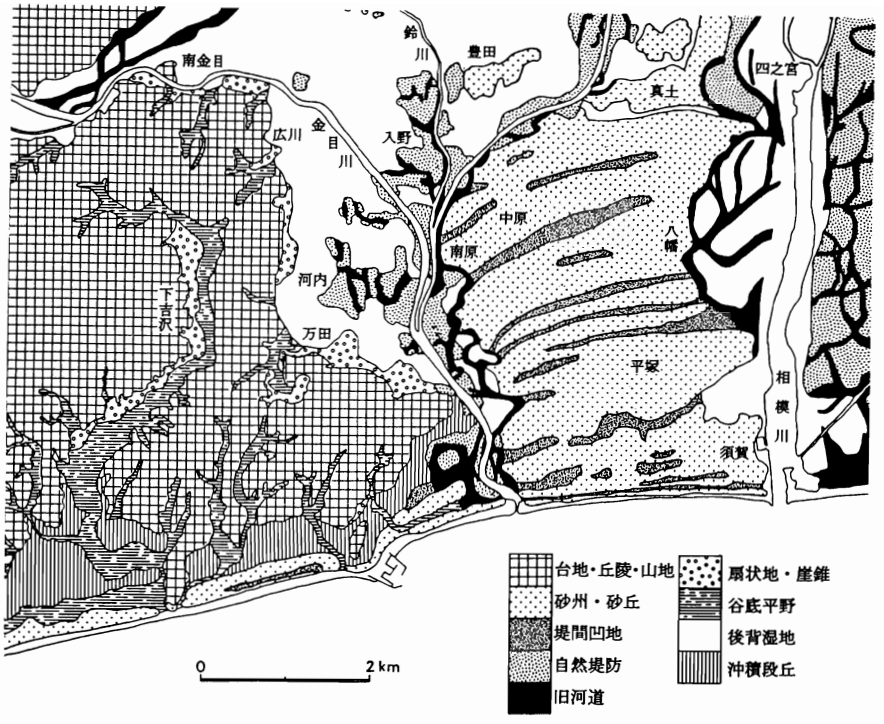


図2　地形分類図（森　慎一：1993より転載）

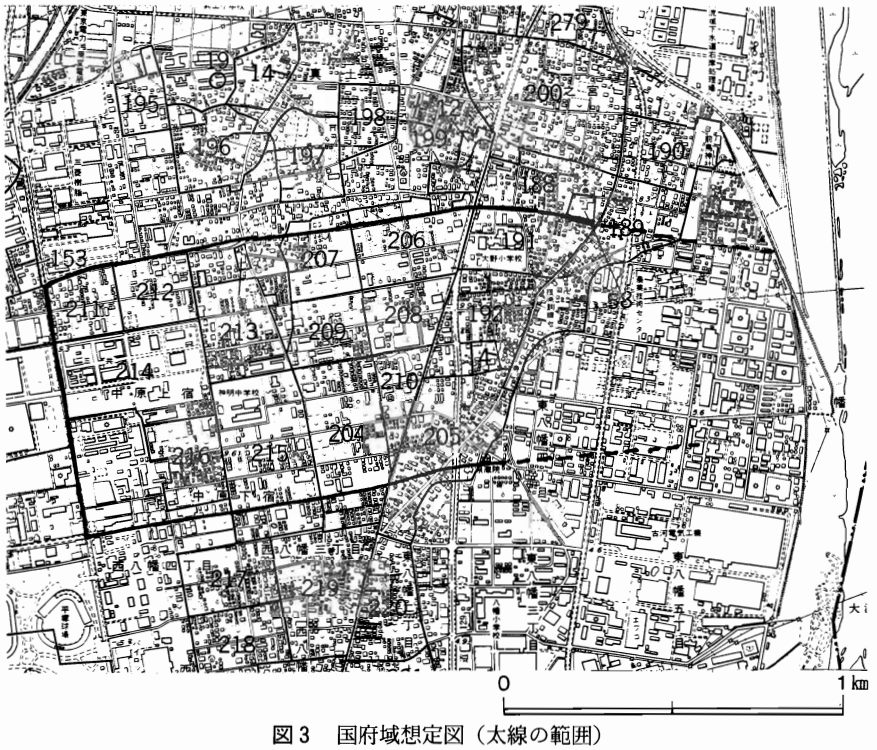


図3　国府域想定図（太線の範囲）

3．国府域の様相

本章では前章の国府域の設定に基づき，国府域の遺跡を分析し，その傾向と特徴から全体の様相を探るものである。分析を対象とし遺跡は国府域の17遺跡の内，天摩遺跡と高林寺寺院跡を除いた15遺跡であり，未報告のものは基本的に除いた。遺構の分析には掘立柱建物址，竪穴住居址や溝状遺構を視点に置いたが，溝状遺構に関しては良好な結果にいたらなかったのは残念[19]である。

(1) 各遺跡の傾向と特徴

1 六ノ域遺跡

本遺跡はNo.191として登録されており，その遺跡面積は56,000㎡を有する。現在まで10地点調査が行なわれているが，報告は第1～9地点までである。第1～9地点での調査面積は2,949㎡であり，全体の5.2%である。

第1地点は四之宮下郷のⅡ区をあてた。掘立柱建物址は検出されず，竪穴住居址が中心で，墨書土器「垂」・「x」や刻線土器が出土している。第3・4地点は大野小学校校庭内の調査で，掘立柱建物址41棟，竪穴住居址111軒等801基の遺構が検出されている。墨書土器「大」・「福」・「王」，刻線土器，石帯7点，緑釉陶器他官衙的遺物を多く出土している。この地区を官衙曹司群と推定しているが，実態は分かっていない。掘立柱建物址や竪穴住居址の時期区分の分析では，掘立柱建物址は7世紀後半から8世紀に集中しており，逆に竪穴住居址は9世紀後半以降に偏る傾向が指摘できる。この結果から8世紀を中心にした時期に曹司群が形成されたものであり，少なくともこの段階から国府の存在を肯定できる素材が在るものと考える。第5～9地点の成果ではこれといったものを見いだすことは出来ないが，遺物的には貴重な資料が出土している。先ず第8地点では，土師器坏の外面に人面墨書が施されるものである。県内では藤沢市の南鍛冶山遺跡の土師器甕に次ぐ二例目の出土となる。この人面墨書の時期は8世紀後半に比定されるものである。第9地点では土壙に大量の土器が伴い，中には黒笹90窯式に相当する灰釉陶器段皿の優品や墨書土器「中嶋」・「南中」が出土している。この土壙は祭祀的様相が強く，その性格を「大祓の祭場」に関連したものと解釈されており，この他にも第3地点でも大量の土器に「福」・「吉」等を伴った土壙が確認されている。

本遺跡の全体的な傾向として官衙曹司群の中心的存在として捉える事が出来る。

2 高林寺遺跡

本遺跡はNo.192として周知されており，その遺跡面積は86,000㎡の規模を持つ。現在まで13地点調査が行なわれているが，報告は第1～12地点までである。第1～12地点での調査面積は2,291㎡であり，全体の2.6%である。

第1地点は四之宮下郷の1区に該当する。掘立柱建物址7棟，竪穴住居址が28軒を検出

した。掘立柱建物址は9世紀，竪穴住居址は8世紀と10世紀が主体となり，六ノ域遺跡とは様相が異なる。銙帯2点，石帯2点，墨書土器「盛」・「郡」や刻線土器が出土している。第3地点は掘立柱建物址1棟，竪穴住居址17軒が検出されている。9世紀後半以降のものが主体である。銙帯3点，墨書土器「政所？」・「曹司」，刻線土器が出土している。第4地点は掘立柱建物址5棟，竪穴住居址23軒が検出されている。9世紀代の掘立柱建物址を中心にするが，竪穴住居址は7世紀後半から10世紀後半代に分散する傾向にある。第5地点は土壙・溝状遺構が多く，特に土壙としたものには掘立柱建物址の可能性のあるものが多い。9世紀後半以降が主である。墨書土器「口住」，石帯，鉸具が出土している。第6地点は9世紀後半以降の住居址と溝状遺構が主体である。第7・9地点は掘立柱建物址や住居址が検出されたが，この地点での最大の成果は区画溝の検出といえる。規模は東西45m・南北63m，幅1.2～1.3m，深さ1m前後を測り，溝の内側と外側に柱穴列が検出された。この区画溝は8世紀中葉～10世紀頃まで使用されたものとされ，その性格は伯耆国庁の規模を想定していることから，相模国府の政庁と判断したものと考える。しかし，13地点の調査では想定した範囲まで延びなければならない区画溝は確認されておらず，政庁の区画溝と判断するには問題があるものと考える。また，第7地点での住居址の分析でも7世紀後半から10世紀後半までのものがあり，政庁という場に住居址が存在するのも問題があろう。さらに，この区画溝の内側に大規模な掘立柱建物址の片鱗が窺われないのも疑問視する点である。13地点での正式な報告によって明らかにされるものと考える。第10～12地点は9世紀後半以降に遺構が偏る傾向があるようである。

全体的には掘立柱建物址は9世紀以降，住居址は8世紀と10世紀に主体があるようである。

3　坪ノ内遺跡

本遺跡はNo.189として周知されており，その遺跡面積は93,000㎡の規模である。現在まで5地点調査が行なわれているが，報告は第1～4地点までである。4地点までの調査面積は928㎡であり，全体の1％である。

第1地点では2軒の住居址を確認し，1軒が10世紀後半の所産である。第2地点は3棟の掘立柱建物址と7軒の住居址を検出した。1号掘立柱建物址は桁行4間・梁行2間の東西棟で，柱間寸法2m。2号掘立柱建物址は桁行3間以上・梁行2間の東西棟で，柱間寸法2.4m。3号掘立柱建物址は桁行4間・梁行2間の南北棟で，柱間寸法2.3～2.4m。これら3棟の掘り方は1mを越えるが，特に1号は1.50～2.26mと大きい。平面形態でも官衙特有の長方形や方形をとっている。3棟の掘立柱建物址は8世紀前半である。住居址は1軒以外は9世紀以降のものであり，8世紀と9世紀では遺構の様相が異なる。墨書土器，刻線土器，毛抜が出土している。第3地点では第2地点とその様相は一変し7世紀末と9世紀頃の溝状遺構が主体となる。注目されるのは弥生中期の方形周溝墓が確認されたこと

である。沖積低地で検出された最古のものであり，大原遺跡の弥生中期の住居址の検出から，低地での集落が徐々にではあるが開始されたことを物語るものである。その意味に於いては本論とは関係ないが，本市の歴史過程における一頁を飾るものである。第4地点は8世紀後半～9世紀の掘立柱建物址3棟と住居址6軒が確認された。掘立柱建物址は規模や平面形態の点から，第2地点のものとは異なるものと判断するが，3号掘立柱建物址は桁行3間・梁行2間の南北棟の総柱に東と西に廂が付くものは特異な存在である。

本遺跡は第2地点の掘立柱建物址が示すように，その規模や掘り方平面形態から，官衙施設の一角であり，報告者が指摘するように国府域の東端を示すものである。現に平成5年の第5地点[20]（第2地点の南側約50m）の調査では，9世紀後半の桁行6間・梁行4間の総柱の東西棟の掘立柱建物址が確認された。柱間寸法2.4～2.7m，柱穴は長方形から方形の一辺2m・深さ1.30mの規模を持ち，掘り方から根固め石や礎石と思われる礫が出土するなど従来の調査では見られなかったものが検出されている。また，その掘り方から硯，緑釉陶器や星形鋲が出土しており，国府の中にあっては重要な機能を担った施設の一部と考える。

4　稲荷前Ａ遺跡

本遺跡はNo.205として周知されており，その遺跡面積は105,000㎡の規模を持つ。現在まで3地点調査が行われているが，報告は第1地点まで，調査面積は165㎡であり，全体の0.1%である。

第1地点は本論で記述したとおりであるが，第2地点でも第1地点の報告書で取り上げたように「国厨」の墨書土器を1点出土している。この土器は甲斐型の土師器坏の底部に墨書され，9世紀代1四半期のものである。第1地点とは南東約50m挟んだ129線の反対側に位置するが，第1・2地点の「国厨」の墨書土器は6点，国厨と判読される3点を合わせると9点になる。確実な6点の「国厨」の墨書土器の数は全国の国府遺跡や国府関連遺跡から出土する点数を上回るものであり，出土した地点が国府外の国厨家の関連施設とは想定できない以上，国厨家の存在を当地点に当てるのは検討外れではないことと考える。

5　諏訪前Ａ遺跡

本遺跡はNo.206として登録されており，その遺跡面積は75,000㎡の規模である。現在まで10地点調査が行なわれているが，報告は第1・3～10地点までである。10地点までの調査面積は2,936㎡であり，全体の3.9%である。

第1地点は四之宮下郷の3・4区に該当し，313基の遺構の内，住居址65軒・掘立柱建物址9棟を確認した。堀立柱建物址の最大規模は桁行7間（10.5m）・梁行2間（3.6m）の南北棟を検出したが，相対的に県道拡幅という条件により確定出来るものがないのが残念である。8～9世紀が主体である。住居址は年代が分からないものが約3割あるが，7世紀後半から10世紀前半までの時期で，主体は9世紀後半にある。遺物の中には墨書土器

「大」・「刑」・「寺」・「富」，刻線土器，円面硯２点・転用硯，銙帯３点，石帯２点，鉸具２点が出土している。本地点は六ノ域第１地点と同様に官衙遺跡の一角である。第３地点は掘立柱建物址８棟・住居址12軒を検出した。掘立柱建物址は８世紀と10世紀，住居址は９世紀が中心となる。遺物の中で注目すべき物は１号掘立柱建物址から出土した墨書土器である。甲斐型の土師器坏底部外面に「家」の墨書の他に口縁部外面に水鳥の墨絵が対角線に描かれ，棟上げなどの慶事・祭祀に使用されたと報告されている。どのような出土状況かわからないが，地鎮の性格が考えられる。また，縄文土器勝坂式の完形の深鉢が逆位で出土している。沖積低地での初の縄文完形土器の出土であり，様々の問題を提起するものである。第４地点では掘立柱建物址は検出されていないが，163本の柱穴には多くの掘立柱建物址の存在を認めることが出来る。住居址18軒は７世紀後半から10世紀後半までのものであり，比較的継続的に存続したと考える。出土遺物の特徴を上げると，墨書土器「垂」８点，銅銙３点，円面硯２点や太刀の鎺がある。一般集落ではなく，官人層の住居域として位置づけたい。第５地点は掘立柱建物址３棟・住居址24軒を検出した。掘立３棟は９世紀であるのに対し，住居は８世紀後半から９世紀前半のものは確認されていない。遺物は灰釉陶器碗を転用した朱墨の硯や墨書土器「西」・「井」がある。第６地点は掘立柱建物址２棟・住居址23軒を検出した。掘立２棟の時期は分からないが，住居は８世紀前半と９世紀後半以降のものが確認されている。遺物は透かしのある銅銙巡方が出土している。第８地点は掘立柱建物址２棟・住居址６軒を検出し，掘立２棟は８世紀前半に対し，住居は８世紀前半と９世紀以降のものである。８世紀前半の掘立と住居は国府成立過程に絡んでいると考える。第９地点は掘立柱建物址７棟・住居址５軒を検出した。掘立７棟の内３棟は７世紀後半，８世紀前半・後半に対し，住居は９世紀以降のものである。

各地点の成果により，本遺跡は一般集落ではなく官衙関連遺跡の一角と考える。その実態は分からないが，時期により官衙曹司群の一部分であったり，官人層の居住域であったりするなどその様相は一律ではないと考える。

６　諏訪前Ｂ遺跡

本遺跡はNo.208として登録されており，その遺跡面積は44,000㎡の規模である。現在まで５地点調査が行なわれ，その調査面積は1,885㎡であり，全体の4.3％である。

第１地点は掘立柱建物址１棟，溝状遺構23条が検出。掘立柱建物址は桁行２間（3.1ｍ）・梁行１間（1.5ｍ）の南北棟であるが，報告者が指摘しているように掘立柱建物址としては，柱穴の配列から疑問である。溝状遺構は東西や南北に延びるものが多く見られ，１～４号溝状遺構は規模が大きい。これらの年代は概ね10世紀代に比定されるものと考える。「僅かな凹地がこのように集落空間以外の目的で位置づけられることは，相模国府の所在を考える上で重要性をしめる」とその特質を指摘している。第２地点は第１地点の南西約50ｍに位置し，検出した遺構の主体は溝状遺構51条である。凹地に立地し，溝主体である

ことから第１地点との関連が強いところである。基本的に凹地に立地する溝状遺構の性格は農耕に関連した灌漑施設と理解していることから，第１・２地点は国府域の中にあっては生産空間の領域に入るものであるが，その具体的性格は分からない。墨書土器「万」が出土している。第３地点は住居址26軒を検出した。７世紀後半から10世紀後半のものであるが，主体をなすのは８世紀前半の12基である。遺物では転用硯や刀子が比較的多く出土している。この点から「相模国府関連の下級官吏即ち刀筆の吏の生活の場の可能性が強い」と報告されている。その是非は別として，８世紀前半代の住居址が多く検出されたことに意義あるものと考える。第４地点は８世紀前半の掘立柱建物址１棟，10世紀後半の住居址１軒と８世紀と10世紀の溝状遺構４条を検出している。遺物では墨書土器「正」が出土している。第５地点は23条の溝状遺構が検出され，８世紀代が５条，10世紀代が18条となり，生産空間の場である。

本遺跡は第３地点を除く４地点は接近し，砂丘間凹地に立地している。溝状遺構が多く検出されたことが特徴であり傾向でもある。金目川に解析する「谷川」の最奥部にあたる本遺跡は丁度国府域を南北に分断するような状況を呈しており，単に生産空間の場として捉えるのが正しいかは検討の余地がありそうである。

７　稲荷前Ｂ遺跡

本遺跡はNo.210として登録されており，その遺跡面積は33,000㎡の規模である。現在まで５地点調査が行なわれている。報告は第１・２地点までであり，その調査面積は29㎡であり，全体の0.1％である。

第１地点は10世紀後半の掘立柱建物址１棟と溝状遺構１条を検出し，第２地点では住居址８軒を検出したが，時期の分かるものは10世紀前半の１棟である。

第１・２地点から本遺跡の全体的な傾向をつかむことは非常に難しいものがあるが，３～５地点の調査成果から類推すると，大型の掘立柱建物址を中心に竪穴住居址が展開し，遺物的にも優品が出土していることから，全体的な評価としては曹司群の一角に相当するものと考える。

８　七ノ域遺跡

本遺跡はNo.207として登録されており，その遺跡面積は85,000㎡の規模である。現在まで６地点調査が行なわれている。報告は第１地点だけであり，その調査面積は120㎡であり，全体の0.1％ある。

第１地点（国庫補助事業　－詳細分布調査－）では掘立柱建物址１棟，竪穴住居址５軒，溝状遺構４条が検出された。掘立柱建物址の時期は不明，竪穴住居址は８世紀前半２軒，９世紀３軒，４条の溝状遺構の内２条が９世紀のものである。遺物は墨書土器「石」が出土している。本調査では東西に延びる溝に直交する区画溝や桁行５間以上・梁行２間の南北棟で，柱間寸法約２ｍの規模をもつ大型の掘立柱建物址が検出された。竪穴住居址は少

ない。未報告[21]であるが第3地点でも桁行6間・梁行2間の南北棟の大型の掘立柱建物址が検出されている。

第1地点からの本遺跡の性格は判断しがたいが，大型の掘立柱建物址や区画溝の検出などから，国府域内でもかなり重要な曹司施設が存在したものと考える。重要施設の周囲には基本的に竪穴住居の出土件数は少ないものと考える。

9　山王Ａ遺跡

本遺跡はNo.209として登録されており，その遺跡面積は52,000㎡の規模である。現在まで4地点調査が行なわれている。報告は第2・3地点だけであり，その調査面積は395㎡であり，全体の0.7%ある。

未報告であるが第1地点[22]は9～10世紀の住居址，土壙，井戸址，溝状遺構が検出されている。第2地点は竪穴住居址11軒，溝状遺構11条が検出された。竪穴住居は9～10世紀のもので，8世紀のものはない。11条の溝状遺構の内時期が判別したのは10世紀の4条である。この地点は砂丘から凹地への移行部，南に傾斜する「谷川」の斜面に立地するために，遺構の上でもその特質が反映されている。つまり，北側の砂丘は居住域，南側の凹地移行部は生産域となっており，立地条件を生かした生活圏が営まれている。遺物は墨書土器「丨」や獣足の緑釉陶器壺破片が出土している。官衙域ではかなりの量の緑釉陶器が出土するが，獣足の壺は初めてである。第3地点は竪穴住居址9軒，溝状遺構8条が検出された。竪穴住居は9～10世紀のものが8軒，8世紀前半が1軒である。溝状遺構の内時期が判別したのは8・9・10世紀の各1条づつである。遺物は「大住」の墨書土器が出土している。

第2・3地点からの本遺跡の傾向は，掘立柱建物址がなく，住居址や溝状遺構が主体となり，時期的にも9世紀以降が中心となっている。官衙に関連した性格を有すると判断するにはあまりにも資料が少なすぎる。しかし，第4地点（一部概要発表[23]）は掘立柱建物址を中心とする内容で，特に8世紀後半の桁行4間（10.1m）・梁行3間（6.5m）の南北棟の大型の掘立柱建物址の柱穴掘り方内から，「佐波理匙」が出土している。全国の出土例から官衙施設と考えられ，その施設の中でもかなり中心的な存在として機能したものと考える。掘立柱建物群はさらに周囲に延びるものと判断される。

このように，遺跡内に於いては各遺跡でも指摘できることであるが，立地や時期ごとにその状況はかなり変化しており，時間と空間の相関関係の中で位置付けていくことが必要である。

10　天神前遺跡

本遺跡はNo.204として周知されており，その遺跡面積は108,000㎡の規模である。現在まで8地点調査が行なわれている。第8地点は未報告である。調査面積は2,727㎡であり，全体の2.5%である。

第１地点では掘立柱建物址３棟，住居址12軒，溝状遺構８条が検出された。掘立柱建物址は８世紀前半が１棟，住居址は７世紀後半１軒，８世紀前半９軒，10世紀後半１軒，溝状遺構は８世紀代４条に時期区分された。遺物には墨書土器「大仏」，鉄製品錠前鍵の他に鞴の羽口・取瓶が出土している。本地点は８世紀前半の掘立柱建物・井戸・住居・溝の組合せになり，その性格は鞴の羽口・取瓶の出土から鍛冶工房として捉えることができ，この時期が国府創建期であるだけに官衙鍛冶工房群の一角として位置付けされる。第２・４・５地点は小面積のために性格は分からない。第３地点は掘立柱建物址１棟，住居址13軒，溝状遺構２条が検出された。掘立の時期は分からないが，住居は７世紀後半１軒，８世紀前半７軒，９世紀後半２軒，10世紀前半３軒となる。遺物は墨書土器「真」，鞴の羽口・砥石・鉄製品・素鉄が出土している。８世紀前半代の性格を「下級官吏の居住域」として報告者は捉えているが，第１地点と同様に鍛冶工房群と理解する。しかし，９世紀後半以降の「真」を出土する住居址とどのように繋がるかは検討を要する。第６地点は掘立柱建物址１棟，住居址16軒，溝状遺構６条が検出された。掘立柱建物址は８世紀前半が１棟，住居址は８世紀前半７軒，８世紀後半５軒，９世紀前半２軒，10世紀前半１軒，溝状遺構は７世紀後半１条，８世紀代２条，９世紀代１条に時期区分された。遺物は墨書土器・刻線土器，鉄製品・金槌・羽口・鉄滓が出土している。第６地点の東に近接する第７地点は掘立柱建物址８棟，住居址44軒，溝状遺構19条が検出された。掘立柱建物址は８世紀前半１棟，８世紀後半１棟，９世紀前半２棟，９世紀後半３棟，住居址は８世紀前半14軒，８世紀後半６軒，９世紀前半８軒，９世紀後半10軒，10世紀前半３軒，10世紀後半１軒，溝状遺構は７世紀後半１条，８世紀代１条，９世紀代５条に時期区分された。遺物は墨書土器・刻線土器・鉄製品（鉄製の分銅）が多く，羽口112点・鉄滓約19kgが出土している。鉄滓の出土量は神明久保遺跡第１や第３地点に次ぐ量である。第６・７地点の傾向は遺構と遺物から８世紀から９世紀まで，官衙鍛冶工房の中枢をしめ，かつ工房址の周りの竪穴住居址は工人層の居住域として捉えることが可能である。東西や南北に延びる溝は工房内の職種や工程の違いを示しているのかもしれない。

11　山王Ｂ遺跡

本遺跡はNo.213として登録されており，その遺跡面積は63,000㎡の規模である。現在まで５地点調査が行なわれ，第１～３地点が報告されている。調査面積は752㎡であり，全体の1.1％である。

第１地点では住居址９軒，溝状遺構５条が検出された。住居址は９世紀前半２軒・９世紀後半３軒，10世紀前半５軒，10世紀後半１軒，溝状遺構は９世紀代１条に時期区分された。遺物は墨書土器・刻線土器や石帯丸鞆２点が出土しているが，特徴となるものは灰釉陶器転用硯59点と銅滓2,067.32ｇで，現時点で最大の出土量となり，鉄製品も多く，鋏・鋸・鑿・飾り金具等が出土している。これらを出土する遺構は９世紀後半から10世紀前半

の住居址からである。全体的な性格として鍛冶工房的要素が非常に強いと指摘されている。官衙工房には多くの工房群が存在し，その工房の対象を銅滓や鉄製品・銅製品から鍛冶工房として捉えた視点は評価できるものであるが，この時期に果たして律令による官衙機能が働いていたかは問題がある。一方，転用硯が多く出土した事をどのように解釈したらよいかである。墨を使う対象は様々あるが，本地点の場合は鋏・鋸・鑿の道具や飾り金具の出土から，木工具（家具類）を制作するときに使う墨壺的な代役に使用したものであり，木工人の作業場や居住域と考えたい。第２地点では掘立柱建物址５棟，住居址４軒が検出された。掘立柱建物址は８世紀前半１棟，９世紀後半３棟，10世紀前半１棟，住居址は８世紀前半１軒，８世紀後半１軒，９世紀前半１軒，９世紀後半１軒に時期区分された。遺物は墨書土器・刻線土器・鉄斧・砥石が出土しているが，特徴を見いだすものはない。遺構では９世紀後半の堀立柱建物址３棟・住居址２軒・井戸址１基の組合せとなる。堀立柱建物址の３棟の規模は梁行３間（6.50m）・桁行２間（4.35m），梁行３間（4.10～4.30m）・桁行２間（3.70～3.95m），梁行５間（10.5m）で桁行は攪乱により不明である。遺構・遺物から性格を追求することは難しいが，第１地点より120m西と近距離であり，しかも同時期の遺構であることからその性格を推定するならば，工房に関連する事務所的な曹司群の一角に相当するものと考えたい。第３地点（国庫補助事業分）では住居址３軒を検出し，８世紀前半１軒・８世紀後半２軒に時期区分される。遺物は墨書土器が出土しているが見るべきものはないが，鉄滓が10点ほど出土している。住居址が３軒とも８世紀代であることに注意する必要があろう。

本遺跡の全体的に傾向として，９世紀後半前後の時期は官衙工房の一角に相当するものと考えるが，８世紀の段階での性格は現時点では分からない。

12　神明久保遺跡

本遺跡はNo.215として登録されており，その遺跡面積は132,000㎡の規模である。現在まで８地点調査が行なわれ，第１～５地点が報告されている。調査面積は6,668㎡であり，全体の5.0%である。

第１地点では住居址70軒，掘立柱建物址６棟が検出された。住居址は８世紀前半１軒，８世紀後半１軒，９世紀前半13軒，９世紀後半15軒，10世紀前半16軒，10世紀後半９軒，時期不明８軒に時期区分された。遺物は墨書土器「大住」・「吉」他，刻線土器，鉸具２点，銅銙２点，古銭「延喜通宝」，銅製品「火熨斗」が出土しているが，特徴は鉄滓約77.3kgと市内最大の出土量となり，鉄製品も多く刀子・釘・紡錘車等が出土している点である。鉄滓を出土する遺構は９世紀後半から10世紀後半の住居址からであり，全体的な性格として官衙鍛冶工房的要素が非常に強いと考えるが，具体的な中身についてはよく分からない。なお，土製竈は県内で初めて出土した遺跡と注目された。第２地点では住居址35軒検出され，９世紀前半４軒，９世紀後半11軒，10世紀前半11軒，時期不明９軒に時期区分された。

遺物は墨書土器「雲」他，古銭「承和昌宝」が出土している。第３地点では住居址97軒，溝状遺構74条が検出された。住居址は７世紀後半１軒，８世紀前半８軒，８世紀後半５軒，９世紀前半９軒，９世紀後半19軒，10世紀前半９軒・時期不明46軒である。溝状遺構に関しては古代の所産と考えられる。遺物は豊富で墨書土器「雲」・「城田？」・「当六」他，鉸具１点，銅銙１点，石帯２点，銅製品水滴，瓦塔，錠前が出土しているが，最大の特徴は金属製品・鉄滓・鉄滓付着容器の量の多さである。金属製品は鉄製品477点・銅製品20点，鉄滓は1,406点・37,833ｇ，鉄滓付着容器は308点・2,594ｇ，銅滓９点・144ｇや羽口４点が出土している。９～10世紀を主体とする遺跡であるが，住居址の主軸方向や東西・南北に走る区画溝と出土遺物の内容から官衙鍛冶工房址の性格が強いものと判断され，特に銅製の錠前牡金具は本址の性格の一旦を示す資料といえる。第４地点では掘立柱建物址６棟，住居址10軒，溝状遺構20条が検出された。掘立柱建物址は９世紀後半２棟，10世紀前半２棟，不明２棟，住居址は８世紀後半１軒，９世紀後半３軒，10世紀前半４軒，10世紀後半１軒，時期不明46軒である。溝状遺構に関しては９世紀が２条で他は不明である。９世紀後半～10世紀前半が主体となる第１地点と第３地点の中間に位置していることに注目した場合，掘立柱建物址の性格は鍛冶工房址群の曹司的な機能をもったものと推定される。第５地点は掘立柱建物址２棟，溝状遺構５条が検出されたが時期は不明である。南北・東西に延びる溝状遺構３条は区画溝と推定する。

本遺跡の相対的な傾向は９世紀後半～10世紀前半を主体とするもので，第１地点や第３地点での遺物の出土内容から官衙鍛冶工房址群としての性格をもった遺跡として位置付けることが可能と考えるが，この時期に果たして官衙工房が存在したのか，それとも官衙とは別の組織をもった集団であるのか，今後の課題といえる。

13　梶谷原Ｂ遺跡

本遺跡はNo.212として登録されており，その遺跡面積は40,000㎡の規模である。現在で２地点調査が行なわれ，第１地点が報告されている。調査面積は492㎡であり，全体の1.2%である。

第１地点では住居址10軒，掘立柱建物址５棟，溝状遺構10条が検出された。住居址は８世紀前半１軒，８世紀後半５軒，９世紀前半３棟，時期不明１軒に，掘立柱建物址は８世紀前半３棟，８世紀後半２棟，溝状遺構は７条が９世紀に時期区分された。遺物は墨書土器「口天」や転用硯や須恵器獣足短頸壺が出土している。報告者は一般集落的な範疇として捉えながら，官衙盛行期の時期に相当することから，性格に関しては慎重に検討すべきであると指摘している。

本遺跡の特徴や傾向は第１地点の成果からでは氷山の一角にもならないが，８世紀の住居址や掘立柱建物址が検出されたことに意義があるものと考える。８世紀前半の時期は国府造営期にあたり，国司が郡司以下の役人，工人（技術集団）や一般農民を駆り出して国

庁や曹司群を中心に国府域の建設中の真最中である。つまり，一般集落として理解するのではなく，掘立柱建物址や住居址は建設に携わった関係者の居住域として，曹司の建設段階として捉える視点も必要であろう。

14　梶谷原Ａ遺跡

本遺跡はNo.211として登録されており，その遺跡面積は38,000㎡の規模である。現在まで３地点調査が行なわれ，第２地点が報告されている。調査面積は４㎡であり，全体の0.1％である。

竪穴住居址１軒が検出されたが，時期は不明である。

本遺跡の特徴や傾向は全く分からないが，第３地点（未報告[24]）での成果では，官衙的色彩が強いと言える。

15　構之内遺跡

本遺跡はNo.214として登録されており，その遺跡面積は112,000㎡の規模である。現在まで３地点調査が行なわれ，第１・２地点が報告されている。調査面積は4,870㎡であり，全体の4.3％である。

第１地点住居址31軒，掘立柱建物址16棟，溝状遺構20条が検出された。住居址は８世紀前半５軒，８世紀後半４軒，９世紀前半６軒，９世紀後半８軒，10世紀前半５軒，時期不明３軒に，掘立柱建物址は８世紀後半１棟，９世紀前半１棟，９世紀後半５棟，10世紀前半４棟，溝状遺構は７条が10世紀に時期区分された。８世紀前半～10世紀前半の所産のなかでも，９世紀後半～10世紀前半が主体をなす。遺物は豊富であり，墨書土器は「春」・「山」・「大」・「国？」等が出土しているが，「春」が12点と最も多く出土している。緑釉陶器は林Ｂ遺跡に次ぐ出土量で，尾張産（Ｋ－90窯式）の碗類の優品が多い。「富寿神宝」１枚，「饒益神宝」４枚と皇朝十二銭が５枚の出土は１遺跡の出土では県下最大の出土量である。また１号掘立柱建物址の柱穴の掘り方から，地鎮に用いられた「狻猊鏡」１面が出土している。鉄製品では鋤先がある。第２地点では溝状遺構が161条が検出され，76条は古代と考えられている。相対的に生産空間の場である。遺物では人面墨書土器や「富寿神宝」１枚が注目される。

本遺跡の傾向は見出しがたいが，官衙関連遺跡の一角に入るものと考える。未報告[25]ではあるが第１地点の隣の第３地点では８世紀から10世紀の住居址を主体に，銅印「平」，焼印「王」，銅銙，石帯，円面硯の出土は裏付けるものと考える。

(2)　相模国府域の全体の様相

前節で国府域内の遺跡の分析からその様相を探ったが，本節では国府域の全体の様相を検討するものである。

15遺跡の国府域の遺跡面積は1,122,000㎡と積算されるが，調査され報告された面積は27,661㎡であり，全体の2.5％に相当する。検出した遺構総数は5,854基を数え，調査面積

に対する遺構密度は約4.72㎡に1基となり，特に掘立柱建物址と竪穴住居址は26.1㎡に1基で，非常に密度の濃い状況を示している。この密度の濃いことが，本論では扱わなかった遺物内容の豊富さと絡んで，一般集落と異なる在り方と理解している。

全遺構の割合は掘立柱建物址が2.7%，竪穴住居址が15.3%，溝状遺構10.8%，土壙9.1%，ピット58.7%，井戸址1.2%，道路状遺構1.2%，他1.5%である。掘立柱建物址と竪穴住居址の合計は18%となり，土壙・ピットとしたものには掘立柱建物址の柱穴も相当数含まれていることから，全体の20%が居住施設と想定できる。これらの数値も官衙域の傾向，つまり多種多様の遺構の在り方を示しているものと考える。各遺跡の分析は表1に記したように，各遺跡間の調査面積は様々で，そのままの数値を使い分析を行なうことに危険性を伴うが，掘立柱建物址と竪穴住居址の割合は，掘立1棟に対し竪穴5～6軒になり，向原遺跡・上浜田遺跡・草山遺跡の傾向[26]とは異なるようである。この違いはその遺跡のもつ性格を反映したものであり，どのような社会的状況（社会的位置や経済力）の中に位置づけられたかが問題である。つまり地方官衙（国府・郡衙）や郷家か，またはその下に位置づけされる里長家や房戸家かによって，様々な構成内容をもつものであり，それも一律に規定できないと考える。

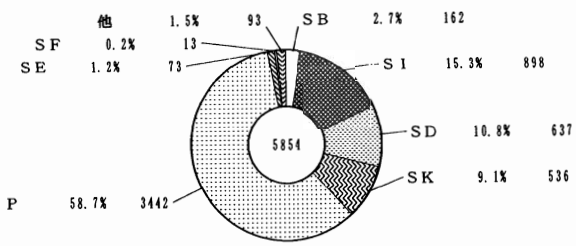


図4　全遺跡の遺構の割合

国府は大住郡の四之宮周辺に存在し，政庁（国庁）を中心に曹司群が存在したと考える。その曹司群が国庁を中心に展開したかは課題であるが，現時点では集中的ではなく，国府域に分散していたと考えている。曹司には様々な機関があるが，この機関を機能させるには，国司以下の役人の他に国内から駆り出された農民（徭丁）や手工業生産に携わった工人が存在したわけであり，当然その人々の住む家が存在したわけである。

つまり，竪穴軒数が多いことは，曹司を可動させるために人々の居住施設（竪穴）を曹司周辺に配置したと考える。その結果が掘立1棟：竪穴5～6軒であると解釈する。武蔵国府でも，同様に掘立柱建物址より竪穴住居址が多いことが指摘[27]されており注目すべきである。

表1　全体の概要

遺跡名	SB	SI	SD	SK	P	SE	SF	他	計	遺跡面積㎡	調査面積	調査率	遺跡の立地
六ノ域遺跡	50	164	28	47	721	10		27	1047	56,000	2,949	5.2	砂州・砂丘
高林寺遺跡	15	118	79	29	438	11	5	18	713	86,000	2,741	3.2	砂州・砂丘，一部自然堤防
坪ノ内遺跡	6	15	12	8	131	5		10	187	93,000	928	1.0	砂州・砂丘，一部自然堤防
稲荷前A遺跡	1	5	3		88	2			99	105,000	165	0.1	砂州・砂丘と砂丘間凹地
諏訪前A遺跡	31	171	45	110	680	27	3	17	1084	75,000	2,936	3.9	砂州・砂丘と砂丘間凹地
諏訪前B遺跡	2	27	103	8	18	8		1	167	44,000	1,885	4.3	砂州・砂丘と砂丘間凹地
諏訪前B遺跡	1	8	1	1	17	2			30	33,000	29	0.1	砂州・砂丘
七ノ域遺跡	1	5	4	3	37				50	85,000	120	0.1	砂州・砂丘と砂丘間凹地
山王A遺跡		20	19	7	44			1	91	52,000	395	0.7	砂州・砂丘と砂丘間凹地
天神前遺跡	14	95	38	19	149	6		12	333	108,000	2,727	2.5	砂州・砂丘と砂丘間凹地
山王B遺跡	5	16	5	20	130	2			178	63,000	752	1.1	砂州・砂丘と砂丘間凹地
神明久保遺跡	14	212	109	252	437	6	5	6	1041	132,000	6,668	5.0	砂州・砂丘と砂丘間凹地
梶谷原B遺跡	5	10	10	11	69				105	40,000	492	1.2	砂州・砂丘と砂丘間凹地
梶谷原A遺跡		1			4				5	38,000	4	0.1	砂州・砂丘と砂丘間凹地
構之内遺跡＊	16	31	181	21	479	4		1	733	112,000	4,870	4.3	砂州・砂丘と砂丘間凹地
	161	898	637	536	3442	73	13	93	5853	1,122,000	27,661	2.5	

＊　今回の国府域以外の遺跡で注目しなければならない遺跡としてNo.162の厚木道遺跡がある。既に8地点の調査が行なわれており，第1地点と第3地点が報告されている。第1地点は「中原上宿」の第Ⅲ・Ⅳ区に該当し，第Ⅲ区からは墨書土器「曹司」・「井」，焼印「井」や緑釉陶器が出土している。これらの資料は9世紀後半代の所産と考えられるものである。特に「曹司」の墨書土器は「四之宮下郷」の報告のなかで小島弘義氏が再評価し，本遺跡の重要性を指摘している。第3地点では9世紀後半の消失家屋に伴う一括土器が良好に検出され，基準資料になるものが発見された。8世紀第二四半期の土壙からは馬骨が一括投棄され，その固体数は約10頭と推定されている。この大量の馬骨を出土する遺跡の性格をどのように解釈するかである。詳しくは報告書に譲が一般集落を越えたものであり，官衙と絡んだ組織の存在が考えられる。

明石　新　1981『中原上宿』中原上宿遺跡調査団
小島弘義　1984『四之宮下郷』神田・大野遺跡発掘調査団
若林勝司・大野悟　1994「厚木道遺跡第3地点」『平塚市埋蔵文化財調査報告書第11集』平塚市遺跡調査会

(3) 竪穴住居から国府の成立を考える

相模国府は当初より大住郡の四之宮周辺に存在したと記してきたが，肝心要の政庁（国庁）を発見していないのが最大の弱点ではある。その弱点を補うのが本節である。

国府の成立は一般的に８世紀前半代と言われており，相模国府の成立もこの時期と考える。この根拠を立証するために竪穴住居址を使う。竪穴住居址は898軒検出されており，その時期別軒数は分析の通りである。グラフで示したように７世紀後半21軒，８世紀前半142軒，８世紀後半72軒，９世紀前半79軒，９世紀後半175軒，10世紀前半108軒，10世紀後半117軒，1不明185軒である。国府成立に関する８世紀前半の竪穴住居址は全体の中で15.7％を示しており，９世紀後半の19.4％に次ぐ件数である。９世紀前半の約2.2倍の９世紀後半の増加の理由の一つとして，元慶二年（878）の地震により家屋の倒壊による，再建による増加が考えられよう。また，この時期が律令体制の変質に伴う荘園制の発達により局地的集中が想定される。問題は８世紀前半の竪穴住居址の軒数をどのように理解するかである。結論は，前節で記した通り国司・郡司層を中心として，政庁・曹司群，その他の施設を造営するために国内から駆り出した農民層（徭丁）や各種工人の居住による結果と考えている。

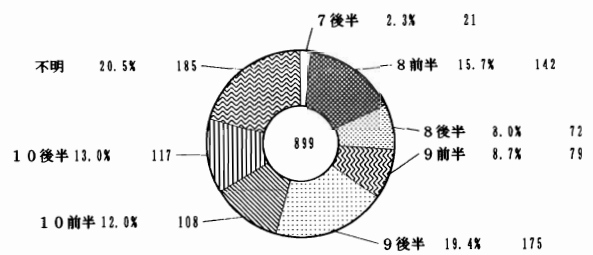


図５　竪穴住居の時期別軒数

国府域の遺跡面積の調査率は2.5％であり，８世紀前半の142軒を遺跡面積を全消化した場合の件数を想定すると約40倍が当時の竪穴軒数となり，5,680軒が算出される。仮に35倍の場合は4,970軒。30倍では4,260軒となる。竪穴住居の耐久年数を15年，20年，25年とした場合の件数は表の如くになる。この場合の最大の竪穴軒数は2,840軒，最少軒数は1,066軒となり，最大・最小を加味しても一般集落の竪穴軒数を凌駕する数値であることを示している。この数値から，国府域内の人口を推定してみたい。当時の相模国の総人口は約102,000人，一郷は1,521人と推定[28]されている。国府域はほぼ一郷の範囲に納まるものであり，この範囲の中の人口を想定することにより，鮮明に国府像が描かれる。一竪穴住居の人数を３人とした場合，最大の40倍で竪穴耐久年数25年の場合は8,520人，最小の25倍で竪穴耐久年数15年の場合は3,198人となり，一郷の人口をはるかに越える数値は国府造営期間であったことを物語るものである。

表２　耐久年数から見た竪穴住居の軒数　＊四捨五入

	5680軒（40倍）	4970軒（35倍）	4260軒（30倍）	3550軒（25倍）
15年	1705	1492	1280	1066
20年	2272	1988	1704	1420
25年	2840	2485	2130	1775

表3　掘立柱建物址・竪穴住居址の時期別軒数

遺跡名	掘立柱建物址									竪穴住居址								
	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計
六ノ域遺跡	6	14	10	9	4	0	0	7	50	8	31	7	10	35	13	47	13	164
高林寺遺跡					2		1	*12	15	4	18	9	4	18	9	39	17	118
坪ノ内遺跡		3	1	1				1	6		2		5	3	1	1	3	15
稲荷前A遺跡	1								1		3	1				1		5
諏訪前A遺跡	1	6	3	1	7	1	1	11	31	4	17	15	8	38	17	12	60	171
諏訪前B遺跡		1						1	2	1	12	3	1	3		2	5	27
稲荷前B遺跡							1		1						1		7	8
七ノ域遺跡								1	1		2						*3	5
山王A遺跡											1		5	5	8	1		20
天神前遺跡		3	1	2	3			5	14	2	39	11	10	14	9	2	8	95
山王B遺跡		1			3	1			5		2	3	1	3	5	2		16
神明久保遺跡				1	2	2		9	14	1	9	14	26	48	40	10	64	212
梶谷原B遺跡		3	2						5		1	5	3				1	10
梶谷原A遺跡																	1	1
構ノ内遺跡			1	1	5	4		5	16		5	4	6	8	5		3	31
	8	31	18	15	26	8	3	52	161	20	142	72	79	175	108	117	185	898

1）高林寺遺跡の掘立柱建物址の不明12棟は9世紀代のものである。
2）七ノ域遺跡の竪穴住居址の不明3棟は9世紀代のものである。
3）遺構を半世紀毎に区切ったのは，国府域の全体の様相を理解するためである。
4）遺構の年代観は『中原上宿』・『四之宮下郷』・『草山遺跡Ⅲ』の在地の土師器の変遷の流れを基本とし，各報告者の記載年代観を尊重した。大きな枠組みの中での須恵器は8世紀前半の湖西の箱型須恵器を，8世紀後半は前内出窯式を，9世紀前半は南多摩窯址群G－37窯式，9世紀後半は南多摩窯址群G－59窯式～G－25窯式，10世紀前半は南多摩窯址群G－5窯式をあてた。灰釉陶器は猿投窯址群黒笹90窯式を9世紀後半に，折戸53窯式を10世紀前半とした。

(4) 曹司群の推定と性格について

一般に国府は，国庁・曹司・館・厨屋・雑屋・倉・所等によって構成され，都市的景観をもち，人口が集中し，生産と消費をする所といわれている。[29] 第1節の各遺跡の傾向と特徴から，国府を構成する諸施設の推定と性格について触れてみたい。

国庁は現時点では検出されていないが，高林寺第7地点を小島弘義氏は推定した。[30] その後の第13地点の調査（未報告）[31] では区画溝や掘立柱建物址は検出されていないことから，その推定した範囲は疑問視せざるをえない。第12地点の遺跡[32]の在り方から，中世の区画溝とも考えられる一方，曹司群の一角に相当するとも考えられるが，その可能性は薄いものと考えられる。この他に推定できる遺跡は，坪ノ内遺跡の第1地点を含んだ第5地点周囲や七ノ域遺跡第1地点・第3地点や山王A遺跡第4地点の周辺が考えられるが，推定の域をでないのが現状である。国庁が基本的に場所を移動しないで存続するという立場に立てば，坪ノ内遺跡第4地点の近隣がその可能性が一番強いものと考える。[33]

曹司群は実際の国府の実務を司るものであり，その推定を行なうには遺構の構成や出土遺物から判断せざるを得ない。特に木簡や墨書土器の出土は有効材料となる一級資料であるが，現実の調査では易々と決定打となる資料は発見されていない。しかし，こうした状況の中でも，曹司群を推定できる幾つかの資料が出土しており，そこから曹司群の機能・性格について触れてみたい。

国府の一つとして「国厨家」があり，食料・食器の調達・管理や食事を供給する機関である。具体的な遺構として，掘立柱建物址・竪穴住居址・井戸址や区画溝，遺物としては多量の食器や機関を標記した墨書土器があげられる。このような条件を満たす遺跡は検出されていないが，「国厨」を出土した稲荷前A遺跡第1地点が候補として上げられる。1号住居址から出土した8世紀第3四半期の土器と9世紀第1四半期に書かれた「国厨」は一括に廃棄されたものではない。前者は床面から，後者は覆土からであり，明らかに後者は後から廃棄されたものである。第2地点の「国厨」の墨書土器も9世紀第1四半期のものであることから，この時期の竪穴住居址や掘立柱建物址が周辺に存在する可能性が非常に強いことを示していると考える。3号住居址から出土した「大住厨」・「大厨」は8世紀第2四半期のものであることは明白であり，「国厨」の墨書土器と絡んでどのように理解すべきであろうか。幾つかの解釈があると考えるが，私は8世紀第2四半期から国厨家が存在し，8世紀第2四半期の「大住厨」・「大厨」は国厨家の要請により大住郡の厨家が動員されたものと考えたい。この場合でも，この地点が国厨家のどのような機関の一つであったかは分からない。「国厨」が出土するのは国厨家ばかりでなく，国司館での饗宴も想定されるが，これらを肯定・否定する材料は今のところなく今後の調査如何によるものと考える。

国司が居住する場所である国司館は確認されていないが，林B遺跡[34]では多量の緑釉陶器

が発見されている。猿投窯の黒笹90窯式の約80個体の碗・皿類が二次焼成により釉が変質している。火災により一括廃棄されたものである。緑釉陶器のもつ性格からこのように多量に出土する地点を国司館[35]と考えられなくはない。この場合，国府域から離れた位置にあり，しかも自然堤防に立地していることに問題が残ろう。国司館は国府域内の砂丘上に求めるのが自然であると考[36]えるが，ただ国司館の分館的（出先機関）なものととらえれば理解できなくはない。何れにせよ，当時にあっては最高級の器を多量に管理できた背景には，国という大きな公権力が働いたからであり，この点を見過ごすことが出来ない。一方，多量の高級食器を維持管理する機関として国厨家が考えられ，この場合の林Ｂ遺跡は国府域外の国厨家の出先機関とも考えられる。

倉は正倉や兵庫等があり，具体的に判明したものは確認されていないが，坪ノ内遺跡第５地点では９世紀後半の大型の総柱の掘立柱建物址が検出された。桁行６間（柱間寸法2.40ｍ）・梁行４間（柱間寸法2.70ｍ）であり，現時点での最大の規模である。国府域の東端の砂丘上に立地し，眼前に相模川が流れている。小面積での調査からのその性格・機能を探ることは困難であるが，掘り方から出土した遺物や規模から曹司群の一角を占めるものであることに間違いないものと判断する。敢えて大胆に推測するならば，相模川に近接している点を重要視し，国内から集められた物資を集積した「倉」と考えたい。相模の中央部を流れる相模川が，陸上交通に匹敵する水上交通の要としての性格を担っていた[37]ことは疑いないことであり，それは近世の古文書等[38]からも窺い知ることが出来るのである。

曹司群の中で比較的その内容が明らかにされているのは，物品生産に関わる手工業部門であり，山王Ｂ遺跡第１地点，神明久保遺跡第１・３地点，天神前遺跡第６・７地点が該当する。山王Ｂ遺跡第１地点の９世紀後半から10世紀前半の時期は，灰釉陶器転用硯と銅滓の出土量と鋏・鋸・鑿・飾り金具等の鉄製品から木工（家具類）人の曹司と推定した。神明久保遺跡第１・３地点[39]は，豊富な鉄製品と鉄滓の多量の出土から，鉄製品の工房群と工人層の居住地域と判断される。主体となる時期は９世紀後半から10世紀前半である。天神前遺跡第６・７地点は神明久保遺跡の時期と異なり，８世紀～９世紀を中心とする鍛冶工房群である。７地点の鉄製の分銅は，素材や製品を計るときに用いられたものである。染色の顔料を計るのなど様々の機能をもっていただけに，一律に鍛冶工房群とするには問題が残るかもしれない。このほかに道半地第４地点では，漆壺や灰釉陶器碗を朱の転用硯に利用したものが出土している。このことに注目すると，漆関係部門の存在が考えられるが，ここではその可能性を指摘するだけに留めたい。

国府には紡織部門や製紙部門の存在が文書[40]や遺跡から明らかにされている。一方，非生産部門としての「各種の文書作成，租税の徴収・管理・貢進，曹司の運営・維持に関する諸物資・経費の調達やその出納事務などにあっていた曹司も設けられていた[41]」ことを考古学的に立証していくには地道な調査を繰り返すことによって明らかにされよう。

おわりに

相模大住国府所在地を巡る長年の論争も，稲荷前A遺跡の「国厨」の出土から『和名類聚抄』に記載された大住国府を四之宮とする説で終止符を打てたものと考える。今回の論点は，初期国府の大住郡四之宮説を検証するために，国府域の15遺跡・70地点の報告書の掘立柱建物址・竪穴住居址を中心として分析を行なった。その結果，初期国府四之宮説を裏付けるに足る遺構の検出状況にあった。しかも，8世紀前半の竪穴住居址の発掘件数は，相模国内の大規模集落といわれた上浜田遺跡・宮久保遺跡・本郷遺跡・草山遺跡・向原遺跡を遥かに凌駕する数値であり，単なる集落としての理解を越えるものがある。まさに相模の国の総力を挙げての国府造営期間としてとらえることのほうが正鵠を射ていると考える。

相模国府研究は新たな局面を迎えたわけであるが，一方で様々な問題を抱えていることも事実である。特に国分寺との関係をどのように理解するかであるが，これといった私見は持合わせていない。消極的ではあるが，いずれ国府推定地とされた地域や国分寺周辺域での調査で明らかにされるものと考えている。時間が問題を解決してくれよう。

今回の発表は，今までに小島弘義氏が調査・整理し，指摘・展開してきたことを分析したまでである。本論の殆どが小島氏の業績であり，また平塚市遺跡調査会長の日野一郎氏のご尽力による賜であることを付記しておく。

最後に日頃ご指導いただいている山中敏史氏，平川南氏，河野喜映氏，大上周三氏，国平健三氏，田尾誠敏氏を始め多くの学友と平塚市教育委員会の諸氏に感謝申し上げます。また，このような発表の機会を与えてくださった神奈川考古学会関係者にも厚くお礼申し上げます。

平成6年11月23日脱稿

〔追記〕

平成6年10月16日に国史学会・神奈川地域史研究会・多摩古代史研究会主催による『古代東国の国府と景観－相模・武蔵を中心にして－』のパネラーの一人として「発掘から見た相模国府」と題し，国府域の想定と初期国府を大住四之宮と発表したが，その土台となったのが今回の国府域の分析である。討論会の席上一部データを口頭発表したことを付記しておく。

また，初期国府を当初より大住郡四之宮との見解は既に，以下の場で発表した。

1993：『考古資料から見た西相模－近年の調査事例から相模国府を考える－』
講演会資料　大磯町郷土資料館

1994：「相模国府と郡衙」『図説・平塚の歴史』上巻　郷土出版社

〔註記〕

（1）　上浜田編年，中原編年，四之宮下郷編年，向原編年，宮久保編年，草山編年等がある。

（2）　平塚市で出土する須恵器は，南武蔵古窯跡群と北武蔵古窯跡群が主な製品である。

服部敬史・福田健司：1979 「南多摩窯址出土の須恵器とその編年」『神奈川考古』第6号，神奈川考古同人会。　服部敬史：1980 『八王子市南部地区の遺跡』八王子市南部地区遺跡調査会。　酒井清治他：1987 『埼玉の古代窯業調査報告書』埼玉県立歴史資料館。　渡辺一：1990 『鳩山窯跡群Ⅱ』鳩山窯跡遺跡調査会。

（3）　灰釉陶器・緑釉陶器の製品は，愛知・岐阜産，静岡産，志賀産，京都産があり，生産地単位での編年が行なわれており，生産地と消費地間とを見通した編年は数少ない。

楢崎彰一他：1980 『猿投山西南麓古窯跡分布調査報告書(1)』愛知県教育委員会。　斉藤孝正：1981 「尾北窯における灰釉陶器の変遷」『桃花台ニュータウン遺跡調査報告Ⅲ』小牧市教育委員会。　高橋照彦：1994 「近江産緑釉陶器をめぐる諸問題」『国立歴史民族博物館研究報告』第57集

（4）　飛鳥京・平城京・平安京編年がある。近年，古代の土器研究会により7世紀から14世紀までの土器編年大網が確立されつつある。

古代の土器研究会：1992・1993・1994 「都城の土器集成－古代の土器－1・2・3－」

（5）　相模国府研究者の多くが初期国府を海老名市の国分寺と絡めて周辺を想定しているが，国府に関わった遺跡（遺構・遺物）は発見されていない。

（6）　この見解は下曽我遺跡の成果から導いたものであるが，これも今だに考古学的に国府を裏付ける遺跡の発見はない。

木下　良：1974 「相模国府の所在について」『人文研究』No.59，神奈川大学人文学会

（7）　国平氏は瓦の分析から海老名市国分寺を「国分寺の詔以後創建されたものである」とした深い洞察には敬服するが，考古学的成果のないものを国府と結びつけるのは問題である。

国平健三：1990・1991 「初期相模国府の所在地について－造瓦技法の比較と分布から見た場合－」『えびなの歴史』創刊号・第2号

（8）　千代廃寺から出土した瓦の分析から，足下郡衙の郡寺と判断した。

国平健三：前掲註（7）

（9）　新井秀樹：1994 「相模国足柄評の分割をめぐって」『市史研究あしがら』5号

（10）　明石　新：1993 「稲荷前A遺跡第1地点」『平塚市埋蔵文化財シリーズ23』平塚市遺跡調査会

（11）　前掲註(10)の報告書のなかで山中敏史氏のコメントを記したように，「国厨」を直接「国厨家」を示したものとは考えていないが，今までの調査成果から大住国府所在地を四之宮周辺に所在することは問題ないものと考える。

平川　南：1993 「厨墨書土器論」『山梨県史研究』創刊号，山梨県教育庁学術文化課。　松尾昌彦：1994 「厨銘墨書土器考－松戸市坂花遺跡出土例をめぐって」『松戸市立博物館紀要』第1号，松戸市博物館。

（12）　「国厨」の墨書土器の土師器の年代観は次の文献による。

明石　新：1981 『中原上宿』中原上宿遺跡調査団。　小島弘義：1984 『四之宮下郷』神田・大野遺跡発掘調査団。　長谷川　厚：1990 「草山遺跡Ⅲ」『神奈川県埋蔵文化財センター調査報告18』神奈川県埋蔵文化財センター。

(13)　「国厨」の墨書土器の須恵器の年代観は次の文献による。
　後藤健一：1991 「須恵器の編年－東海－」『古墳時代の研究－６土師器と須恵器－』雄山閣。　渡辺　一：1990 『鳩山古窯跡群Ⅱ』鳩山町教育委員会。　高橋一夫他：1974 『前内出窯址発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第24集。
(14)　東海大学の田尾氏の実見により，甲斐型ではなく，甲斐型を模倣した在地の製品であるとのコメントを頂いた。
(15)　甲斐型の土器年代観は以下の文献による。
　田尾　敏：1992 「相模地方の甲斐型土器覚書」『山梨県考古学協会誌』第５号。　山梨県考古学会：1992 『甲斐型土器－その編年と年代－』甲斐型土器研究グループ第１回研究集会資料。
(16)　国平健三：前掲註（7）
(17)　木下　良：前掲註（6）
(18)　山中敏史：1994 『古代地方官衙の研究』塙書房
(19)　溝状遺構の主眼に区画溝という性格があると考えていたからであるが，分析の段階から時期不明のものが多く，また記載内容も不十分なために，意図したものが得られなかった。
(20)　平塚市教育委員会に提出した調査概報による。
(21)　平塚市教育委員会に提出した調査概報による。
(22)　『四之宮下郷』に掲載。
(23)　本地点の調査成果の一部を発表している。
　上原正人：1993 「山王Ａ遺跡第４地点」『第17回神奈川県遺跡調査・研究発表会－発表要旨－』神奈川県考古学会
(24)　平塚市教育委員会に提出した調査概報による。
(25)　調査成果の一部は報道発表（平成６年10月27日記者会見）した。
(26)　伊丹　徹：1986 「奈良・平安時代相模国の集落遺跡における大型住居址と掘立柱建物－鳶尾・向原・上浜田遺跡の成果から－」『神奈川考古』第22号，神奈川考古同人会。　大上周三：1991 「古代集落の建物群類型について」『神奈川考古』第27号，神奈川考古同人会。
(27)　荒井健治：1994 「武蔵国府の集落様相について」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
(28)　竹内理三：1981 「相模・武蔵の国勢－水田と人口－」『神奈川県史－通史編Ⅰ（原始・古代・中世）－』神奈川県県民部県史編集室
(29)　山中敏史：前掲註（18）
(30)　小島弘義は第７地点と第９地点の調査成果から，国庁の区画溝と考え伯耆国庁と同規模のものと推定した。区画溝は東西の長さ44ｍ，南北52ｍまで確認している。
(31)　平塚市教育委員会に提出した調査概報によると，区画溝は延びておらず，竪穴住居址が主体である。
(32)　12地点の調査成果では古代の竪穴住居址を主体とするが，中世の溝状遺構や配石遺構が検出されている。
　明石　新：1992「高林寺遺跡第12地点」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書５』
(33)　坪ノ内遺跡の調査は第４地点以外は近距離で，しかも遺跡の東側に集中している。そのために全体像が不明だけに西側部分の調査事例が期待される所である。
(34)　現時点での市内最高出土例であり，全国的に見ても極めて珍しい出土例である。
　斉藤孝正：1993 「神奈川県下の灰釉陶器・緑釉陶器－平塚市の出土例を中心にして－」

『三浦古文化』第53号，三浦古文化研究会

(35)　田中広明：1994 「南関東地方の古代官衙の終末」『古代終末をめぐる諸問題』第３回東日本埋蔵文化財研究会

(36)　国府の立地条件を考えれば，自然堤防は常に洪水の危険性があり，安定を望む居住条件には適さないと考えるのが妥当である。

(37)　津は国府と切っても切れない関係にある。水上交通は「物資」を大量に運搬輸送することができ，しかも人の労力が陸上交通ほどかからない点が最大の利点である。日数と労力の問題からすれば最大の効率を発揮する。問題は安全・確実に物資を運搬輸送出来るかである。また，国府が大量の生産・消費の場であればあるほど大きな河川が選ばれ，しかも自然現象の影響のない場所である内陸部を選定したことは間違いないであろう。

(38)　土井　浩：1990 「船運の発展－相模川と船－」『平塚市史９－通史編（古代・中世・近世）－』平塚市

(39)　第３地点では多くの鉄・銅製品が出土した。この中で一際注目すべくは銅製の錠前牡金具である。錠前を研究している合田芳正氏の目に触れることによって，この製品が極めて学術的に重要な位置を占めることが明らかになり，遺跡の再評価がなされ，官衙鍛冶工房しての性格付けがなされた。

　合田芳正：1991 「平塚市神明久保遺跡出土の錠前について」『平塚市文化財調査報告書』第26集，　平塚市教育委員会

(40)　山中敏史：前掲註（18）

(41)　山中敏史：前掲註（18）

遺跡の概要（1）

遺跡名	調査年	調査面積	検出した遺構									出土した遺物									文献
六ノ域遺跡		56000㎡	SB	SI	SD	SK	P	SE	SF	他	計	墨書	線刻	銙帯	石帯	緑釉	灰釉	金属	瓦	硯等	
第1地点	昭和54～55年	158		20	3	18	4			7	52	*	*			*	*	*	*	*	1
第2地点	昭和56	19		5		7	1				13					*	*	*			2
第3地点	昭和59～60年	900	23	16	16	5	417	3		13	493	*	*		1	*	*	*	*	*	3
第4地点	昭和60～61年	1332	18	95	5	6	173	4		7	308	*	*		7	*	*	*	*	*	4
第5地点	昭和60	87	3	2	1	2					8	*	*			*	*			*	5
第6地点	昭和62	124	2	3			12	2			19						*	*			6
第7地点	昭和63	18		1	1	2	7				11							*	*	*	7
第8地点	昭和63	176	2	8	1	2	49	1			63	*	*				*	*	*	*	8
第9地点	平成2	135	2	14	1	5	58				80	*				*	*	*	*	*	9
	(5.2 パーセント)	2949	50	164	28	47	721	10		27	1047										

高林寺遺跡	調査年	86000㎡	SB	SI	SD	SK	P	SE	SF	他	計	墨書	線刻	銙帯	石帯	緑釉	灰釉	金属	瓦	硯等	文献
第1地点	昭和54・55年	384	7	28	2	3	8	2		1	51	*	*	2	2	*	*	*	*	*	10・11
第2地点（未報告）	昭和52年													鈴具1		*	*	*			12
第3地点	昭和56・57年	296	1	17	29	2	40	1	2	4	96	*	*	3		*	*	*	*	*	13
第4地点	昭和58年	264	5	23	3				1		32	*				*	*	*	*	*	14
第5地点	昭和58年	325			8		74	2			84	*	*		1	*	*	*	*		15
第6地点	昭和60年	110		6	5		9			6	26			鈴具1			*	*		*	16
第7地点	昭和61年	675		15	8	3	218			1	245	*		鈴具1		*	*	*	*	*	17
第8地点	昭和61年	255		2	13	2	45	5			67					*	*	*	*	*	18
第9地点	昭和62年	138	2	10	2		33		1		48	*		1		*	*	*	*	*	19
第10地点	昭和63年	127		5	3	3		1		1	13	*				*	*	*		*	20

遺跡の概要（2）

遺跡名	調査年	調査面積	検出した遺構									出土した遺物									文献
高林寺遺跡		86000㎡	SB	SI	SD	SK	P	SE	SF	他	計	墨書	線刻	銙帯	石帯	緑釉	灰釉	金属	瓦	硯等	
第11地点（未報告）	平成2年	77			1	16					17										21
第12地点（一部報告）	平成3年	90		12	5		11		1	5	34	*	*			*	*	*	*	*	22・23
	（3.2パーセント）	2741	15	118	79	29	438	11	5	18	713										

坪ノ内遺跡	調査年	93000㎡	SB	SI	SD	SK	P	SE	SF	他	計	墨書	線刻	銙帯	石帯	緑釉	灰釉	金属	瓦	硯等	文献
第1地点	昭和52年	60		2		1				1	4						*		*		24
第2地点	昭和62年	205	3	7							10	*	*				*	*	*		25
第3地点	昭和63年	310			7	5	7			6	25							*			26
第4地点	昭和63年	353	3	6	5	2	124	5		3	148						*	*	*	*	27
	（1.0パーセント）	928	6	15	12	8	131	5		10	187										

稲荷前A遺跡	調査年	105000㎡	SB	SI	SD	SK	P	SE	SF	他	計	墨書	線刻	銙帯	石帯	緑釉	灰釉	金属	瓦	硯等	文献
第1地点	平成元年	165	1	5	3		88	2			99	*				*	*	*	*		28
	（0.1パーセント）		1	5	3		88	2			99										

諏訪前A遺跡	調査年	75000㎡	SB	SI	SD	SK	P	SE	SF	他	計	墨書	線刻	銙帯	石帯	緑釉	灰釉	金属	瓦	硯等	文献
第1地点（下郷3・4	昭和54・55年	1038	9	65	19	98	88	21	3	9	312	*	*	3	2	*	*	*	*	*	29
第2地点（未報告）	昭和59年	100		13	2	1					16										30
第3地点	昭和60年	244	8	12	2	2	45				69	*	*			*	*	*	*	*	31
第4地点	昭和61年	450		18	3		163				184	*	*	3		*	*	*		*	32
第5地点	昭和61年	467	3	24	5	9	217	6		5	269	*				*	*	*	*	*	33
第6地点	昭和62年	156	2	23			70			1	96		*	1		*	*			*	34

遺跡の概要（3）

遺跡名	調査年	調査面積	検出した遺構									出土した遺物									文献
諏訪前A遺跡		75000㎡	SB	SI	SD	SK	P	SE	SF	他	計	墨書	線刻	銙帯	石帯	緑釉	灰釉	金属	瓦	硯等	
第7地点	昭和62年	9		3							3								*		35
第8地点	平成元年	156	2	6	5		17				30						*	*			36
第9地点	平成2年	275	7	5	8		68				88	*				*		*	*		37・38
第10地点	平成2年	40		2	1		12			2	17	*				*	*	*	*	*	39
	(3.9パーセント)	2936	31	171	45	110	680	27	3	17	1084										

諏訪前B遺跡	調査年	44000㎡	SB	SI	SD	SK	P	SE	SF	他	計	墨書	線刻	銙帯	石帯	緑釉	灰釉	金属	瓦	硯等	文献
第1地点	昭和56年	465	1		23	3	4	1			32					*	*	*	*		40
第2地点	昭和60年	435			51	1		3			55	*					*	*	*		41
第3地点	昭和61年	600		26	2	2		1			31		*				*	*	*	*	42
第4地点	昭和62年	194	1	1	4	2	11	1			20	*					*		*	*	43
第5地点	平成元年	191			23		3	2		1	29						*	*	*	*	44
	(4.3パーセント)	1885	2	27	103	8	18	8		1	167										

稲荷前B遺跡	調査年	33000㎡	SB	SI	SD	SK	P	SE	SF	他	計	墨書	線刻	銙帯	石帯	緑釉	灰釉	金属	瓦	硯等	文献
第1地点	昭和56年	17	1		1	1	3				6										45
第2地点	昭和60年	12		8			14	2			24					*	*				46
	(0.1パーセント)	29	1	8	1	1	17	2			30										

七ノ域遺跡	調査年	85000㎡	SB	SI	SD	SK	P	SE	SF	他	計	墨書	線刻	銙帯	石帯	緑釉	灰釉	金属	瓦	硯等	文献
第1地点	平成3年	120	1	5	4	3	37				50	*				*	*	*	*	*	47
	(0.1パーセント)	120	1	5	4	3	37				50										

遺跡の概要（4）

遺跡名	調査年	調査面積	検出した遺構									出土した遺物									文献
山王Ａ遺跡		52000㎡	SB	SI	SD	SK	P	SE	SF	他	計	墨書	線刻	銙帯	石帯	緑釉	灰釉	金属	瓦	硯等	
第２地点	平成元年	152		11	11		27				49	*	*			*	*	*	*	*	48
第３地点	平成２年	243		9	8	7	17			1	42	*					*	*	*	*	49・50
	(0.7 パーセント)	395		20	19	7	44			1	91										

天神前遺跡	調査年	108000㎡	SB	SI	SD	SK	P	SE	SF	他	計	墨書	線刻	銙帯	石帯	緑釉	灰釉	金属	瓦	硯等	文献
第１地点	昭和60年	605	3	12	8			1		5	29	*	*				*	*	*		51
第２地点	昭和61年	51		2	1	1	14			2	20							*			52
第３地点	昭和62年	370	1	13	2	3				3	22	*	*				*	*			53・54
第４地点	昭和62年	13		1	1	3	3				8					*					55
第５地点	平成２年	40	1	7	1		4				13	*					*	*			56
第６地点	昭和63年	588	1	16	6	3	5	3		1	35	*	*				*	*	*		57
第７地点	平成元年	1060	8	44	19	9	123	2		1	206	*	*				*	*	*		58
	(2.5 パーセント)	2727	14	95	38	19	149	6		12	333										

山王Ｂ遺跡	調査年	63000㎡	SB	SI	SD	SK	P	SE	SF	他	計	墨書	線刻	銙帯	石帯	緑釉	灰釉	金属	瓦	硯等	文献
第１地点	昭和60年	260		9	5	20	28	1			63	*	*		2	*	*	*		*	59
第２地点	昭和63年	438	5	4			71	1			81	*	*				*	*	*	*	60
第３地点	平成２年	54		3			31				34	*								*	61
	(1.1 パーセント)	752	5	16	5	20	130	2			178										

神明久保遺跡	調査年	132000㎡	SB	SI	SD	SK	P	SE	SF	他	計	墨書	線刻	銙帯	石帯	緑釉	灰釉	金属	瓦	硯等	文献
第１地点	昭和52年	2590	6	70	6	43	76	4		4	209	*	*	1		*	*	*	*	*	62

遺跡の概要（5）

遺跡名	調査年	調査面積	検出した遺構									出土した遺物									文献
神明久保遺跡		132000㎡	SB	SI	SD	SK	P	SE	SF	他	計	墨書	線刻	銙帯	石帯	緑釉	灰釉	金属	瓦	硯等	
第2地点	昭和63年	580		35	4		19				58	*					*		*		63
第3地点	昭和63年	2500		97	74	199	77	1	5	1	454	*		1	2	*	*	*	*		64
第4地点	昭和63年	890	6	10	20	10	258				304					*	*	*	*	*	65
第5地点	昭和63年	108	2		5		7	1		1	16						*		*	*	66
	(5.0パーセント)	6668	14	212	109	252	437	6	5	6	1041										

梶谷原B遺跡	調査年	108000㎡	SB	SI	SD	SK	P	SE	SF	他	計	墨書	線刻	銙帯	石帯	緑釉	灰釉	金属	瓦	硯等	文献
第1地点	昭和61年	492	5	10	10	11	69				105	*	*					*		*	67
	(1.2パーセント)	492	5	10	10	11	69				105										

梶谷原A遺跡	調査年	38000㎡	SB	SI	SD	SK	P	SE	SF	他	計	墨書	線刻	銙帯	石帯	緑釉	灰釉	金属	瓦	硯等	文献
第2地点	昭和62年	4		1			4				5										68
	(0.1パーセント)	4		1			4				5										

構之内遺跡	調査年	112000㎡	SB	SI	SD	SK	P	SE	SF	他	計	墨書	線刻	銙帯	石帯	緑釉	灰釉	金属	瓦	硯等	文献
第1地点	平成2年	2400	16	31	20	10	233	3		1	314	*	*			*	*	*			69
第2地点	平成2年	2470			161	11	246	1			419	*				*	*	*	*		70
	(4.3パーセント)	4870	16	31	181	21	479	4		1	733										

1）遺跡の概要は報告書からおこしたものであり，未報告・未発表は基本的に除外した。
2）遺構の他はSB・SI・SD・SK・P・SE・SF以外の遺構をまとめた数である。
3）遺物の＊印は出土したか，しないかを＊印で表したものであるが，銙帯・石帯の数字は出土点数である。
4）金属は鉄製品と銅製品をまとめたものである。
5）硯等は硯と転用硯（須恵器・灰釉陶器）をまとめたものである。

掘立柱建物址・住居址・溝状遺構の時期別件数（1）

遺跡名	掘立柱建物址									竪穴住居址									溝状遺構					
六ノ域遺跡	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8C	9C	10C	不明	合計
第1地点										3		3	6	7		1		20			1		2	3
第2地点										1			1	2			1	5						
第3地点	4	8	3	5	3				23	2	1			1	2	8	2	16					16	16
第4地点	2	5	6	4				1	18	1	24		1	19	18	36	6	95	1				4	5
第5地点		1	1		1				3		1			1				2					1	1
第6地点								2	2		3							3						
第7地点									0					1				1		1				1
第8地点								2	2	1	1	2		1	2	1		8		1				1
第9地点								2	2		1	2	2	3	1	1	4	14					1	1
	6	14	10	9	4	0	0	7	50	8	31	7	10	35	13	47	13	164	1	2	1	0	24	28

高林寺遺跡	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8C	9C	10C	不明	合計
第1地点				7					7		5	5	1	3	4	6	4	28			1		1	2
第2地点																								
第3地点							1		1		2			4	2	8	1	17	2	10	13		4	29
第4地点				5					5	3	3	3	2	3	1	6	2	23		1	1	1		3
第5地点																					5		3	8
第6地点											1			1		1	3	6			2		3	5
第7地点										1	5	1		1	1	6		15					8	8
第8地点														1		1		2		3	3	2	5	13
第9地点					2				2		1			2		7		10					1	1
第10地点											1			1		2	1	5			3			3

掘立柱建物址・住居址・溝状遺構の時期別件数（2）

遺跡名	掘立柱建物址									竪穴住居址									溝状遺構					
高林寺遺跡	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8C	9C	10C	不明	合計
第11地点																							1	1
第12地点													1	2	1	2	6	12			3		2	5
				14（2）			1		15	4	18	9	4	18	9	39	17	118	2	14	32	3	28	79

坪ノ内遺跡	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8C	9C	10C	不明	合計
第1地点																1	1	2						
第2地点		3							3		1		2	1	1		2	7						
第3地点																							7	7
第4地点			1	1				1	3		1		3	2				6			2		3	5
		3	1	1				1	6		2		5	3	1	1	3	15			2		10	12

稲荷前A遺跡	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8C	9C	10C	不明	合計
第1地点	1								1		3	1				1		5		3				3
	1								1		3	1				1		5		3				3

諏訪前A遺跡	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8C	9C	10C	不明	合計
第1地点		2	1		4			2	9	1	6	8	6	14	9		21	65			4		15	19
第2地点																	13	13					2	2
第3地点		1	1			1	1	4	8			2		5	1	1	3	12					2	2
第4地点										1	2	4	1	5		2	3	18					3	3
第5地点				1	2				3	2	4			9	2	2	5	24	3		1		1	5
第6地点								2	2		1			2	3	5	12	23						

掘立柱建物址・住居址・溝状遺構の時期別件数（3）

遺跡名	掘立柱建物址									竪穴住居址									溝状遺構					
諏訪前A遺跡	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8C	9C	10C	不明	合計
第7地点														1			2	3						
第8地点		2							2		4				1	1		6	2	1		1	1	5
第9地点	1	1	1		1			3	7				1	2	1	1		5				2	6	8
第10地点												1					1	2					1	1
	1	6	3	1	7	1	1	11	31	4	17	15	8	38	17	12	60	171	5	1	5	3	31	45

諏訪前B遺跡	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8C	9C	10C	不明	合計
第1地点								1	1													23		23
第2地点																							51	51
第3地点										1	12	3	1	3		1	5	26						
第4地点		1							1							1		1		2		2		4
第5地点																				5		18		23
		1						1	2	1	12	3	1	3		2	5	27		7		43	51	101

稲荷前B遺跡	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8C	9C	10C	不明	合計
第1地点							1		1														1	1
第2地点															1		7	8						
							1		1						1		7	8					1	1

七ノ域遺跡	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8C	9C	10C	不明	合計
第1地点								1	1		2		3					5			2		2	4
								1	1		2		3					5			2		2	4

掘立柱建物址・住居址・溝状遺構の時期別件数（4）

遺跡名	掘立柱建物址									竪穴住居址									溝状遺構					
山王Ａ遺跡	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8C	9C	10C	不明	合計
第2地点													2	3	5	1		11				4	7	11
第3地点											1		3	2	3			9		1	1	1	5	8
											1		5	5	8	1		20		1	1	5	12	19

天神前遺跡	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8C	9C	10C	不明	合計
第1地点		1						2	3	1	9					1	1	12		4			4	8
第2地点														1			1	2					1	1
第3地点								1	1	1	7			2	3			13					2	2
第4地点																	1	1					1	1
第5地点								1	1		2			1	2		2	7					1	1
第6地点		1							1		7	5	2		1		1	16	1	2	1		2	6
第7地点		1	1	2	3			1	8		14	6	8	10	3	1	2	44	1	1	5		12	19
		3	1	2	3			5	14	2	39	11	10	14	9	2	8	95	2	7	6		23	38

山王Ｂ遺跡	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8C	9C	10C	不明	合計
第1地点														2	5	2		9			1		4	5
第2地点		1			3	1			5		1	1	1	1				4						
第3地点											1	2						3						
		1			3	1			5		2	3	1	3	5	2		16			1		4	5

神明久保遺跡	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8C	9C	10C	不明	合計
第1地点				1				5	6		1	1	13	15	16	9	8	70			1		5	6

掘立柱建物址・住居址・溝状遺構の時期別件数（5）

遺跡名	掘立柱建物址									竪穴住居址									溝状遺構					
神明久保遺跡	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8C	9C	10C	不明	合計
第2地点													4	11	11		9	35					4	4
第3地点										1	8	5	9	19	9		46	97					74	74
第4地点					2	2		2	6			1		3	4	1	1	10			2		18	20
第5地点								2	2														5	5
				1	2	2		9	14	1	9	14	26	48	40	10	64	212						109

梶谷原B遺跡	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8C	9C	10C	不明	合計
第1地点		3	2						5		1	5	3				1	10		7			3	10
		3	2						5		1	5	3				1	10		7			3	10

梶谷原A遺跡	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8C	9C	10C	不明	合計
第2地点																	1	1						
																	1	1						

構ノ内遺跡	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8前	8後	9前	9後	10前	10後	不明	合計	7後	8C	9C	10C	不明	合計
第1地点			1	1	5	4		5	16		5	4	6	8	5		3	31				9	11	20
第2地点																							161	161
			1	1	5	4		5	16		5	4	6	8	5		3	31				9	172	181

1）竪穴住居址での10世紀後半には11世紀代のものを含んでいる。
2）溝状遺構の不明には時期不明のほかに，古代（7世紀後半～11世紀）に属するものを含んでいる。

〔分析した報告書一覧〕

1　小島弘義　1984 『四之宮下郷』神田・大野遺跡発掘調査団
2　小島弘義　1982 「六ノ域遺跡」『諏訪前Ｂ・六ノ域』諏訪前Ｂ・六ノ域遺跡発掘調査団
3　小島弘義　1986 「真土六の域遺跡」『平塚市埋蔵文化財シリーズ１』大野小学校遺跡発掘調査団
4　小島弘義　1987 「真土六の域遺跡Ⅱ」『平塚市埋蔵文化財シリーズ３』大野小学校遺跡発掘調査団
5　小島弘義　1988 「六の域遺跡（第５地区）」『平塚市埋蔵文化財シリーズ６』平塚市遺跡調査会
6　細野高伯　1988 「六の域遺跡」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書１』平塚市教育委員会
7　青地俊朗　1990 「六の域遺跡第７地区」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書３』平塚市教育委員会
8　上原正人　1992 「六ノ域遺跡第８地区」『平塚市埋蔵文化財シリーズ21』平塚市遺跡調査会
9　青地俊朗　1992 「真土六ノ域遺跡Ⅲ」『平塚市埋蔵文化財シリーズ20』平塚市遺跡調査会
10　小島弘義　1984 『四之宮下郷』神田・大野遺跡発掘調査団
11　杉山博久　1980 『諏訪前調査報告』平塚市神田大野遺跡発掘調査団
12　平塚市教育委員会　1985 『平塚市文化財調査報告書』第20集
13　小島弘義　1985 「四之宮高林寺Ⅱ」『平塚市埋蔵文化財調査報告書第２集』平塚市教育委員会
14　小島弘義　1986 「高林寺遺跡第４地区」『平塚市埋蔵文化財シリーズ２』高林寺遺跡発掘調査団
15　小島弘義　1986「高林寺遺跡第５地区」『平塚市埋蔵文化財シリーズ２』高林寺遺跡発掘調査団
16　小島弘義　1988 「四之宮高林寺遺跡第６地区」『平塚市埋蔵文化財シリーズ６』平塚市遺跡調査会
17　小島弘義　1988 「四之宮高林寺遺跡第７地区」『平塚市埋蔵文化財シリーズ６』平塚市遺跡調査会
18　小島弘義　1990 「四之宮高林寺遺跡第８地区」『平塚市埋蔵文化財シリーズ16』平塚市遺跡調査会
19　小島弘義　1990 「四之宮高林寺遺跡第９地区」『平塚市埋蔵文化財シリーズ16』平塚市遺跡調査会
20　小島弘義　1989 「高林寺遺跡」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書２』平塚市教育委員会
21　平塚市教育委員会　1988『平塚市文化財調査報告書』第23集
22　明石　新　1992 「高林寺遺跡第12地点」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書５』平塚市教育委員会
23　平塚市教育委員会　1992「平塚市文化財調査報告書」第27集
24　明石　新　1978 「坪ノ内遺跡」『平塚市博物館資料No.12』平塚市博物館
25　小島弘義　1989 「坪ノ内遺跡」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書２』平塚市教育委員会
26　小島弘義　1989 「坪ノ内遺跡第３地区」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書２』平塚市教育委員会

27　小島弘義　1990　「坪ノ内遺跡第４地区」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書３』平塚市教育委員会
28　明石　新　1993　「稲荷前Ａ遺跡第１地点」『平塚市埋蔵文化財シリーズ23』平塚市遺跡調査会
29　小島弘義　1984　『四之宮下郷』神田・大野遺跡発掘調査団
30　平塚市教育委員会　1986　『平塚市文化財調査報告書』第21集
31　小島弘義　1987　「四之宮諏訪前Ａ」『平塚市埋蔵文化財調査報告書第４集』平塚市教育委員会
32　小島弘義　1987　「諏訪前Ａ遺跡第２地区」『平塚市埋蔵文化財調査報告書第６集』平塚市教育委員会
33　小島弘義　1990　「諏訪前Ａ遺跡第３地区」『平塚市埋蔵文化財シリーズ16』平塚市遺跡調査会
34　小島弘義　1989　「諏訪前Ａ遺跡」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書２』平塚市教育委員会
35　明石　新　1991　「諏訪前Ａ遺跡第７地区」『平塚市埋蔵文化財シリーズ18』平塚市遺跡調査会
36　明石　新　1994　「諏訪前Ａ遺跡第８地区」『平塚市埋蔵文化財シリーズ26』平塚市遺跡調査会
37　明石　新　1994　「諏訪前Ａ遺跡第９地区」『平塚市埋蔵文化財シリーズ26』平塚市遺跡調査会
38　若林勝司　1991　「諏訪前Ａ遺跡第９地区」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書４』平塚市教育委員会
39　大野　悟　1992　「諏訪前Ａ遺跡第10地区」『平塚市埋蔵文化財シリーズ22』平塚市遺跡調査会
40　小島弘義　1982　「諏訪前Ｂ遺跡」『諏訪前Ｂ・六ノ域』諏訪前Ｂ・六ノ域遺跡発掘調査団
41　小島弘義　1988　「四之宮諏訪前Ｂ」『平塚市埋蔵文化財シリーズ６』平塚市遺跡調査会
42　小島弘義　1989　「四之宮諏訪前Ｂ第３地区」『平塚市埋蔵文化財シリーズ13』平塚市遺跡調査会
43　小島弘義　1989　「四之宮諏訪前Ｂ」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書２』平塚市教育委員会
44　大野　悟　1993　「諏訪前Ｂ遺跡第６地区」『平塚市埋蔵文化財シリーズ23』平塚市遺跡調査会
45　小島弘義　1989　『稲荷前Ｂ」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書２』平塚市教育委員会
46　大野　悟　1993　「稲荷前Ｂ遺跡第２地区」『平塚市埋蔵文化財シリーズ22』平塚市遺跡調査会
47　若林勝司　1992　『山王Ａ・山王Ｂ遺跡隣接地」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書５』平塚市教育委員会
48　上原正人　1993　「山王Ａ遺跡第２地点」『平塚市埋蔵文化財調査報告書第10集』平塚市教育委員会
49　明石　新　1993　「山王Ａ遺跡第３地点」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書４』平塚市教育委員会
50　上原正人　1993　「山王Ａ遺跡第３地点」『平塚市埋蔵文化財調査報告書第10集』平塚市教育

委員会
51　小島弘義・青地俊朗　1989　「四之宮天神前遺跡」『平塚市埋蔵文化財調査報告書第５集』平塚市教育委員会
52　大野　悟　1992　「天神前遺跡第２地点」『平塚市埋蔵文化財シリーズ21』平塚市遺跡調査会
53　小島弘義　1989　「天神前遺跡第２地点」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書１』平塚市教育委員会
54　小島弘義　1990　「天神前遺跡第３地点」『平塚市埋蔵文化財シリーズ16』平塚市遺跡調査会
55　細野高伯　1988　「天神前遺跡第４地点」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書１』平塚市教育委員会
56　大野　悟　1992　「天神前遺跡第５地点」『平塚市埋蔵文化財シリーズ22』平塚市遺跡調査会
57　上原正人　1992　「天神前遺跡第６地点」『平塚市埋蔵文化財シリーズ21』平塚市遺跡調査会
58　明石　新　1992　「天神前遺跡第７地点」『平塚市埋蔵文化財調査報告書第９集』平塚市教育委員会
59　細野高伯　1987　「四之宮山王Ｂ遺跡」『平塚市埋蔵文化財シリーズ４』平塚市遺跡調査会
60　明石　新　1993　「山王Ｂ遺跡第２地点」『平塚市埋蔵文化財シリーズ23』平塚市遺跡調査会
61　若林勝司　1992　「山王Ｂ遺跡第３地点」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書５』平塚市教育委員会
62　明石　新　1991　「神明久保遺跡第１地区」『平塚市埋蔵文化財シリーズ19』平塚市遺跡調査会
63　青地俊朗　1989　「神明久保遺跡」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書２』平塚市教育委員会
64　高杉博章　1989　『神明久保遺跡第３地区』神明久保遺跡調査団
65　若林勝司　1991　「神明久保遺跡第３地区」『平塚市埋蔵文化財調査報告書第８集』平塚市教育委員会
66　小島弘義　1990　「神明久保遺跡第５地区」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書３』平塚市教育委員会
67　青地俊朗　1990　「梶谷原Ｂ遺跡」『平塚市埋蔵文化財シリーズ16』平塚市遺跡調査会
68　大野　悟　1992　「梶谷原Ａ遺跡第２地点」『平塚市埋蔵文化財シリーズ21』平塚市遺跡調査会
69　河合英夫・田村良照　1994　『構之内遺跡』構之内遺跡発掘調査団
70　若林勝司　1994　「構之内遺跡第２地点」『新町遺跡他発掘調査報告書』平塚市遺跡調査会

「階段付き地下式坑」について

小　山　裕　之

はじめに

平成４年10月から平成６年３月まで，筆者は七沢神出遺跡の調査に参加し，中世に比定される２基の階段付き地下施設を検出するに至った。本遺跡の報告書は６年３月に刊行し，その中でこれら２基の遺構を地下式坑として扱ったが，調査団長の戸田哲也先生から従来よりの地下式坑の形態概念である「地平面下に竪壙を掘り下げてこれを入口部とし，その底面から横へ掘り拡げて本体である地下室を築いた遺構」とは形態的に異なる点について指摘された。その後，報告書・研究論文等をあたるにつれ竪坑による入口部ではなく，七沢神出例に類似する斜行階段付きの地下式坑が数例存在することを確認した。

従来の地下式坑概念に基づくならば，はたしてこれらを地下式坑に含みこむべきかどうかという点で筆者も疑問を持つ一方，地下式坑概念はまだ形態，機能とも解明されるには至っておらず，資料も少ない時期に九州南部の地下式横穴の形態を流用して概念化した部分が多々あるため，現状における発見資料の増加・研究の進展に伴い判明してきた遺構の形態の多様性，時間軸，平面分布などの実情にそぐわなくなってきている点もあるのではないかとも考えた。筆者はそこで地下式坑の概念を現状に照らし合わせて，「地表面から地下に向かって何らかの入口施設を設け，その底面から横方向に地下室を築いた中世期の遺構」とやや幅広く解釈して七沢神出遺跡検出の遺構も地下式坑の範疇に含まれるものとし，改めて，形態論を中心に新資料としての七沢神出遺跡の階段付き地下式坑を分析のうえ，他の形態との比較検討を試みることとする。

Ⅰ　研究略史

地下式坑の研究史はすでに中田英氏（1977），半田堅三氏(1979)の論考の中で詳細に述べられており，重複を避けるためにここでは略史として記述するに留めたい。

1915～1934（戦前）

地下式坑研究は梅原末治氏が『考古学雑誌』(1915)に福井県敦賀市発見の25基の遺構を発表したことに端を発している。梅原氏はそれらの遺構に「横穴古墳」の名称を与え，その後の九州での弘津忠文氏(1924)，吉村鐵臣氏(1929)らの調査発表も同様に横穴墓の一形態としてとらえているが，中山平次郎氏は「所謂横穴は横式壙穴を代表し，又大分のものは竪式壙穴を代表し，恰も其中間形若しくは混合形として彼の地下式土壙が来るといふや

うに考察される。」として地下式古墳との形態的区別を行っている。また，東日本でも御茶の水高等師範学校跡地において発見された地下式坑を契機に上田三平氏の墳墓説（1934），服部清五郎氏の貯蔵庫・地下式倉庫説（1934），大場磐雄氏の麹室説，隠匿壙説（1934）など地下式坑の性格を巡ってさまざまな仮説が提唱されたが，その中でも麹室説，隠匿説が有力視された時期である。また，調査自体は偶発的な発見によるものが殆どであり，その構築時期も古墳時代末期から近世初頭と幅広い時期差で論議されていた。

1950年代

1950年代には注目すべき発見が相次いでなされている。1953年には井ノ頭公園で中世期に比定される人骨を伴う地下式坑の発見，金井塚良一氏による埼玉県東松山市高坂（1955）での地下式坑の報告，また1959年には東京都府中市高倉遺跡で地下式坑が平安期の住居址を切り込む形で検出され，地下式坑の時期的上限を把握しえた最初の例となり，これにより地下式坑の構築時期が概ね中世以降という認識を得ることが出来た。また，東京都武蔵野市で検出された地下式坑（1959年発見）は紀年銘入りの板碑５枚を出土し，吉田格氏はその報告（1963）で墳墓説をとっている。

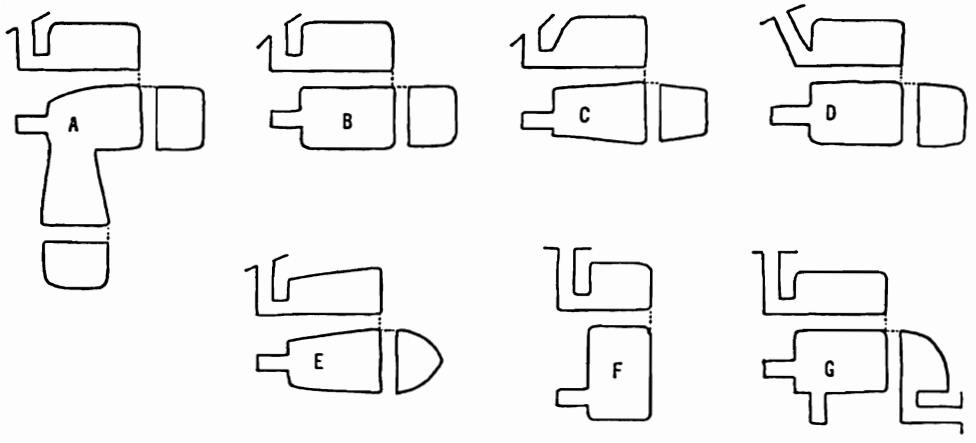
1960年代

1960年代からは日本の高度経済成長に伴い，各地で開発事業が進行する中で，相次ぐ発見がなされている。中でも東京都青梅市今井城址（1967），千葉県松戸市大谷口城址（1962）から地下式坑が検出されたことは中世城郭址との係わりを考察するうえで貴重な発見となり，大谷口城址の報告者（大川・岩崎 1970）は貯蔵庫的な役割を想定して，「地下式土倉」と命名している。

1970年代～現在

1970年代に入ると今までの蓄積された資料を基に地下式坑の形態分類が試みられるようになる。鎌田幸男氏は東京都西多摩群瑞穂町の「地下式横穴」調査を基にして初めて形態分類（1970）を行い，氏はそこで平面形と横断面形の差異による３類に分類した。しかしながら鎌田氏の分類は地下式横穴と地下式坑が分離されておらず問題点を残していた。塚田明治氏は1975年に神奈川県逗子市池子須賀神社裏の「地下式壙」調査を基に神奈川県下における竪坑型地下式坑をＡ～Ｇの７類に形態分類（第１図）された。現在知られている形態のほぼ全てが摘出されており，竪坑型地下式坑の形態を本格的分類とした点で高く評価されよう。

1977年には中田英氏が地下式坑研究の集大成とも言うべき「地下式壙研究の現状について」を発表している。氏は数多くの資料を駆使し，研究史，立地，形態分類，構築年代，機能等を考察し，現時点においても地下式坑研究において指針となる論文である。氏はこの論文の中で地下式坑の基本的定義を『「地平面下に竪壙を掘り下げてこれを入口部とし，その底面から横へ掘り拡げて本体である地下室を築いた遺構」と規定する』として定義さ



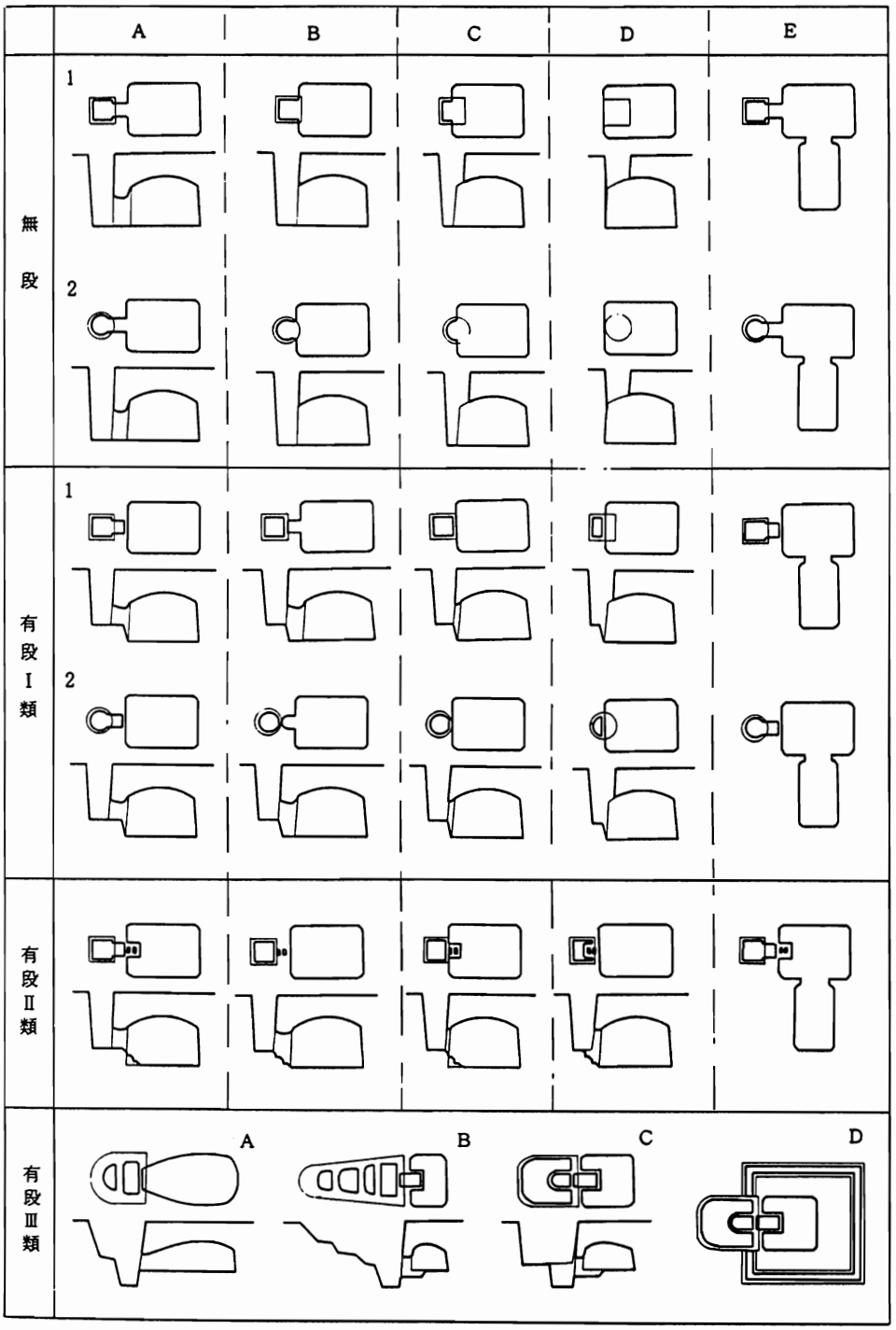
第１図　塚田明治分類（1975）

れた。「細かく形態分類したことにより形態的に多彩であるという事実以外のものは何も引き出し得ていないのである。むしろ，巨視的な観点で分類する必要がある」として入口部を竪坑によって構成される地下式坑の形態を４類８種に分類し，機能としては貯蔵庫説の立場を取るとともに，墳墓説に疑問を投げかけている。この段階では階段付き地下式坑は検出例が無かったこともあろうが，形態分類には含まれておらず，あくまでも竪坑型地下式坑の分類となっている。

中田英分類（1977）

- ＡⅠ類１ ── 竪壙１ヶ所
  - ＡⅠ類１ ── 地下室単室
    - ＡⅠ類１ ── 竪壙に付属施設をもたない
    - ＡⅠ類２ ── 竪壙に階段をもつ
    - ＡⅠ類３ ── 竪壙に足かけ穴をもつ
    - ＡⅠ類４ ── 竪壙に溝を切り込む
  - ＡⅡ類 ── 地下室複室
  - ＡⅢ類 ── 地下室３室以上
    - ＡⅢ類１ ── 地下室間にレベル差なし
    - ＡⅢ類２ ── 地下室間にレベル差あり
- ＢⅠ類１ ── 竪壙２ヶ所

1979年には半田堅三氏の「本邦地下式壙の類型学的研究―特に関東地方を中心として」と題する論文が発表された。半田氏は「地下式壙というものは，中世初頭に発生し一定の機能をもって展開し，中世末にその終末を迎える遺構と考えること」という概念のもとに論考を展開し，ここで初めて竪坑のみではなく斜坑に階段を有する地下式坑を分類に取り込み，形態を４類29種に分類（第２図）した。先の中田氏による地下式坑形態分類定義を拡大したことになる。ただし，この場合，中田分類との連続性・連関性について考慮されているかどうかを問題点としておかねばならない。



第2図　半田堅三分類（1979）

半田分類について多少触れると，半田氏は大きく無段と有段に分類したが，無断～有段Ⅱ類までは形態的には中田分類のA類に全て含まれるもので，唯一，階段付き（有段Ⅲ類）のものが，中田分類に加えられたと見ることもできる。中田分類の発表から僅か2年後の論文であるにも係わらず，29種類におよぶ形態分類を行った点は，中田氏が指摘する巨視的観点をどのように受けとめられていたのかが問題になるであろう。

次に半田氏は地下式坑の機能を，分布，立地条件，出土遺物，他の遺構との関連等から中世墳墓として中田説と真っ向から対立する見解を示し，「江戸時代のものなどは地下倉とでも呼んではっきり区別することが大事である。」とするとともに，地下式坑の機能を論ずる場合，特に周辺の遺構との関連性について注意を促している。さらに1994年には半田氏は「地下式壙再考―市原市台遺跡中世遺構の分析」の中で氏の墳墓説を一歩進めると同時に，地下式坑の群構成についてとりあげられ，群の類型化を試みる中から，個々の形態のみならず中世遺構と地下式坑との関連性を有機的に捉える研究方法を提示し，今後の地下式坑研究の一つの方向性を指し示した点においては評価されねばならない。

その中で本稿で論じられる階段付き地下式坑については比較的近年（80年代以降）になってから検出されはじめたものであるためか，特に議論の対象とはなっていない。

Ⅱ　階段付き地下式坑の様相

Ⅰ章では，研究史を概略してみたが，現在数多くの地下式坑の発見例が増加し，報告書が刊行される中，形態論・群構成の抽出・類型化など地下式坑の研究方法はかなりの進展をみている。その中で類例は少ないものの現実に斜行階段付きの地下施設が検出され，類例も今後増加していくであろうことを鑑みると，地下式坑研究の進展に伴いこれらの遺構の取扱が今後問題となることは必然であろう。

また，地下式坑の機能が貯蔵庫説・墳墓説の対立をみたまま確定するに至っていない現在において，規模・形態が異なれば，たとえば同じ貯蔵用施設といっても，機能が異なる可能性がある。しかし，その機能を先に決定することが未確定の状態においては，やはり形態差を基本としなければならないであろうし，その場合の形態差はどの程度の基準において分類・分離されるかが問題となり，再び中田氏の言われる巨視的観点の指摘に繋がるところでもある。すでに半田分類において階段付き地下式坑が地下式坑の分類範囲に加えられ，横方向に地下室を設けることに主目的があるとすれば，本稿で用いる「階段付き地下式坑」も大きくは地下式坑概念に加えられるものであろうと考えたい。但し，斜行階段となる入口部の日常性（開閉性）が機能問題と強く係わる可能性を考慮したうえで，ひとまず「階段付き地下式坑」として地下式坑分類の中での独立性を示しておきたい。

1．階段付き地下式坑の形態と類例

神奈川県厚木市七沢神出例

七沢神出遺跡（第３図）では２基の斜行階段付地下式坑が検出されている。本遺跡は七沢城址内の中心部に近い郭に位置し，調査前から肉眼で人工的な平場が観察しえた地形である。調査の結果，14世紀後半～15世紀代の中世遺構が多数検出され，地下式坑もまた，それらの遺構と重複して発見されている。報告書の中で筆者は地下式坑が構築されていた時期を第１期として本遺跡上においては最も古い遺構であると認定した。また，これらと同時併存関係にある遺構は確認されておらず，地下式坑のみが存在した時期である。第２期には地下式坑内の土層観察等から掘立柱建物址の構築に伴い２基の地下式坑は埋め立てられたものと推定され，地下式坑が機能していた期間は短いものであったろうと思われる。

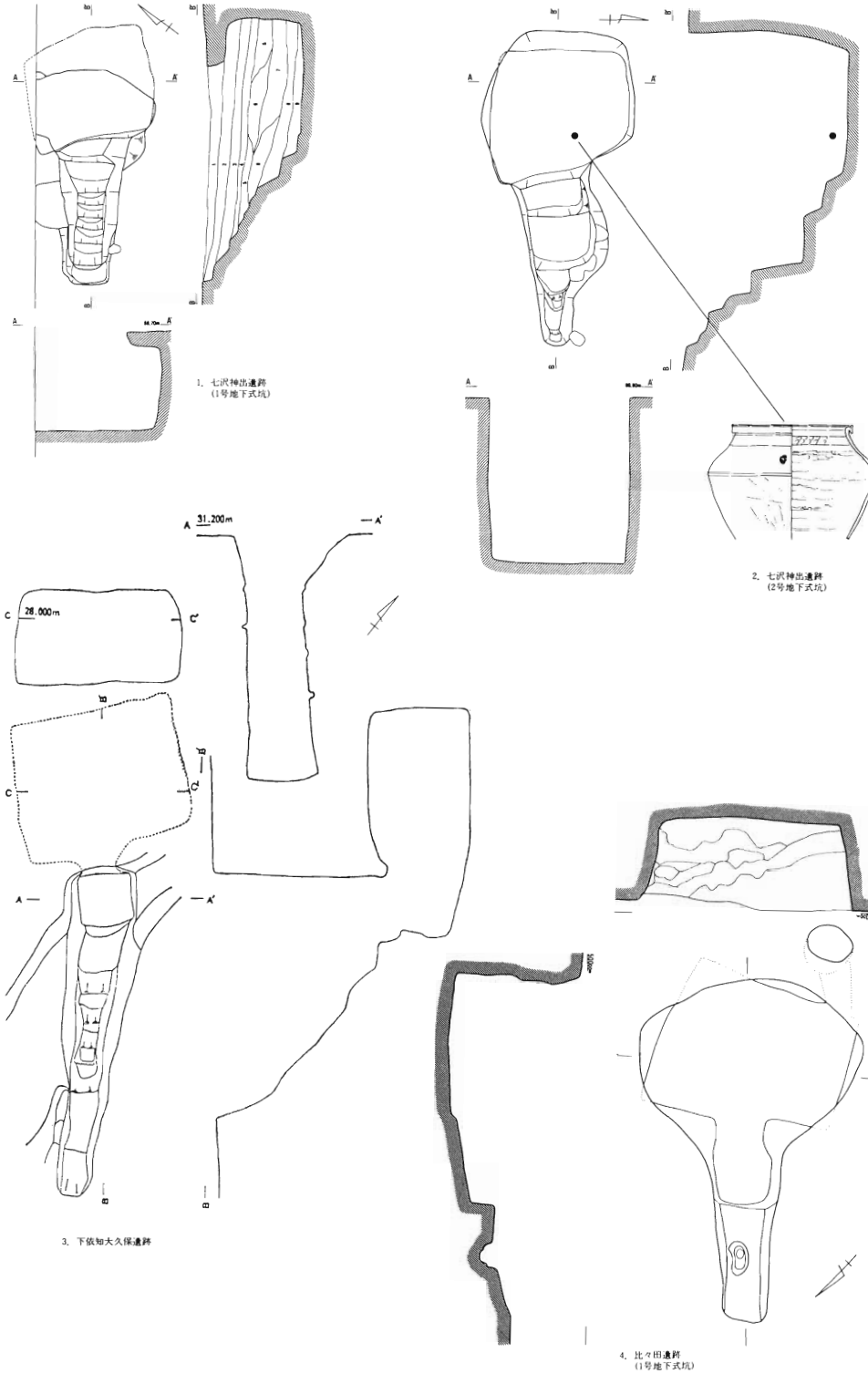
１号地下式坑（第３図－１）の開口部は北東を向き地下室も同じ主軸方位をとり，地下室に通じる入口部には地表面から数えて８段の階段が構築されており，幅も平均して約80㎝と出入りには十分な幅を取っている。地下室の平面プランは不整方形を呈し，床面積は4.2㎡を測り，工具痕跡は観察されなかった。

２号地下式坑（第３図－２）の開口部はほぼ真東を向いており，地下室の主軸方位と同様である。地下室に向かう入口部には６段の階段が構築されているが，４段目と５段目との落差（90㎝）が大きいことと，１号地下式坑と比較して入口の傾斜角が大きいことが特長的である。出入り口の幅は１～２段目にかけてはやや狭いもののそれ以下では１ｍ近くも幅をとってあり，１号同様に出入りに際しては何ら不便さは感じず，恒常的な出入口としての使用には十分耐えうるものである。また，地下室は不整方形を呈し，床面積は5.3㎡を測る。これら地下式坑の特長として複数の階段を有するために入口部の平面形態が長大になることが挙げられる。

次の問題は１号と２号地下式坑が同時併存関係にあったものか，あるいは時期差があるかということであるが，１・２号地下式坑の位置関係は互いに一定の距離をあけて互いの存在を意識しているように構築されていることと，形態が類似していることから同時期に比定されても良いと考える。なお，本址からは常滑甕（14世紀後半代）の大破片が出土しており，遺構の廃絶の仕方やその後の掘立柱建物址との時期からみて14世紀後半代～15世紀初頭にかけて構築されたものとみて差し支えないであろう。七沢神出例は現在までのところ階段付き地下式坑としては最も古く，かつ形態的に完成された例として今後の一つの基準となり得るものである。

千葉県山武郡市田向城跡例

最近の報告の中で同じ中世城郭内からの出土例として田向城跡（1994）Ⅳ郭で検出された２基の地下式坑（第４図）が共通した立地条件・形態を示している。001号地下式坑

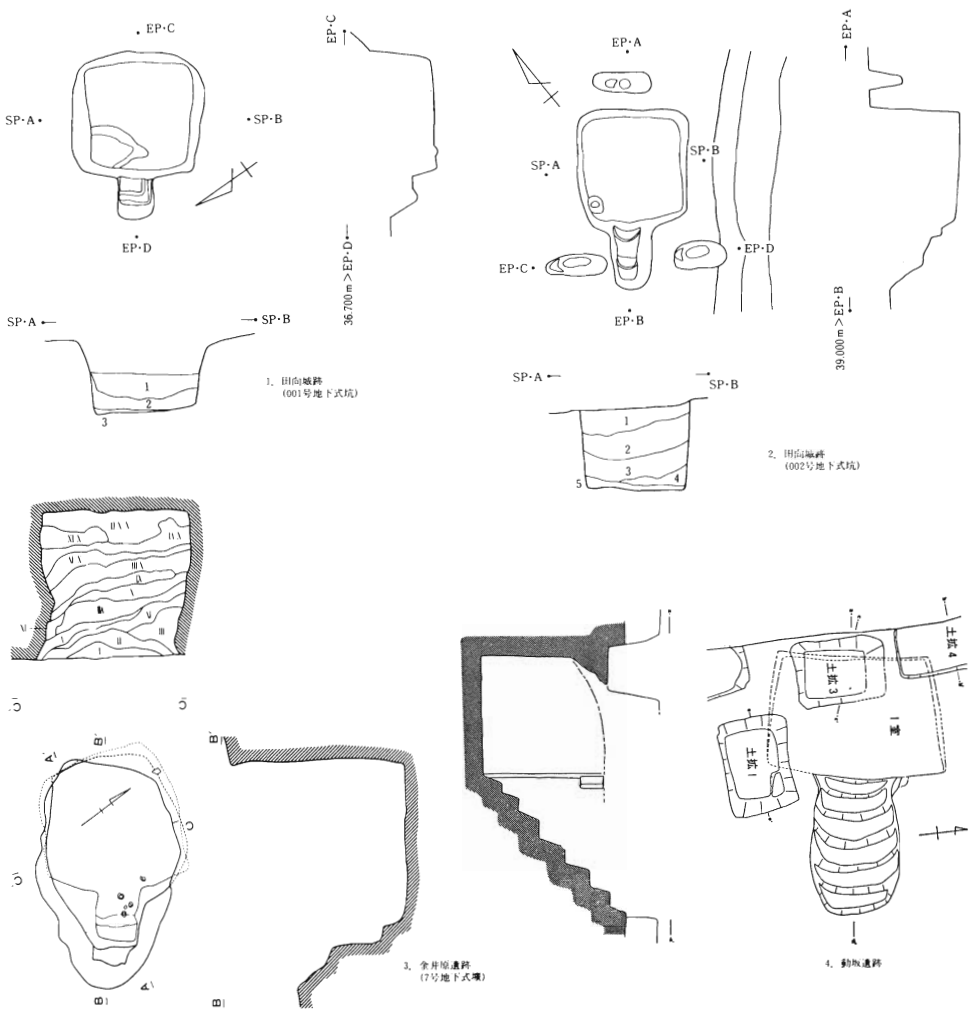


第3図　階段付き地下式坑の類例（1）

（第４図－１）は周溝を有する階段を１段，002 号（第４図－２）は２段の階段を入口部に持ち竪坑部分は検出されておらず，地表面に３基のピットを伴っており，おのおのの地下室の床面積は001号が2.8㎡，002号が2.4㎡と七沢神出，下依知大久保例と比較すると地下室の平面積が半分以下となる小型の地下式坑である。時期は古くとも16世紀中葉に比定されており，現段階で七沢神出例を最古とし田向城跡を終末期とするならば，階段付き地下式坑の存続期間は15～16世紀の約１世紀とすることができる。また，報告者は遺構の性格を地下式倉庫としている。

神奈川県厚木市下依知大久保遺跡例

下依知大久保遺跡（1987）では１基の地下式坑（第３図３）が発見されており，本類



第４図　階段付き地下式坑の類例（2）

型が検出された最初の例となろう。入口部に6段からなる階段を有し，そのために入口部の平面形態が長大となっているところは七沢神出例に極めて類似している。地下室の床面積も4.6㎡を測り，規模的にも近い値を示している。ここで報告者は「一般的に地下式土壙は縦坑のみであるが，本遺跡においては堆積土層において切り合いが不明確であるため階段状の施設が地下式土壙と同時におこなわれたかどうかははっきりしない。」として，遺構の重複状態をあえて考えざるを得ない状況を作り出している。従来竪坑で構成されたものが地下式坑であるとの認識に立てば，未見の階段付き地下式坑に遭遇した報告者がそう解釈せざるをえなかったことも肯首できる。

神奈川県伊勢原市比々多遺跡例

比々多遺跡(1986)では5基の地下式坑が発見され，そのうち1号地下式坑（第3図－4）が本類例に極めて近い形態を示している。検出状況が良好ではないため判然としない部分は多々あるものの，入口部は竪坑ではなく斜行状になり，実測図からすると少なくとも2段の階段が観察される。地下室は方形を呈し，床面積は約6㎡を測る。大型の地下式坑である。

東京都町田市金井原遺跡例

町田市金井原遺跡 －金井山弘福寺址－（1990）では9基の地下式坑が発見され，そのうち7号地下式壙（第4図－3）は入口部に地表面から2段の階段を有しており，地下室の面積は約4㎡を測る。金井原遺跡例は「群」の類型としては（4）類c種に分類され，報告者は遺構の性格を出土遺物等から墳墓と推定している。また，本例は形態的には七沢神出例と比較し，階段部分での斜行化があまり顕著ではないためＡＩ類2（中田分類）に取り込まれる可能性もある。

東京都文京区動坂遺跡例

ここでは地下式坑ではないが類似した遺構例として動坂（1978）の地下室（第4図－4）を挙げておく。動坂では江戸期に比定される4基の地下室が発見されている。そのうち最も遺存状況の良好な1号地下室は入口部に6段の階段を有し，地下室に至っている。地下室の形状は長方形を呈し，床面積約6㎡を測る。機能は貯蔵施設が想定されており，階段付き地下式坑の機能を探るうえで参考資料となろう。ただし，本例が地下式坑の発展形態の一つとして系統的に繋がりを持つものかどうかは現状では明らかにされていない。

以上，類例（5遺跡7例）で述べてきた地下式坑は入口地表面から連続した階段を有し，地下室に至る点で，従来から認識・分類されている地下式坑とは異なる形態を呈しており，

研究史の章で述べた諸氏の分類ＡⅠ類２（中田分類）・有段Ⅲ類ｂ種（半田文類）と比較してみると，一見，両者の中間タイプ的形態とも思われる。そこで本類型がこれらと系統的に同一線上から派生したものか，あるいは全くの別系統上に存在するものかどうかを検討してみよう。

半田氏は有段Ⅲ類ｂ種を「竪坑底が主室より深く，１段以上の段差をもって地下室に至るもの。」「竪坑がＤの字形の平面形を呈し，数段の階段となりその最下段から主室へと上がる。」と規定し，古代的な様相を残すものとして土壙の壁の一部を堀り込み竈としている遺構が進化したものが有段類であるとしている。この竈の意識が「１段以上の段差をもって地下室にいたるもの。」に表出されるわけであるが，これに対し階段付地下式坑には地表面から階段が連続する点では共通するものの階段最下部から地下室への段差は認められず，ここでは竈の意識は皆無である。次に中田分類によるＡⅠ類２「階段を付設する竪壙と単室の地下室からなる地下式壙である。」との比較において本類型では，階段から地下室への繋がりは同様であるが，入口部に竪坑の意識が存在していない。

入口部には有段Ⅲ類ｂ種，最下段から地下室にかけてはＡⅠ類２に類似している点で，中間タイプ的形態と表現したが，仮に中間タイプとするならば，ＡⅠ類２と有段類ｂ種には系統・あるいは発展的な繋がりが必要となる。しかしながら，そこには系統的な繋がりは見いだせないのである。なぜならば，有段Ⅲ類は竪坑に対する意識が希薄で，竈を大型化させることを目的として進化した形態であるのに対して，ＡⅠ類２は竪坑で構成された地下式坑からの発展形態として，あくまでも竪坑の存在を意識し，当初からある一定の規模を持つ地下室を有する点において，両者の構築目的・発生要因は異なるからである。

よって階段付き地下式坑もこれらの分類形態とは区別して考えることが妥当であり，その形態的特長は「単室の地下室を持ち，入口部が地表面から地下室まで連続する階段で構成されるために入口部は斜道化する」とすることができる。また，本類型はさらに細分が可能であり，現状では最古の七沢神出例「入口部が長大化し，地下室も大型」の類型１と，最終末に当たる田向城跡例「入口部はあまり長大化せず，地下室の規模も小型」の類型２とする２類型に分けられる。進化論的には類型１から類型２への規模縮小化という変遷が想定されるが，類型２は田向城跡例のみであること，２つの類型には約１世紀の時間幅と地域の隔たりが存在し，中間に位置する資料が確認できないことから現段階で両者の繋がりを明確に論ずることは困難である。

２．階段付き地下式坑の分布・立地

分布は現在の類例では南関東に限られている。特に入口部が長大化する類型１は神奈川県伊勢原市・厚木市に集中して検出され，類型２は今のところ千葉県山武郡市田向城跡例のみであることから今後は地域性についても考慮せねばならないだろう。また，類例のう

ち2遺跡4例（全体の約60%）までが城郭内からの検出であり，その立地条件に特異なあり方を示している。

3．階段付き地下式坑の機能

本類型も竪坑型地下式坑と同様に出土遺物は乏しく，遺物・形態の両面から機能を類推することは極めて困難であり，形態から機能を類推するしかないのが現状である。しかしながら，竪坑型地下式坑と比較して階段付き地下式坑が極めて特長的な入口部で構成されていることから，形態のみからでもその機能を類推・特定することが十分可能かと思われる。その形態的特長から推定すると，地表面から連続した階段を有するということは地下室への出入行為を容易にするための入口施設であること。それらを構築する動機として恒常的な使用目的が考えられること。現状での検出例が中世城郭内におけるものが多いこと（田向城跡の報告中では七沢神出例より地下室の床面積が半分以下であるが地下式倉庫と想定している），地下室の専有面積が4～6㎡と一定量の物品を貯蔵する空間としては十分であること。また，地下式坑ではないが，貯蔵施設としての機能がほぼ確定している遺構である動坂遺跡の地下室にも類似した形態を示しており，地下室の面積も動坂とほぼ同等の6㎡を測るなど，貯蔵施設としての空間の取り方に共通性が見いだされること等から，貯蔵庫的な役割が想定される。その場合，中世城郭内からの検出が目立つため，他の地下式坑に比べて使用者に階層差を見いだすことができ，階段付き地下式坑は武士階級が使用する地下式坑と類推することもできよう。

唯一，金井原遺跡のように墳墓葬祭的な遺物を伴出している例が注目されるが，遺物の出土状況が覆土中からの出土であることから，地下式坑が廃絶された後に投棄された可能性も考えられる。さらにこのような墳墓葬祭的遺物を伴うことが常態であるならば，唯一例ということは疑問視されねばならないだろう。従って，これをもって墳墓とする積極的な要因にはなりえない。

Ⅲ　ま　と　め

以上，階段付き地下式坑についての形態・機能を検討してきたが，改めてここで4項目に整理してみることとする。

① まず，階段付き地下式坑は従来の竪坑型地下式坑とは入口部の形態差によって地下式坑分類の中に独立した位置を占めるものであることを明らかにしておきたい。形態的には「単室の地下室を持ち，入口部が地表面から地下室まで連続する階段によって構成されるために入口部は斜行化する」特長を持ち，さらに規模の大小によって2類型に細分される。

② 時期は現況では七沢神出遺跡例を最古（14世紀後半～15世紀初頭）とし，田向城跡例を最終末（16世紀中葉）とする約1世紀間であること。

③ 現況での分布は南関東に限られている。特に類型1は神奈川県厚木市・伊勢原市に集中しており，類型2は千葉県田向城跡例のみである。立地は半数が中世城郭内からの検出例である。

④ 機能は，形態的に恒常的出入を意識した入口部で構成されており，地下室の専有面積も一定量の物品を貯蔵するには十分であることから貯蔵施設としての役割を担っていたものと推定される。

また，竪坑型地下式坑の各類型が中世期全般を通じて存在し，立地条件においても多様化を示す中で，本類型の消長期間が戦国期を時代的背景とし，立地においても中世城郭内からの検出が多数であることも，階段付き地下式坑の出現・消滅を探る上で無視できない要因であろう。今後は階段付き地下式坑の資料増加を期待してさらに考察を深めて行きたい。なお，末筆ではあるが本稿を執筆するにあたって御助力・御助言頂いた戸田哲也先生に感謝する次第である。

（注）

本文中で使用している地下式坑の「坑」については，学史を尊重するならば「壙」を使用すべきところであろうが，「壙」には墓穴という意味が加味されているために，遺構の機能が確定していない段階では「坑」を使用することが適切と思われる。また，本文中に引用されている参考文献の用語に関しては忠実に原書の用語を使用している。

参考文献

安孫子昭二他　1979　「小山田遺跡群Ⅰ」
安孫子昭二他　1983　「小山田遺跡群Ⅱ」
新井　真博他　1984　「多摩ニュータウンNo.278 遺跡」
石川日出志他　1990　「大門遺跡」
伊藤　玄三他　1986　「法政大学多摩校地遺跡郡Ⅰ－A地区－」
伊藤　敏行他　1986　「多摩ニュータウンNo.460 遺跡」
伊藤　正義他　1983　「受地だいやま遺跡発掘調査概報Ⅱ」
今井　恵昭他　1986　「多摩ニュータウンNo.352・253 遺跡」
岩崎　陽一他　1984　「多摩ニュータウンNo.396 遺跡」
碓井　三子他　1990　「金井原井遺跡群Ⅲ」
梅原　末治　　1915　「越前敦賀郡の遺跡遺物」『考古学雑誌』5－8
江藤　昭　　1987　「下依知大久保遺跡」
奥田　直栄　　1967　「青梅市今井に於ける中世城郭の調査」
梶原　勝他　　1987　「宇津木台遺跡群Ⅸ」

川島　雅人他　1982「多摩ニュータウンNo.457 遺跡」
川島　雅人他　1987「多摩ニュータウンNo.271・452 遺跡」
栗城　譲一他　1981「多摩ニュータウンNo.519 遺跡」
甲崎　光彦他　1987「多摩ニュータウンNo.125 遺跡」
小林　博範他　1987「多摩ニュータウンNo.451 A・452 遺跡」
小林　深志他　1984「多摩ニュータウンNo.407 遺跡」
小山　裕之　1994「七沢神出遺跡」
斉藤　進他　1988「多摩ニュータウンNo.692 遺跡」
境　雅仁他　1993「及川柳流遺跡・及川宮ノ下遺跡」
榊原　松司　1981「下宿内山遺跡発掘調査概報５」
滝澤　亮他　1986「比々多遺跡群」
滝澤　亮　1989「殿村遺跡」
武田　均他　1984「多摩ニュータウンNo.358 遺跡」
武田　均他　1986「多摩ニュータウンNo.799 遺跡」
千葉　裕道他　1984「多摩ニュータウンNo.751 遺跡」
塚田　明治　1975「逗子市池子須賀神社裏地下式壙と類例遺構について」『横須賀考古学会年報18』
中田　英　1977「地下式壙研究の現状について」『神奈川考古』２
中山平次郎　1921「考古雑録（五）」『考古学雑誌』119
中野　修秀　1994「田向城跡」
林田　利之　1992「駒井野荒追遺跡」
半田　堅三　1976「台遺跡Ｂ地点の調査」『上総国分寺台発掘調査概要』
半田　堅三　1978「台遺跡Ａ地点の調査」『上総国分寺台調査概報』
半田　堅三　1979「本邦地下式壙の類型学的研究」『伊知波良』２
半田　堅三　1993「地下式壙再考」『市原市文化財センター研究紀要』
持田　友宏　1969「神明上発見の地下式横穴古墳調査報告」『日野の歴史と文化』２
山口　慶一他　1991「多摩ニュータウンNo.450 遺跡」
山村　貴輝他　1990「四葉地区遺跡」
雪田　孝　1976「東京都府中市新発見の地下式横穴」『考古学ジャーナル』121
及川　良彦他　1992「多摩ニュータウンNo.496 遺跡」

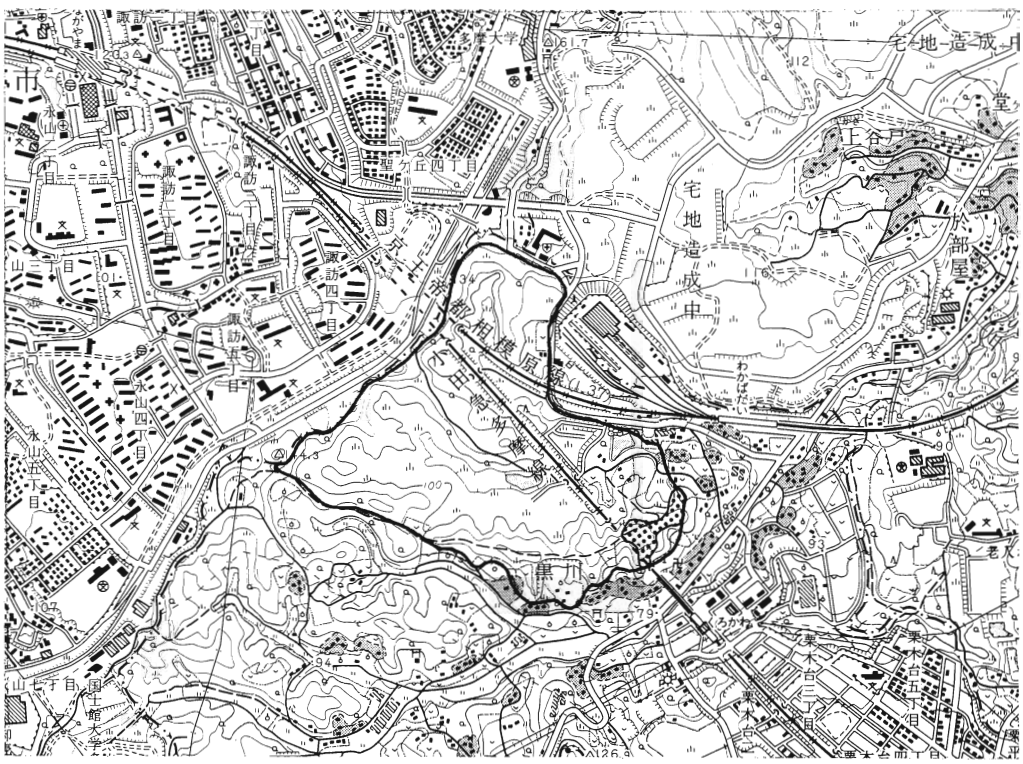
資料紹介

川崎市麻生区宮添遺跡の墓壙について

碓　井　三　子

はじめに

ここに紹介する資料は，川崎市麻生区黒川字宮添113－４他に所在する宮添遺跡の発掘調査で検出された墓壙群の資料である。本遺跡は黒川地区遺跡群として調査された20の遺跡のうちのひとつで，遺跡群の南東端に位置する。宮添遺跡の発掘調査は黒川地区遺跡調査団により1986年２月17日より1991年３月31日まで実施され，調査面積は約20,000㎡に及び，縄文時代，奈良・平安時代，近世の集落跡や，第２次世界大戦時の遺構・遺物が検出されている。これに先立って1973年度に増田精一氏により遺跡の一部が調査されており，縄文時代中期の集落跡が確認されている（増田　1973)。今回，ここに紹介するのは縄文時代中期加曽利Ｅ式期の墓壙群である。現在整理作業中であるが，現段階までに確認された事項や疑問点についてここで報告することとする。



第１図　遺跡位置図（黒線で囲った範囲が，黒川地区遺跡群。アミ部分が宮添遺跡）

1．遺跡の位置と立地

本遺跡は小田急多摩線黒川駅の北西約500ｍに位置しており，東西に延びる丘陵の東端に立地する。東側200ｍには多摩川の支流である三沢川が流れている。本遺跡は西から東方向になだらかに下る丘陵上の平坦面とその西南側に続く急斜面からなり，標高は109ｍ～124ｍを測る（第１図）。

縄文時代中期後半の集落跡は丘陵上の平坦面にあって，その分布はＡ地区とＤ・Ｅ地区の２ヵ所に分かれている（第２図）。北東側のＤ・Ｅ地区は，加曽利Ｅ式期の住居址約90軒が環状に分布しているが，Ｄ・Ｅ地区の北側と南側の一部は後世の土砂崩れにより消失している。環状集落の中央部には，約90基の土壙が集中して検出されているが，このうち19基から完形の土器などが出土しており，その出土状況からみて墓壙と考えられる。

西側のＡ地区では住居址は５軒と少なく，まばらに分布している。５軒のうち３軒は加曽利Ｅ式期に属するが，ほかの２軒は立ち上がりが削平されており，遺物がほとんど出土していないため時期は不明である。土壙は住居址より南寄りの丘陵上平坦面の縁辺部周辺から15基が検出され，そのうち５基が墓壙と考えられる。

2．調査経緯

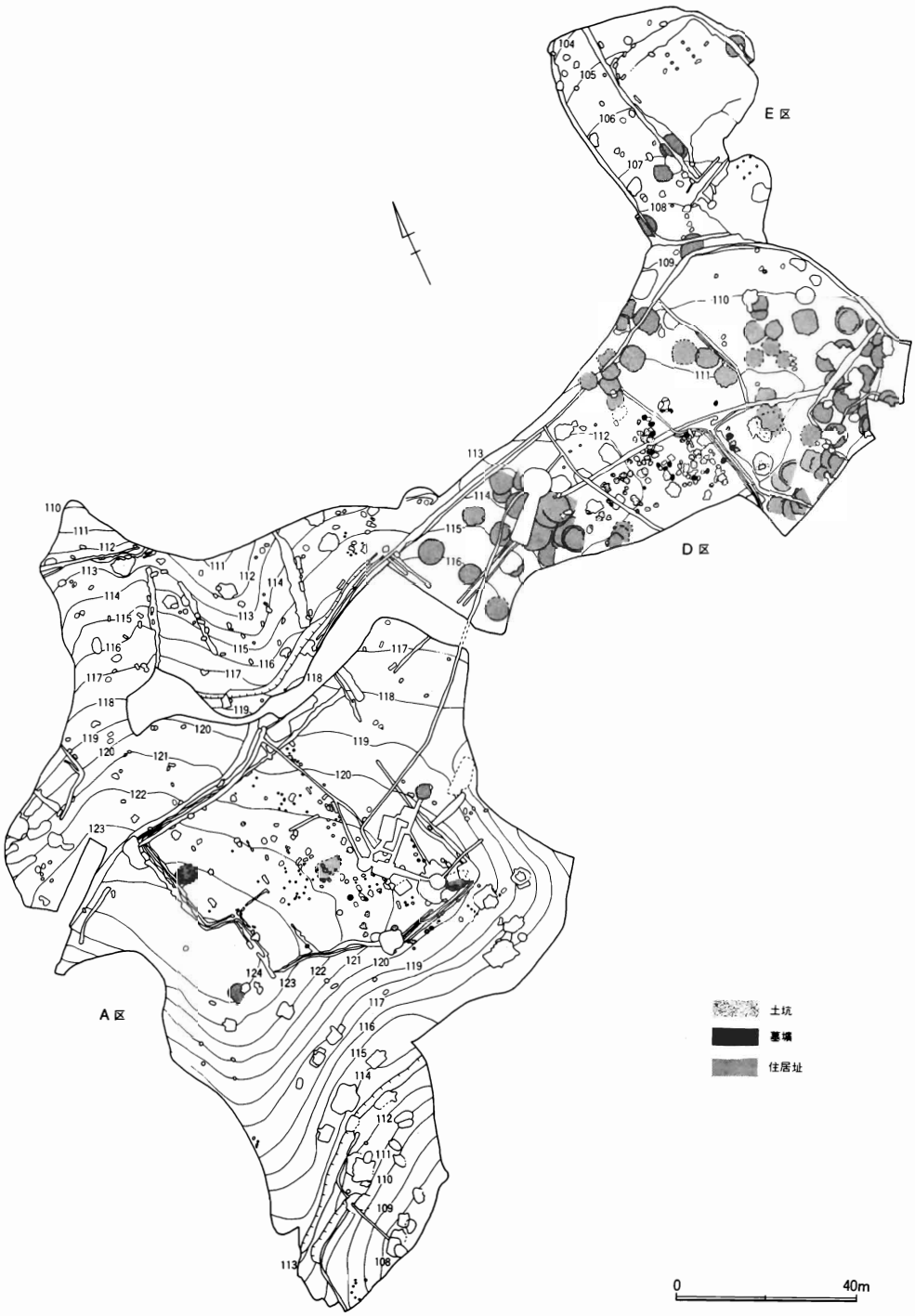
環状集落の中央部から検出された墓壙ないし土壙群は，地山ローム面での遺構プラン確認作業の時点ではその存在を確認することができなかった。Ｄ・Ｅ地区の住居址群の調査後，集落中央部の倒木痕等の攪乱を掘り下げたところ，倒木痕脇よりほぼ完形の深鉢を伴う土壙が検出された。この土壙は遺物の出土状況からみて墓壙と考えられ，周辺にも未検出の墓壙の存在が予測された。このため集落の中央部を再度綿密に精査し，地山ロームよりしまりが弱い部分やロームがブロック状に広がる部分を慎重に掘り下げていったところ，新たに90数基の土壙が検出された（第２図）。

これらの覆土は一般の土壙にみられるような黒色土の堆積がみられないために地山でのプランが確認しにくいことから調査は困難をきわめた。しかし，作業が進行するにつれ土壙の覆土部分と地山面の乾燥の度合いが違うこと，覆土の色調が僅かに暗いことが判明した。

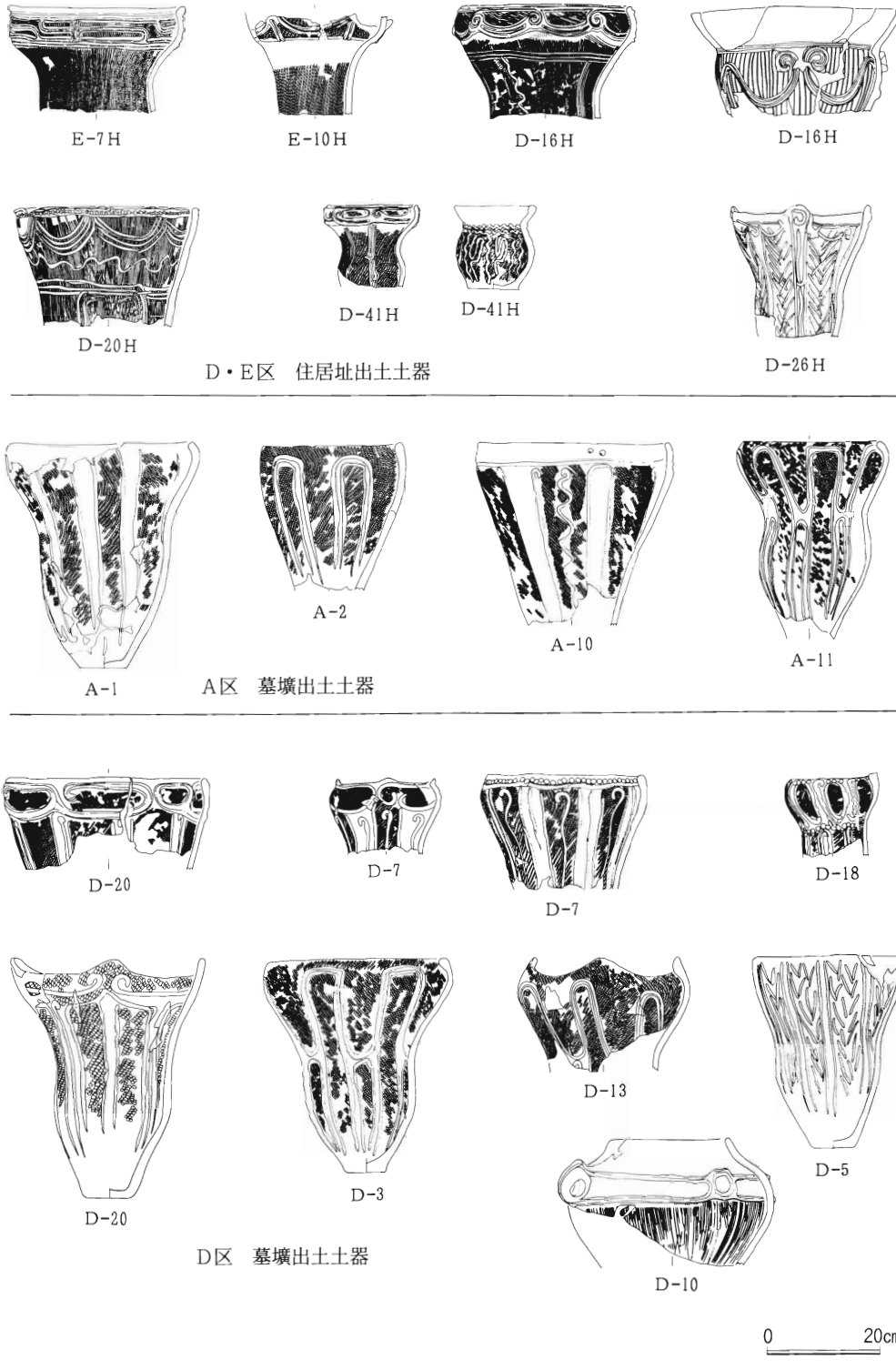
この結果をふまえてＡ地区でも慎重な精査を行ったところ，15基の土壙が検出された。

3．墓　壙

土壙のなかで遺物の出土状態からみて墓壙と考えられるものは，Ｄ・Ｅ地区で19基，Ａ地区で５基を数える。これらはＤ・Ｅ地区では集落中央部の東側に環状に分布している。その特徴を箇条的に記すと次のようになる。



第2図　宮添遺跡の遺構配置図（縮尺 400分の1）


E-7H
E-10H
D-16H
D-16H
D-20H
D-41H
D-41H
D-26H
D・E区　住居址出土土器
A-1
A-2
A-10
A-11
A区　墓壙出土土器
D-20
D-7
D-7
D-18
D-20
D-3
D-13
D-5
D区　墓壙出土土器
D-10
0
20cm

第3図　土器実測図

形状　平面形では円形が多く，このほかに楕円形・隅丸長方形・隅丸方形などがあり，断面形はタライ状を呈するものがめだつ。

規模　径ないし長軸は小さいもので45㎝，大きいもので133㎝と差があるが，100㎝前後のものが多い。深さも20㎝から120㎝前後と幅がある。

覆土　黄褐色土やブロック状のローム土などを主体とする埋め土と考えられる層で，暗褐色土などが一部にみられるものもある。墓壙であることの前提として埋め土の有無，人骨埋葬の可能性を確認するため，いくつかの墓壙の覆土の磁曲線分析と脂肪酸分析を行った。磁曲線分析については草柳卓二氏に依頼し，現在までに分析が終了しているものに関しては，伴出した土器より上層は自然堆積，それより下層は埋め土という結果がでている。埋め土層が検出されたことで意識的に墓壙の埋め戻し作業が行われたことが確認された。また覆土上層の自然堆積層は，土圧や遺体の腐敗などの要因により埋め土が埋没したのちに堆積したものと想定される。

脂肪酸分析については，埼玉大学の小池裕子教授に鑑定を依頼したが，残念ながら良好な結果は得られなかった。この原因については分析資料とした土壌サンプルの採集箇所や方法，分析に出す前の保管状態などの問題が考えられ，資料採集のむずかしさが感じられる。

遺物　主に土壙の壁際より出土しており，ほぼ完形の深鉢土器，胴部下半を欠く深鉢土器，深鉢土器の大形破片，両耳壷土器の大形破片（約1/3），器台，縦形石匙などがある。深鉢土器の出土状況は，正位・逆位・横位・入れ子状とバラエティーに富んでいる。

時期　墓壙の時期は，出土遺物から概ね加曽利ＥⅢ式後半からⅣ式段階と考えられる（第３図）。これに対し宮添遺跡の加曽利Ｅ式期の住居址群は現段階の整理状況では主に加曽利ＥⅡ式からⅢ式前半段階に相当すると思われ，住居址群と墓壙群には時間差がみられる。この点については，住居址の時期などさらに検討を進めていく必要がある。ただ墓壙には，加曽利ＥⅢ式以前の遺物が埋設されていなかったことは確認されている。

6．ま　と　め

宮添遺跡の墓壙群については，単純に土器の比較からみれば，墓壙は集落が廃棄された後に構築されたこととなる。同期の集落形態からみて，この区域で集落が営まれた時期には中央部が墓域として全く意識されていなかったとは考えにくい。たとえば加曽利ＥⅠ・Ⅱ式段階の時期に遺物が埋設されなかった墓壙があったと想定すれば，今回は墓壙に含めなかった土壙群が集落に伴う時期の墓壙である可能性は充分考えられる。前述したとおり集落中央部に90数基の土壙が分布しており，その検出経緯，覆土，形状，分布域など墓壙と類似している。これらの土壙が全て墓壙であったとは一概にいいきれないが，現状では

土壙の時期・性格を決定するための根拠がないため，土壙の土層分析の結果などを参考にさらに検討していく必要がある。

また，墓壙群を構築した集団については，黒川地区遺跡群やその周辺では今のところ加曽利Ｅ式期後半の集落址は検出されておらず，どの集団が構築したのか，また宮添遺跡の集落の関連性や集落の存続期間などについても今後の整理作業の進展をまって検討していきたい。

参考文献

玉口時雄・他　1989「川崎市黒川地区遺跡群・宮添遺跡・他の調査」『第13回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』

神奈川考古同人会　1978「神奈川県における縄文時代中期後半土器編年試案」第１版『神奈川考古』4

神奈川考古同人会　1980「シンポジウム'80 縄文時代中期後半の諸問題－とくに加曽利Ｅ式と曽利式の関係について－」『神奈川考古』10

長沢　宏昌　1994「甲府盆地周辺にみられる縄文時代中期の土壙墓と土器棺再葬墓－井戸尻Ⅲ式～曽利Ⅰ式期の場合－」『研究紀要』10　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

増田精一・松浦宥一郎　1977『多摩』

山本　孝司・1993『神奈川県における加曽利Ｅ式の変遷について－神奈川編年案の再検討より－」『神奈川考古』29

原稿の募集!!

『考古論叢 神奈河』は，みなさまで育てる会誌です。

考古学界に衝撃を与えるような論文も歓迎しますが，身近かにある資料の紹介や，研究ノートも気楽に投稿してください。

第5集の締切は，平成7年12月末日を予定しております。ふるっての投稿をお待ちしております。

編集委員　寺田兼方　村田文夫　河野眞知郎

問い合わせ先　村田文夫　Tel　044－866－7632（自宅）

『考古論叢 神奈河』の寄稿要綱

1. 神奈川県考古学会の学術研究会誌として『考古論叢 神奈河』を刊行する。
2. 発行は，年1回とする。
3. 会誌の内容は，原則的には神奈川県及びそれに関連する主題についての論文，資料・研究ノート等の発表の場とする。
4. 原稿の採否等，編集・刊行上の業務は，編集委員会を設けて，実施する。
5. 会誌に寄稿することができる者は，次のとおりとする。
   (1) 神奈川県考古学会の会員。
   (2) 編集委員会から調査・研究上に必要があって寄稿の依頼がなされた者。
   (3) その他，編集委員会で適当と認めた者。
6. 寄稿する原稿の枚数は，原則として制限しない。ただし，編集委員会の判断で，紙数等の関係から分割して掲載することもありうる。
7. 原稿料金の支払い，掲載料金の徴収は行わない。

執筆者紹介　遠藤秀樹（川崎市立白山小学校教諭）
滝澤亮（盤古堂考古資料室代表）
明石新（平塚市博物館学芸員）
小山裕之（玉川文化財研究所）
碓井三子（黒川遺跡発掘調査団）

目次英訳　禿仁志（東海大学文学部教授）

考古論叢 神奈河　第4集

平成7年4月27日　印刷
平成7年4月30日　発行

編集・発行　神奈川県考古学会
事務局　東海大学文学部考古学研究室内
〒259-12　平塚市北金目1117
郵便振替　横浜 4－71208
神奈川県考古学会

印刷　文昭堂印刷株式会社
〒210 川崎市幸区南幸町3－20
電話　044－533－2121（代表）

KOKO-RONSO KANAGAWA vol.4

CONTENTS

Articles

Hideki ENDOU — The Beginning of the Kofun Period in Kanagawa Prefecture

Makoto TAKIZAWA — A Viewpoint to the Establishment of the Kofun Period in Odawara District
—From the Aspects of Pottery Recovered from the Loc. II of Chiyo-Nakanomachi Site and the Loc. VI of Chiyo-Minamihara Site in Odawara City—

Arata AKASHI — Some Aspects of the Sagami Provincial Government Office (相模国府) Area
—From the Analysis of Settlements Situated in the Area—

Hiroyuki KOYAMA — On "the Underground Chamber (地下式坑) with Steps"

Research and Note

Mitsuko USUI — The Grave Pits at Miyazoe Site, Aso, Kawasaki City

1995.4